

下総町不光寺遺跡

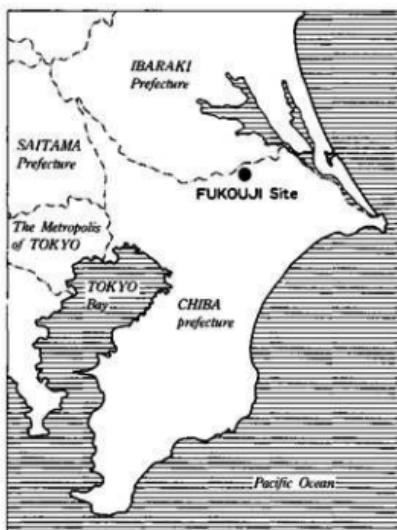
—一般県道成田下総線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書III—

1993

千葉県土木部
財団法人 千葉県文化財センター

しもふさふこうじ
下総町不光寺遺跡

—一般県道成田下総線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書III—



1993

千葉県土木部
財団法人 千葉県文化財センター

序 文

利根川を北に望む下総町は、古くから自然環境に恵まれ、数多くの遺跡が分布していることで知られています。

千葉県土木部は、新東京国際空港周辺の道路整備の一環として、隣接する成田市と下総町とを結ぶ一般県道成田下総線の道路改良事業を計画しました。千葉県教育委員会は、同事業地内に所在する埋蔵文化財の取扱いについて、千葉県土木部をはじめ、関係諸機関と協議を重ねてまいりましたが、その結果、路線内にかかる遺跡については、やむを得ず発掘調査による記録保存の措置をとることになりました。財団法人千葉県文化財センターが調査を実施することになりました。このうち成田市内に所在する遺跡については、すでに2冊の報告書を刊行しています。

このたび、下総町内に所在する不光寺遺跡の整理作業が終了し、報告書として刊行することになりました。古墳時代後期と平安時代の集落跡を主体とする遺跡でしたが、なかでも井戸の中から多量の馬骨が検出されるなど、当時の人々の生活を考えるうえで、大変貴重な資料も発見されております。本報告書が学術的な資料としてはもとより、郷土の歴史への理解を深めるために、より多くの方々に活用していただけることを願っております。

最後に、発掘調査から報告書刊行にいたるまで、いろいろ御指導いただいた千葉県教育委員会をはじめ、千葉県土木部、千葉県香取土木事務所、下総町教育委員会、地元関係諸機関の御協力に厚くお礼を申し上げるとともに、発掘調査および整理作業に協力された調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成5年3月

財団法人 千葉県文化財センター

理事長 奥山 浩

凡　　例

1. 本書は千葉県土木部による一般県道成田下総線建設工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査から報告書作成にいたる業務は、千葉県土木部の委託を受け、文化庁ならびに千葉県教育委員会の指導のもとに、財団法人千葉県文化財センターが行った。
3. 本書に収録された遺跡は不光寺遺跡（香取郡下総町名木字不光寺963ほか）で、遺跡コードは341-003である。
4. 第2図に用いた地形図は国土地理院発行の佐原西部、下総滑川1/25,000である。
5. 本書は調査部長天野 努、調査部長補佐深沢克友、班長三浦和信の助言のもとに主任技師 萩原恭一が編集した。6・7に記した以外の部分は萩原恭一が原稿執筆を行った。
6. 附章の動物遺体についての分析、写真撮影および原稿執筆は国立歴史民俗博物館助教授の西本豊弘氏に依頼した。ご協力に深く感謝いたします。
7. 玉製作関連石器については技師矢本節朗、繩文土器については技師安井健一が分類、原稿執筆を行った。
8. 発掘調査から報告書刊行にいたるまで、下記の諸機関や方々から多くのご協力とご助言を得た。記して感謝いたします。

千葉県教育委員会、千葉県土木部道路建設課、香取土木事務所、下総町教育委員会。

本文目次

序文
凡例
本文目次
挿図目次
本文写真目次
表目次
図版目次

| | |
|-------------------|----|
| 序章 | 1 |
| 1 節 調査にいたる経緯 | 2 |
| 2 節 調査の概略 | 2 |
| 3 節 遺跡の位置と歴史的環境 | 4 |
| 1 章 遺構 | 7 |
| 1 節 古墳時代の堅穴住居 | 8 |
| 2 節 平安時代の堅穴住居 | 22 |
| 3 節 古墳 | 24 |
| 4 節 溝 | 26 |
| 5 節 棚列 | 26 |
| 6 節 井戸 | 28 |
| 2 章 遺物 | 31 |
| 1 節 古墳時代住居出土の土器 | 32 |
| 2 節 平安時代住居出土の土器 | 50 |
| 3 節 その他の遺構出土の土器など | 54 |
| 4 節 土製品 | 56 |
| 5 節 砥石、石鐵その他の石製品 | 57 |
| 6 節 玉製作関連石器 | 58 |
| 7 節 陶磁器、金属器 | 62 |
| 8 節 繩文土器 | 64 |
| 3 章 まとめ | 67 |
| 附章 | 73 |

挿図目次

| | |
|--|----|
| 第1図 成田下総線内遺跡分布図 | 3 |
| 第2図 不光寺遺跡と周辺の遺跡位置図 | 5 |
| 第3図 不光寺遺跡全測図 | 6 |
| 第4図 SI 1・SI 2住居、カマド実測図 | 9 |
| 第5図 SI 3・SI 5住居、SI 3カマド実測図 | 11 |
| 第6図 SI 8カマド実測図 | 12 |
| 第7図 SI 6・SI 7・SI 8・SI 9住居実測図 | 13 |
| 第8図 SI 10・SI 11・SI 12住居実測図 | 15 |
| 第9図 SI 14・SI 15住居、SI 11・SI 12・SI 14カマド実測図 | 17 |
| 第10図 SI 16・SI 17・SI 18住居、SI 18カマド実測図 | 19 |
| 第11図 SI 19・SI 20・SI 21住居実測図 | 21 |
| 第12図 SI 4・SI 13・SI 22・SI 23・SI 24住居、SI 4・SI 13カマド実測図 | 23 |
| 第13図 SX 1・SX 2実測図 | 25 |
| 第14図 溝・柵列実測図 | 27 |
| 第15図 SE 1・SE 2実測図 | 29 |
| 第16図 SE 3実測図 | 30 |
| 第17図 SI 1出土土器実測図 | 33 |
| 第18図 SI 1・SI 2出土土器実測図 | 35 |
| 第19図 SI 3・SI 5・SI 6・SI 7出土土器実測図 | 37 |
| 第20図 SI 8・SI 9・SI 10出土土器実測図 | 39 |
| 第21図 SI 10・SI 11出土土器実測図 | 41 |
| 第22図 SI 12・SI 14出土土器実測図 | 43 |
| 第23図 SI 15・SI 16出土土器実測図 | 45 |
| 第24図 SI 16・SI 17・SI 18出土土器実測図 | 47 |
| 第25図 SI 18・SI 19・SI 20・SI 21出土土器実測図 | 49 |
| 第26図 SI 4出土土器実測図 | 51 |
| 第27図 SI 4・SI 13・SI 23・SI 24出土土器実測図 | 53 |
| 第28図 その他の遺構出土土器等実測図 | 54 |
| 第29図 土玉実測図 | 55 |
| 第30図 土製品実測図 | 56 |

| | |
|----------------------|----|
| 第31図 砥石実測図 | 57 |
| 第32図 砥石・石鐵その他の石製品実測図 | 58 |
| 第33図 玉製作関連石器実測図 | 61 |
| 第34図 陶磁器・金属器実測図 | 63 |
| 第35図 繩文土器拓影図 | 65 |

本文写真目次

| | |
|-----------------------|----|
| 本文写真1 ウマの下顎骨 | 76 |
| 本文写真2 ウマ上顎骨とウシ上顎骨・下顎骨 | 77 |

表 目 次

| | |
|-------------------|----|
| 第1表 玉製作関連石器属性表 | 60 |
| 第2表 住居構造一覧 | 72 |
| 第3表 ウマ上顎臼歯の咬合面の長さ | 75 |
| 第4表 ウマ下顎臼歯の咬合面の長さ | 75 |
| 第5表 ウシ上・下顎歯最大長 | 75 |

図版目次

| | |
|---|--|
| 図版1 遺跡周辺航空写真 | |
| 図版2 SI 1全景、SI 1土製勾玉出土状況、SI 1石出土状況、SI 2全景 | |
| 図版3 SI 2玉出土状況、SI 2カマド周辺遺物出土状況、SI 3全景、SI 4全景 | |
| 図版4 SI 4カマド遺物出土状況、SI 4墨書き土器出土状況、SI 5全景、SI 6全景 | |
| 図版5 SI 6貯蔵穴遺物出土状況、SI 7全景、SI 8全景 | |
| 図版6 SI 8カマド遺物出土状況、SI 9全景、SI 10全景 | |
| 図版7 SI 10カマド遺物出土状況、SI 11全景、SI 12全景 | |
| 図版8 SI 12カマド、SI 13全景、SI 13遺物出土状況(1)、(2) | |
| 図版9 SI 14全景、SI 14カマド遺物出土状況、SI 15全景 | |
| 図版10 SI 16全景、SI 17全景、SI 17貯蔵穴 | |
| 図版11 SI 18全景、SI 18遺物出土状況(1)、(2) | |
| 図版12 SI 19全景、SI 20全景、SI 21全景 | |

- 圖版13 SI 22全景、SI 23全景、SI 24全景
- 圖版14 SE 1全景、SE 2全景、SE 2馬骨出土狀況(1)
- 圖版15 SE 2馬骨出土狀況(2)、SE 3全景、SX 1全景
- 圖版16 SX 2全景、SA 1全景、SA 2全景
- 圖版17 SA 3全景、SA 4全景、SD 4全景
- 圖版18 SD 16全景、SD 17全景、SD 18全景
- 圖版19 SI 1、SI 2出土土器
- 圖版20 SI 3、SI 5、SI 6、SI 8出土土器
- 圖版21 SI 9、SI 10出土土器
- 圖版22 SI 10、SI 11、SI 12出土土器
- 圖版23 SI 12、SI 14、SI 15、SI 16、SI 17出土土器
- 圖版24 SI 17、SI 18、SI 19、SI 19、SI 21、SI 4出土土器
- 圖版25 SI 4、SI 13、SI 23出土土器
- 圖版26 墨書土器、土製品
- 圖版27 土玉、砾石
- 圖版28 玉製作関連石器
- 圖版29 陶磁器
- 圖版30 金属器、繩文土器

序 章

序 章

1 節 調査にいたる経緯

千葉県土木部では、成田市周辺の交通量の増加に伴う道路網整備の一環として、一般県道成田下総線建設事業を計画した。この道路が計画された成田市北部から下総町にかけての地域は、埋蔵文化財が数多く所在する地域である。このため、成田下総線の建設に先立ち、千葉県教育委員会では千葉県土木部道路建設課と慎重な協議を重ねた。その結果、路線内に所在する埋蔵文化財については記録保存の措置がとられることになり、財団法人千葉県文化財センターが発掘調査を実施することになった。これらの遺跡のうち、成田市内に所在した遺跡についてはすでに2冊の報告書となって刊行されている。

2 節 調査の概略

(1)発掘調査

【昭和62年度】

調査期間：昭和62年6月1日～9月30日

調査面積：確認調査 上層350m²/3,500m² 下層136m²/3,500m²

本調査 上層3,500m² 下層 0 m²

発掘担当者：主任調査研究員 鳴田浩司（6,9月）、同 永沼律朗（6～9月）

組織：調査部長 堀部昭夫、部長補佐 岡川宏道、班長 矢戸三男

(2)整理作業

【平成3年度】

整理期間：平成3年10月1日～平成4年3月31日

作業内容：水洗・注記の一部からトレイスまで。

整理担当者：主任技師 萩原恭一

組織：調査部長 天野 努、部長補佐 阪田正一、班長 宮 重行

【平成4年度】

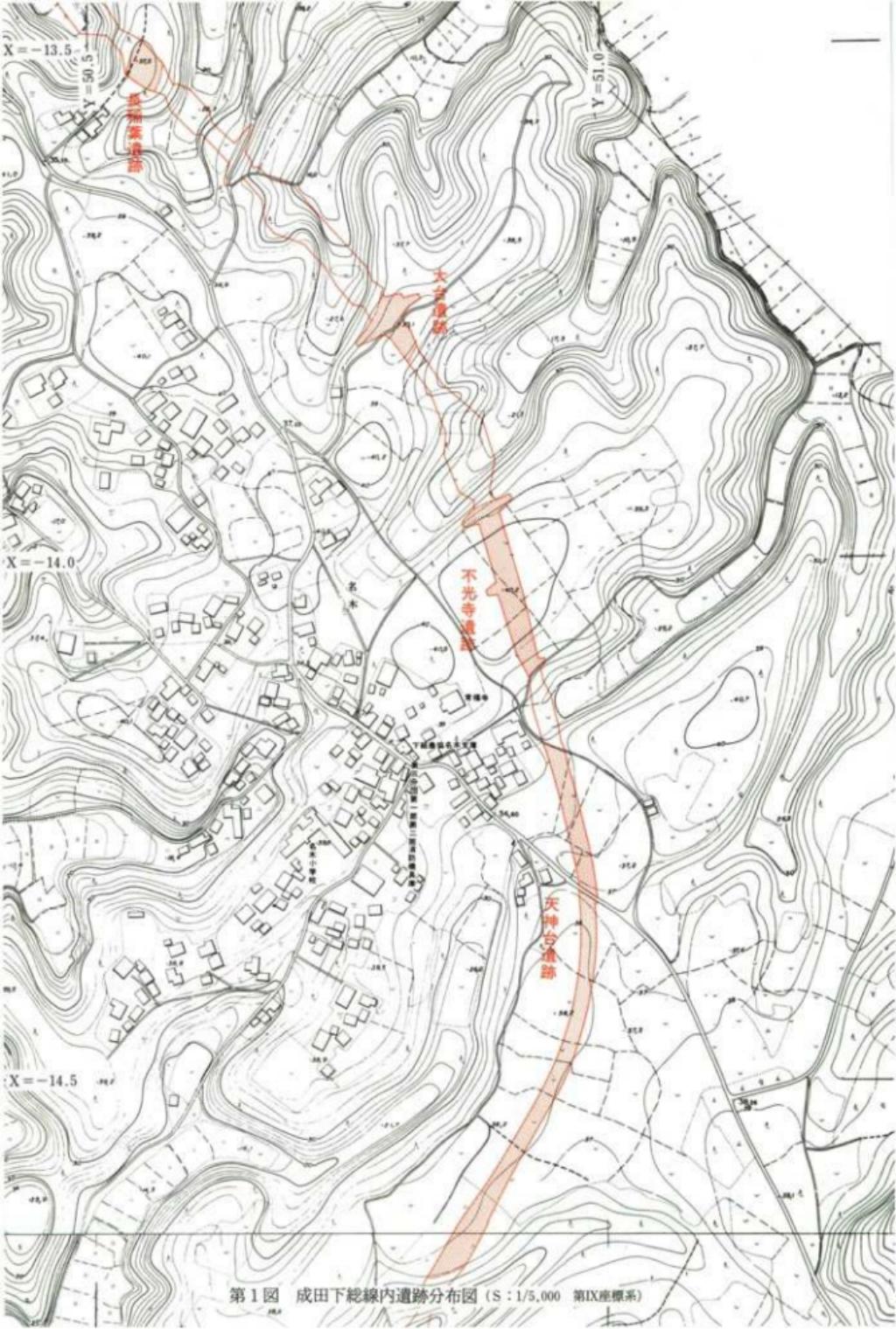
整理期間：平成4年6月1日～6月30日・8月1日～10月31日

平成5年3月31日の報告書刊行をもって業務終了。

作業内容：レイアウト、原稿執筆から報告書の刊行まで。

整理担当者：主任技師 萩原恭一

組織：調査部長 天野 努、部長補佐 深沢克友、班長 三浦和信



第1図 成田下總線内遺跡分布図 (S : 1/5,000 第IX座標系)

3 節 遺跡の立地と歴史的環境

不光寺遺跡の所在する下総町は、千葉県北部の中央や東寄りのところにある利根川に面した町である。利根川は西から東に流れており、川に面した部分は低地が細長く広がり、その南側には下総台地が迫っている。台地から利根川に向かって小さな川が幾本か流れ込み、台地はそれによって侵食された細長い谷によって分断され、その支谷からはさらに細かな支谷が無数に台地に入り込んでいる。不光寺遺跡は利根川の開拓平野から1kmほど南の台地上にあり、東側に利根川に向かう大きな谷が走り、遺跡南北両端の斜面はその谷に向かう二つの平行する小支谷の谷頭部分である。遺跡中央の平坦部分の標高は39mである。

周辺の歴史的環境についてみてみると。まず先土器時代については調査例が少なく、実態がわかるものとしては青山宮脇遺跡が知られる程度である。

縄文時代の遺跡では原山向遺跡で有舌尖頭器が出土しており、草創期の遺跡として知られている。早期では東隣の神崎町西之城貝塚が井草期の貝塚として有名であり、そのほかには下総町猿山・和田遺跡、菊水城遺跡、前原遺跡、鎌部長峯遺跡がある。時期は撫糸文の段階から三戸、田戸下層あたりのものが多い。前期の資料は少なく、中期は名古屋十二代遺跡があり、斜面部分には貝層を伴う。時期は阿玉台から加曾利EIVである。後期は低段丘上にある大原野貝塚があり、加曾利B3から安行の段階のものである。晩期には先の大原野貝塚で安行から千綱、荒海期の資料が出土している。また地蔵原愛宕遺跡で荒海段階の資料が見つかっている。

弥生時代の資料は少なく、大和田坂ノ上遺跡、大日台遺跡、新山遺跡等が知られているのみである。このうち新山遺跡では中期の再葬墓が検出されている。

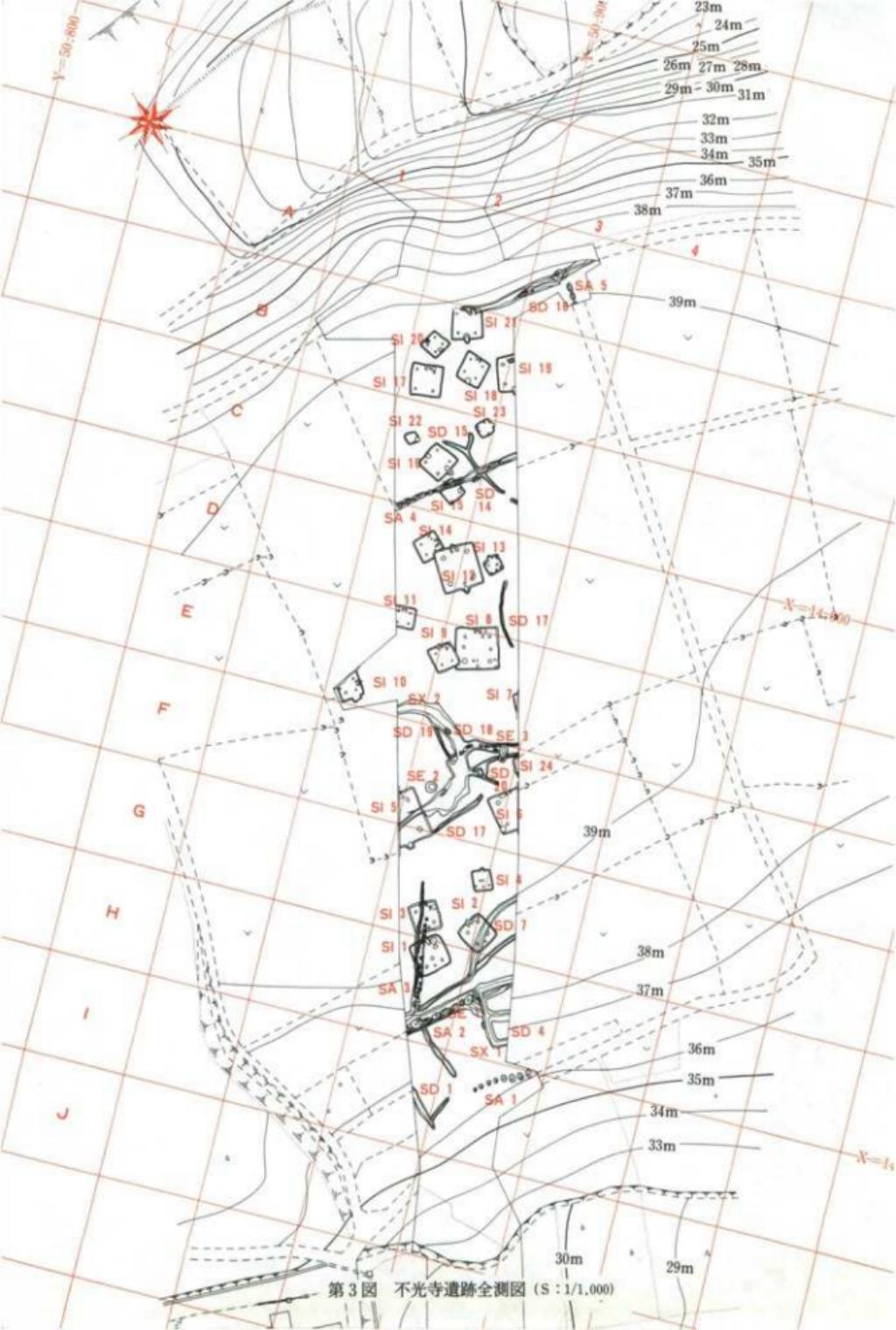
古墳時代のこの地域は房総半島でも特異なほど多くの石枕が出土している。栗山・猫作古墳群では1埋葬施設から3個の石枕が見つかって話題になったほかに、神崎町小松古墳出土とされている石枕が東京国立博物館に6点収蔵されており、また西大須賀渡戸、高倉からも出土している。それにみあうように、大和田玉造遺跡群のような大玉造遺跡群が存在し、滑石製模造品の製作段階にいたるまで生産が続くのである。古墳についてみると、大日山古墳が比較的古い段階のもので、全長54mの前方後円墳に木炭桟の主体部が知られている。また下総型段階の埴輪を出す古墳も多数あり、木挽崎古墳群、坂ノ上古墳群、栗山・猫作古墳群などがそれに相当する。横穴墓群では西大須賀横穴墓群に45基が集中していたようである。集落では大台遺跡、遠地・上敷遺跡、寺ノ下I遺跡、天神台遺跡、小野女台遺跡が規模の大きなものである。

歴史時代の集落では遠地・上敷遺跡、天神台遺跡、寺ノ下遺跡、青山富ノ木遺跡、青山中峰遺跡が挙げられる。また名木庵寺、龍正院の寺院のほかに龍正院瓦窯跡も存在する。

中世では菊水城、大須賀城、小帝城、助崎城、名木城などの城館跡が知られているほかに、道作出土の古瀬戸四耳壺、乗願寺所蔵の信楽三耳壺なども存在している。



第2図 不光寺遺跡と周辺の遺跡位置図 (S: 1/25,000) 地図版新編



第3図 不光寺遺跡全測図 (S : 1/1,000)

1章 遺構

1章 遺構

1節 古墳時代の竪穴住居

SI 1 (第4図、図版2)

調査区南寄りのG-3、H-3グリッドに所在する。SA 1によって覆土上層の一部が破壊されている。遺構平面形は方形で、規模は $6.78 \times 6.61\text{m}$ 、面積は 43.76m^2 である。確認面からの掘り込みの深さは約60cmである。カマドは北西壁中央にあり、住居主軸方位はN-39°-Wである。4本の主柱穴のほかに南東壁側に出入り口ビットと思われる深さ14cmの柱穴がある。4本の主柱穴の深さは第1主柱穴が71cm、第2主柱穴が94cm、第3主柱穴が72cm、第4主柱穴が85cmである。北隅カマド脇に方形掘り込みの深さ50cmの貯蔵穴があり、カマドの両脇袖下には大きさの異なるビットが対で掘られている。西側が深さ7cm、東側が深さ9cmである。また、住居中央やや出入り口ビット寄りの床面には炉のような浅い掘り込みがあるが被熱度は低い。カマドは当遺跡のものとしては遺存状況の良好なものである。袖下のビットはカマドに付随するものと考えられる。

遺物出土量は本遺跡中最多であるが、床面直上のものは意外に少なく、覆土中層以上のものが圧倒的に多い。特に貯蔵穴の対壁にあたる南西隅付近に多く集中しているのは注目する必要がある。

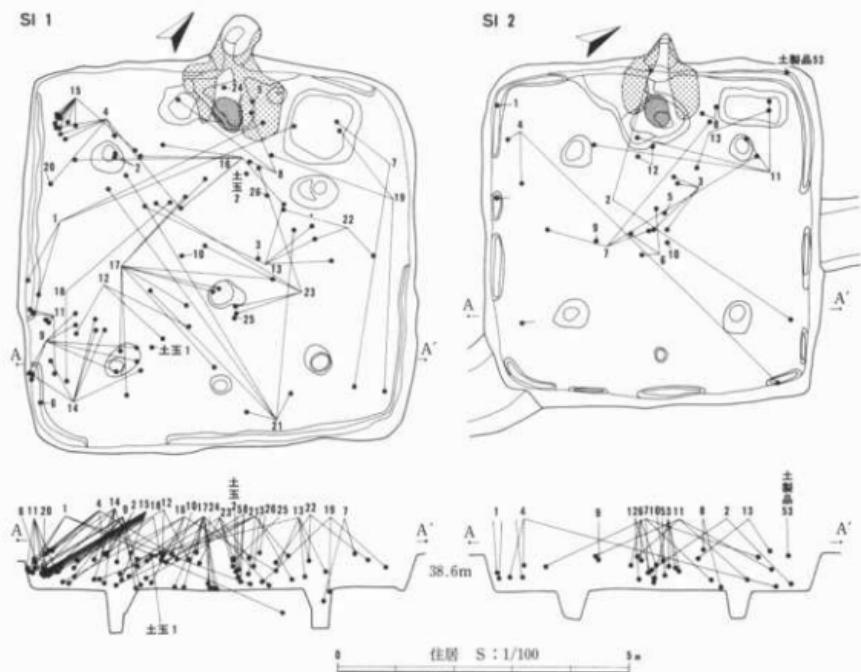
SI 2 (第4図、図版2・3)

調査区南寄りのG-3・4グリッドに所在する。溝状遺構によって壁の一部を破壊されている。平面形はほぼ方形で、規模は $5.94 \times 5.74\text{m}$ 、面積は 33.34m^2 である。確認面からの掘り込みの深さは約60cmである。カマドは北西壁中央にあり、住居主軸方位はN-60°-Wである。床面には4本の主柱穴のほかに、南東壁寄り中央に出入り口ビットと考えられる深さ12cmの小さなビットが一つ検出されている。主柱穴の深さは第1主柱穴が54cm、第2主柱穴が40cm、第3主柱穴が48cm、第4主柱穴が43cmである。住居東隅のカマド脇には深さ52cmの長方形の貯蔵穴が掘り込まれている。周溝は途切れながらめぐっていた。カマドは低い両袖と火床部が確認されている。

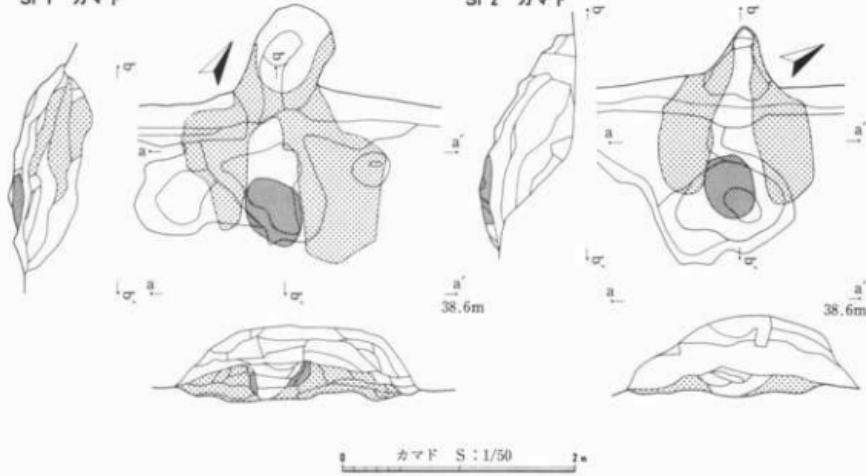
遺物の出土量はSI 1に比べるとかなり少ない。また床面直上からの出土遺物はやはり少なく、住居中央付近での検出が目立つ。

SI 3 (第5図、図版3)

調査区南寄りのG-3グリッドに所在する。SI 1の北側に隣接し、やはり遺構の一部を溝状遺構



SI 1 カマド



第4図 SI 1・SI 2住居、カマド実測図

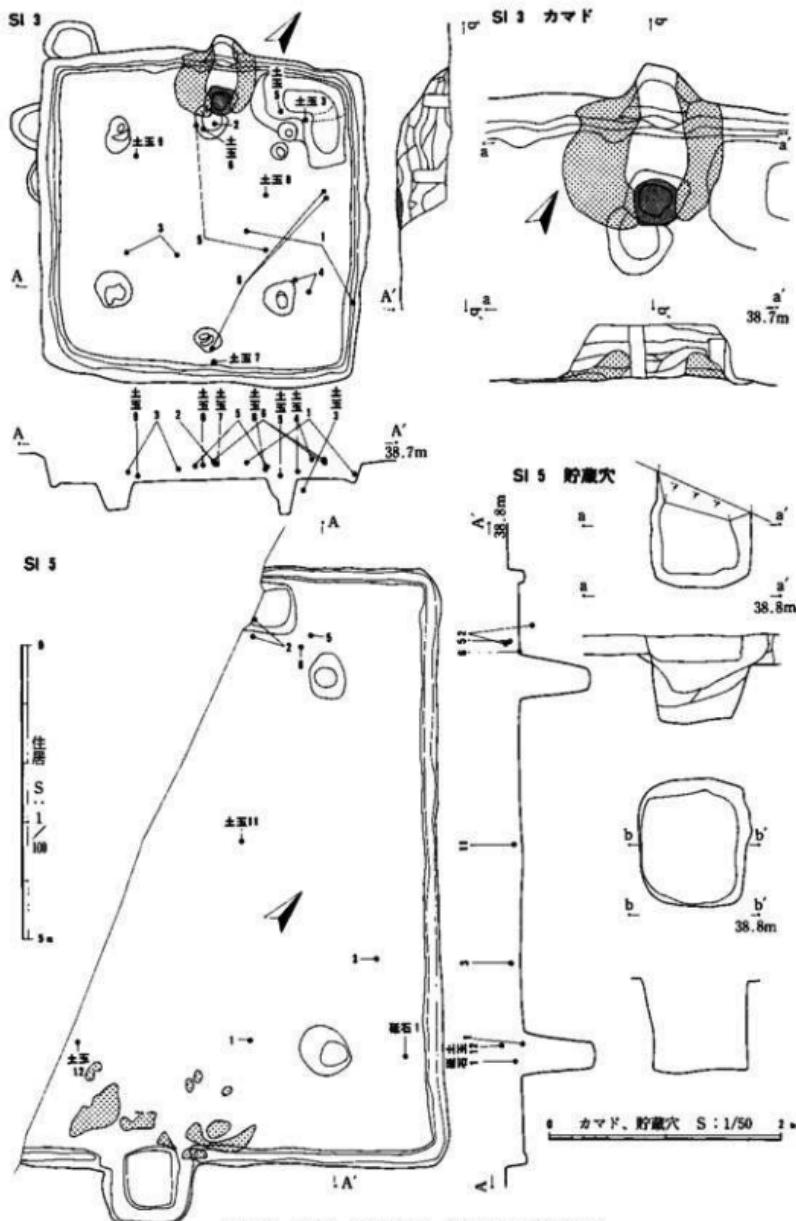
によって破壊されている。平面形は方形で規模は $5.73 \times 5.68m$ 、面積は $31.48m^2$ である。カマドは北西壁中央に設けられており、住居主軸方位はN-33°-Wである。上屋は4本の主柱で支えられていたと考えられるが、建替えが行われたようで、明らかに2本掘り込まれているものと、一つの穴で2本分の痕跡をもつものがある。主柱穴の深さは、第1主柱穴の北側のものが58cm、南側のものが49cm、第2主柱穴が60cm、第3主柱穴が東側43cm、西側46cm、第4主柱穴が北側66cm、南側54cmである。また、貯蔵穴もそれに対応するように掘り直しが認められ、はじめに北東壁側のものが掘られ、次にそれを埋めて北西壁側のものが掘られたようである。深さはほぼ均一で約45cmである。そのほかに南東壁寄り中央に出入口ピットと考えられる深さ30cmの小さな掘り込みも確認されている。カマドは低い両袖と火床部が検出されたのみである。

SI 5 (第5図、図版4)

調査区中央やや南寄りのF-3+G-3グリッドに位置する。遺構の西側半分は調査区外にかかっており調査できなかった。住居が左右対称の方形であったという前提で復原すると、規模は $10.18 \times 9.4m$ 、面積 $104.58m^2$ というものになる。確認面から床面までは $20 \sim 30cm$ とかなり浅い。カマドは調査区内では検出されなかったが、貯蔵穴および張り出しピットの位置から考えて北西壁中央にあったものと考えられ、主軸方位はN-39°-Wであろうと想定できる。床面には北東壁側で2本の主柱穴があり、4本柱の上屋構造であったと思われる。主柱穴の深さは北側のものが120cm、南側のものが95cmである。そのほかには北西壁側に深さ55cmの長方形の貯蔵穴が半分、南東壁中央には張り出し部分があり、ほぼ正方形で深さ80cmのピットが設けられている。周溝は張り出し部分を除いて全周していたものと考えられる。なお、張り出し付近の床面には灰白色粘土が散らばっていた。

SI 6 (第7図、図版4・5)

調査区中央やや南寄りのF-3+4グリッドで検出された。住居の東側1/3は調査区外にあるために調査できなかった。平面形が左右対称の方形であるという前提で復原すると規模は $8.76 \times 7.72m$ 、面積は $67.55m^2$ になる。カマドは北西壁中央に設けられており、住居主軸方位はN-39°-Wである。床面には南西壁側の2本の主柱穴がみつかっており、上屋は4本柱によって支えられていたものと考えられる。主柱穴の深さは北側のものが72cm、南側のものが68cmである。そのほかにはカマド西側の壁際に、隅丸長方形というよりも橢円形に近い形で深さ約60cmの貯蔵穴が掘り込まれている。また南西壁南隅付近にはやや隅丸の正方形に近い形の掘り込みが認められた。深さは約25cmで、これも貯蔵穴であった可能性が高いが性格は断定できない。カマドの遺存状況はきわめて悪く、両袖であろうと考えられる部分にもほとんど山砂はなかった。火床部分は被熱痕があり、比較的明瞭に確認することができた。



第5図 SI 3・SI 5住居、SI 3カマド実測図

SI 7 (第7図、図版5)

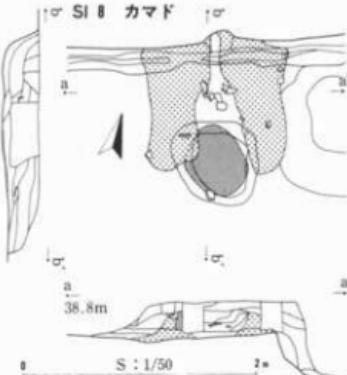
調査区中央のE-3グリッドに位置する。住居のはんのわずかな部分が検出されただけなので、全容の復原是不可能である。検出部分だけを記述すると南西壁が3.2m、北西壁が1.1mで、確認面からの掘り込みの深さは25cmである。カマド、柱穴、周溝は検出できなかった。

SI 8 (第6・7図、図版5・6)

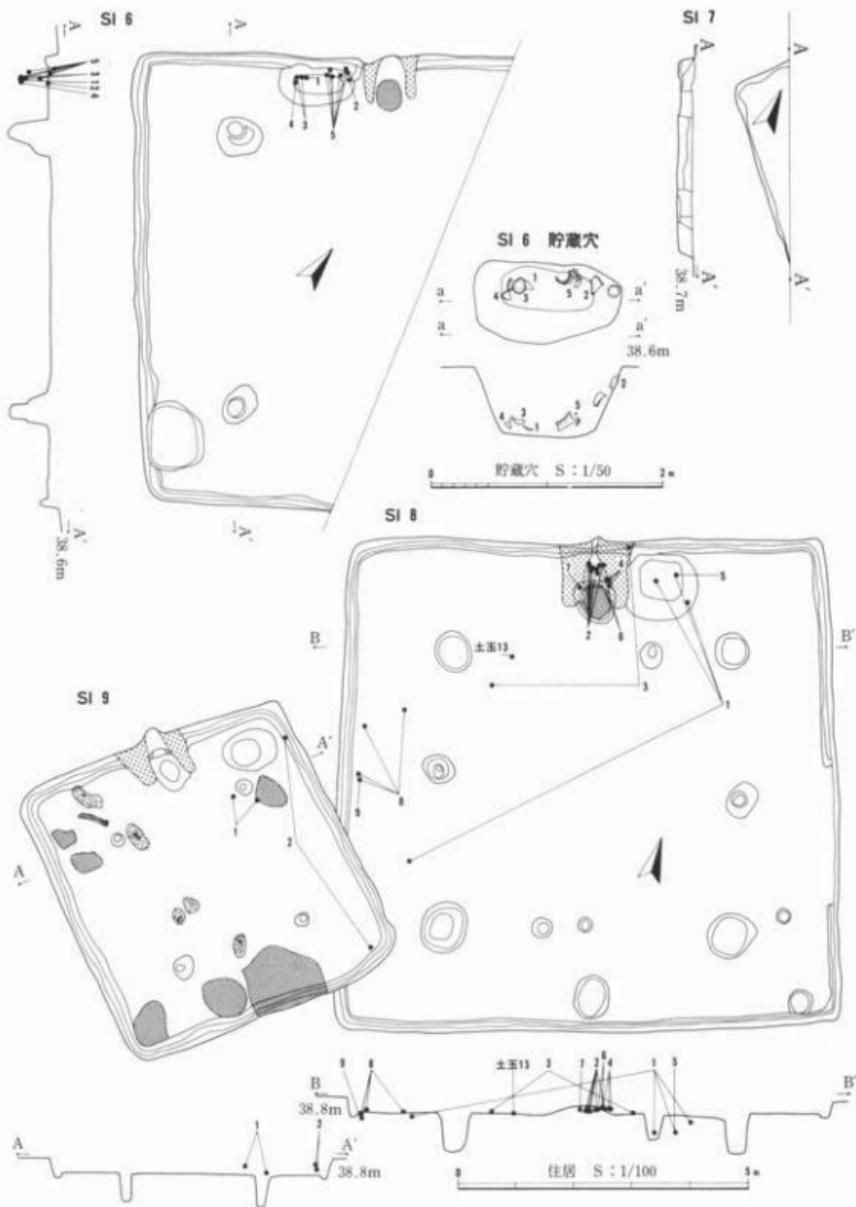
調査区中央部のD-3-E-3グリッドに位置する。SI 9と一部で重複しており、同住居によって南西部の床と壁が一部破壊されている。平面形は方形で、規模は $8.62 \times 8.22\text{m}$ 、面積は 71.55m^2 、確認面からの掘り込みの深さは20cm前後である。カマドは北西壁中央に設けられており、住居の主軸方位はN-17°-Wである。主柱穴は4本で、その他に第1-2主柱穴間に深さ58cm、第3-4主柱穴間に36cmの支柱と考えられる柱穴が掘り込まれている。主柱穴の深さは第1主柱穴が68cm、第2主柱穴が69cm、第3主柱穴が93cm、第4主柱穴が66cmである。南東壁際中央には出入口ピットと考えられる深さ37cmの掘り込みが確認されている。ほかに5本の柱穴が検出され、主柱穴の間に設けられているものは支柱としての可能性も考えられるが、先に支柱であろうとしたものに比べると掘り方が細い。貯蔵穴はカマド東側に隣接して掘られている。周溝はほぼ全周している。カマドの遺存状況は的良好的なほうで、火床部分もしっかりとしている。

SI 9 (第7図、図版6)

調査区中央部のE-2+3グリッドに位置する。SI 8と一部で重複しており、同住居の床と壁の一部を破壊している。平面形は方形で、規模は $5.05 \times 4.95\text{m}$ 、面積は 25.15m^2 、確認面からの掘り込みの深さは25cmである。カマドは北西壁中央に設けられており、住居主軸方位はN-43°-Wである。床面には4本の細目の主柱穴が掘り込まれていた。深さは第1主柱穴が48cm、第2主柱穴が42cm、第3主柱穴が53cm、第4主柱穴が47cmである。そのほかに北隅に長楕円形で、深さ35cmの貯蔵穴がみつかっている。覆土下層部で焼土の層が確認され、炭化物と同様に北西壁側と南東壁側の両方に集まった形で分布している。周溝は全周している。カマドの遺存状況は良好ではなく、両袖部分がわずかに確認されたのみで、火床部分もほとんど被熱していなかった。



第6図 SI 8 カマド実測図



第7図 SI 6・SI 7・SI 8・SI 9住居実測図

SI 10 (第8図、図版6・7)

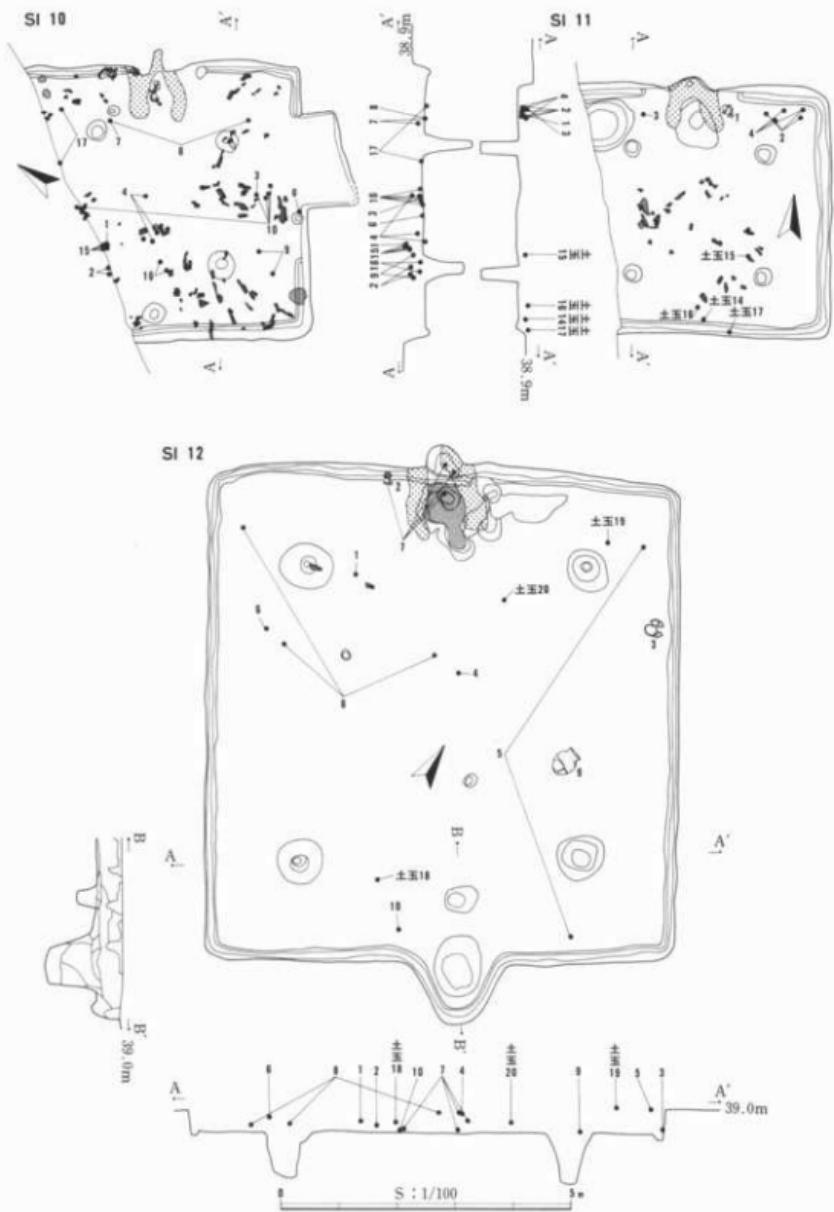
調査区中央張り出し部分のE-2-F-2グリッドに所在する。遺構の北西部分は1/4ほどが調査区外にかかっており調査できなかった。住居の平面形は方形であったろうと考えられるが、南東壁中央部分に台形の張り出し部分がある。張り出し部分を除いた住居の規模は $5.14 \times 4.78m$ 、張り出し部分の規模は $1.65 \times (0.9 \sim 0.6)m$ である。面積は $24.02m^2$ と復原できる。確認面から床面までの深さは30~40cmである。カマドは北東壁中央と考えられる位置に設けられており、住居の主軸方位はN-53°-Eである。床面からは3本の主柱穴が検出されており、4本の主柱を持つ普通の上屋構造であったろうと考えられる。主柱穴の深さは第1主柱穴が85cm、第2主柱穴が66cm、第4主柱穴が60cmである。床面にはそのほかに2本の小さめの柱穴が掘り込まれているが、上屋に伴うものかどうかは不明である。深さはカマド際のものが11cm、南西壁際のものが24cmである。張り出し部分には通常の張り出しひびきはない。周溝は張り出し部分付近でのみ途切れている。覆土下層を中心に炭化材、焼土が広い範囲で検出されている。

SI 11 (第8・9図、図版7)

調査区中央のD-2-E-2グリッドに位置する。住居西壁は調査区外にあるため調査できなかった。平面形は方形と考えられ、復原すると規模は $4.5 \times 4.34m$ 、面積は $17.15m^2$ となる。確認面から床面までの深さは15~25cmである。カマドは北壁中央に設けられており、主軸方位はN-6°-Wである。床面には4本の主柱穴と、北壁際カマド西側に円形に近い貯蔵穴が掘り込まれている。それぞれの深さは、第1主柱穴が57cm、第2主柱穴が67cm、第3主柱穴が65cm、第4主柱穴が66cmで、貯蔵穴は45cmである。カマドの遺存状況は良好とはいえないが、カマド尻の部分で煙出ではないかと思われる痕跡が確認できた。覆土下層からは少量であるが炭化材が散らばった状態で検出された。

SI 12 (第8・9図、図版7・8)

調査区中央やや北寄りのD-2-E-3グリッドに所在する。SI 14と一部で掘り方が重複している。平面形は方形で、南東壁中央に張り出し部分をもつ。規模は $8.36 \times 8.12m$ 、面積は $68.55m^2$ で、確認面から床面までの深さは40cm平均である。カマドは北西壁中央に設けられており、住居主軸方位はN-32°-Wである。床面には4本の主柱穴と、南東壁際中央に出入口に伴うと考えられるビットが1本、それに張り出し部分に、いわゆる張り出しひびきが確認されている。それらの深さについてみてみると、第1主柱穴は75cm、第2主柱穴は54cm、第3主柱穴は58cm、第4主柱穴は61cmである。出入口ビットと思われるものは深さ38cm、張り出しひびきは深さ102cmである。そのほかに第4主柱穴付近に性格不明の深さ15cmの小さなビットが、それに住居中央やや南寄りのところには、やはり性格不明の深さ37cmの小さなビットが確認できた。周溝は張



第8図 SI 10・SI 11・SI 12住居実測図

り出し部分をも含めて全局している。カマドは北西壁中央に住居廃絶時に伴うものが確認されたほかに、北東壁中央でそれ以前に使用され破壊されていたと考えられるものの痕跡がみられた。北西壁のものについては、当遺跡のものとしては遺存状態の良好なもので、火床の厚い焼土層の上に厚い灰の層も確認された。左右両袖脇には小型の浅いビット状掘り込みが検出されている。これもカマドに伴う上屋構造に関連するものと考えられる。

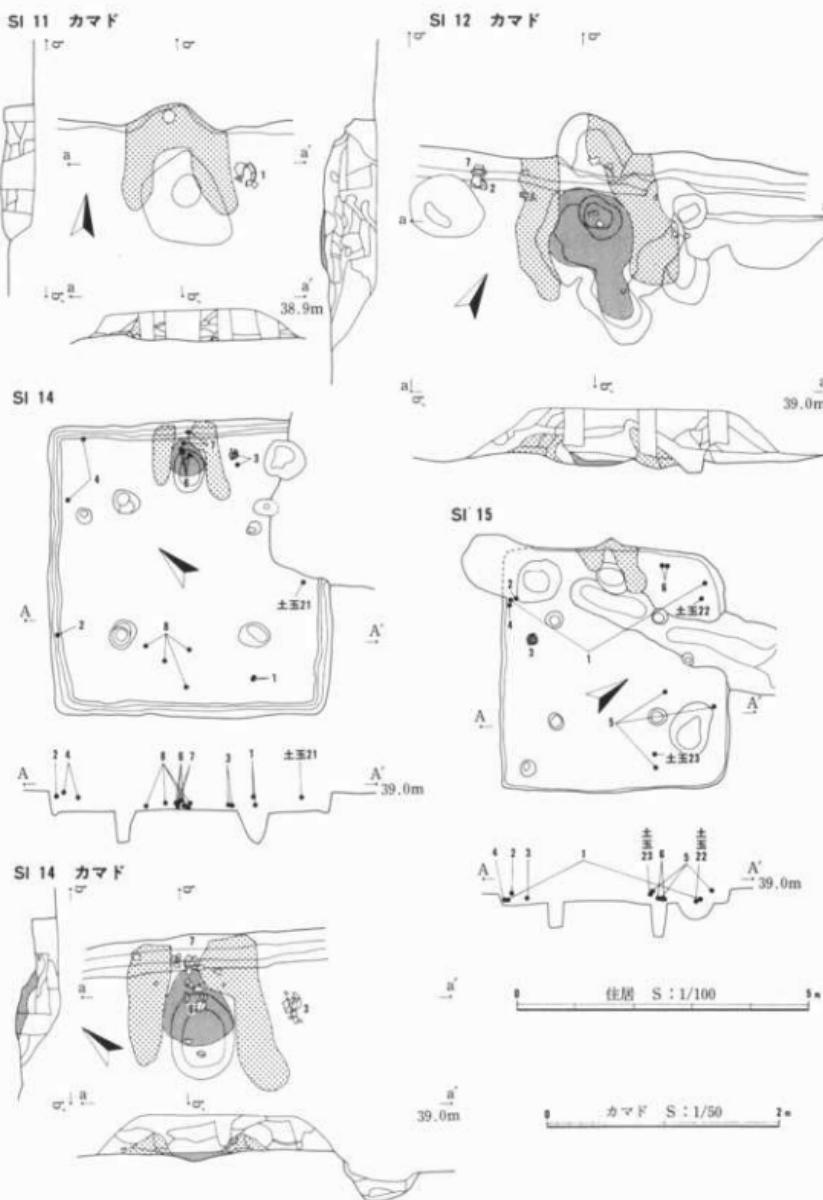
SI 14 (第9図、図版9)

調査区中央やや北寄りD-2グリッドに所在する。SI 12と一部で重複している。平面形は方形で、規模は $5.04 \times 4.78m$ 、面積は $23.87m^2$ と復原できる。確認面からの掘り込みの深さは35cm平均である。床面には4本の主柱穴のほかに、2本の小さな柱穴が見つかっている。深さは第1主柱穴寄りのものが23cm、第4主柱穴寄りのものが18cmである。この2本については、それぞれ第1、第4主柱穴の近くにあることから上屋構造に伴うものと考えて間違いないだろう。それぞれの深さは第1主柱穴が21cm、第2主柱穴が60cm、第3主柱穴が54cm、第4主柱穴が40cmである。また、カマド右脇には円形の貯蔵穴が検出されている。深さは36cmである。周溝はカマド下部をも含めて全局している。カマドはほとんど壁外に掘り込みをもたない形態のものである。両袖と火床の焼土層が確認された。

遺物の検出量は多くはないが、床面直上での遺物の検出とカマド内およびカマド脇での遺物の検出が注目される。

SI 15 (第9図、図版9)

調査区北寄りC-2グリッドに位置する。SA 4と重複しており、床と壁の一部を破壊されている。平面形は方形で、規模は $4.1 \times 3.92m$ 、面積は $15.92m^2$ 、確認面からの掘り込みの深さは20cm前後である。カマドは北西壁中央に築かれており、住居主軸方位はN-56°-Wである。床面には4本の小さな主柱穴のほかに、2本のやはり小さな柱穴が確認されている。それぞれの深さは第1主柱穴が50cm、第2主柱穴が56cm、第3主柱穴が44cm、第4主柱穴が60cmで、それ以外の小さな柱穴は北東壁よりのものが12cm、南隅のものが7cmである。貯蔵穴らしい掘り込みとしてはカマド南脇のやや丸みを帯びた方形のもののが2つある。カマド脇のものについては形状は貯蔵穴として問題ないのであるが、SA 4に伴うものである可能性もあり、また東隅のものについては形状的にみて疑問が残る。それぞれの深さはカマド脇のものが26cm、東隅のものが27cmである。周溝はまったく掘り込まれていない。カマドの遺存状況は不良である。



第9図 SI 14・SI 15住居、SI 11・SI 12・SI 14 カマド実測図

SI 16 (第10図、図版10)

調査区北寄りのC-2グリッドに所在する。SI 15に隣接するが、重複する遺構はない。平面形はややいびつな不整方形で、南東壁中央に張り出し部分をもつ。掘り込み規模は 5.88×5.72 m、面積は 33.61m^2 で、確認面からの掘り込みの深さは30cm平均である。カマドは北西壁中央に設けられており、住居主軸方位はN-64°-Wである。床面には4本の主柱穴が確認されている。それぞれの深さは第1主柱穴が42cm、第2主柱穴が68cm、第3主柱穴が76cm、第4主柱穴が43cmである。このほかに南東壁中央の張り出し部分にいわゆる張り出しピットがあり、深さは70cmを測る。その北西側に二つの柱穴が住居中央方向に並んで掘り込まれており、出入口に関連する柱穴であろうと考えられる。深さは中央に近いものが49cm、壁に近いものが55cmである。周溝はまったくめぐっていなかった。カマドは火床部分の痕跡がわずかに確認されたのみで、ほとんど遺存していなかった。

SI 17 (第10図、図版10)

調査区北部のB-2グリッドに所在する。重複する遺構はない。平面形は方形で、規模は 6.26×6.14 m、面積は 39.15m^2 、確認面からの掘り込みの深さは40cm平均である。カマドは北西壁中央に設けられており、住居主軸方位はN-10°-Wである。床面には4本の小さな主柱穴のほかにカマド右脇に円形の貯蔵穴が確認されている。それぞれの深さは第1主柱穴が66cm、第2主柱穴が58cm、第3主柱穴が73cm、第4主柱穴が60cm、貯蔵穴は37cmである。周溝はまったくめぐっていない。カマドの遺存状況は不良であった。

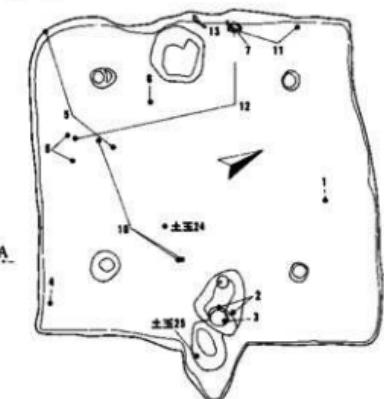
SI 18 (第10図、図版11)

調査区北部のB-2グリッドに所在する。重複する遺構はない。平面形は方形で規模は 5.6×5.12 m、面積は 28.56m^2 、確認面からの掘り込みの深さは30cm平均である。カマドは北東壁中央に設けられており、住居主軸方位はN-12°-Eである。床面には4本の細い主柱穴と、南西壁際中央にやや横円形の貯蔵穴が掘り込まれている。それぞれの深さは第1主柱穴が60cm、第2主柱穴が62cm、第3主柱穴が82cm、第4主柱穴が77cm、それに貯蔵穴が22cmである。周溝はまったく掘られていなかった。カマドの遺存状況は良好ではなかったが、両袖の山砂と火床部の焼土層を確認することができた。

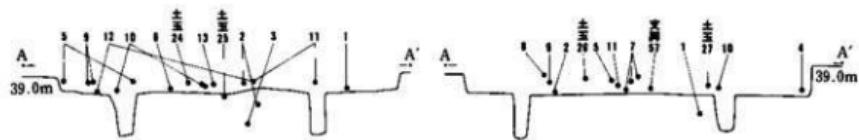
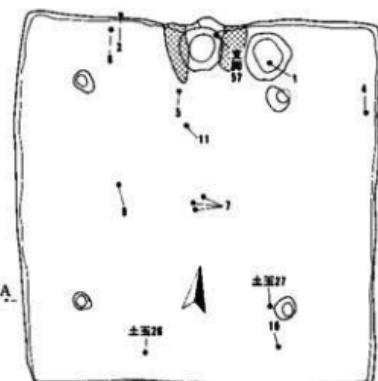
なお、床面中央部分には被熱とみられる橙色に変色した部分があったが、掘り込まれたようすもなく、炉とは考えられず性格不明である。

遺物の出土量はそれほど多いものではないが、住居南西隅の床面直上で集中的に検出されている点は注目すべきである。

SI 16



SI 17



SI 19 (第11図、図版12)

調査区北部B-2・3グリッドに所在する。遺構東半は調査区外にあるために調査できなかった。遺構の掘り込みを左右対称の方形であったと想定すると、規模は7.4×6.82m、面積は47.23m²の住居が復原できる。確認面からの掘り込みの深さは40cm平均である。カマドは北西壁中央に設けられており住居主軸方向はN-18°-Wである。床面には主柱穴のうちの第3・4主柱穴が検出されている。深さは第3主柱穴が63cm、第4主柱穴が66cmである。また、南東壁中央と思われるところには張り出し部分があり、その内側にはそれに伴うと考えられるピットも確認されている。ピットの掘り込みの深さは50cmである。周溝は掘り込まれていなかったものと考えられる。カマドの遺存状況は不良であった。

遺物の検出量はきわめて少ないが、土器はカマド周辺で集中しており、そのほかに実測可能な土玉が5点検出されている。

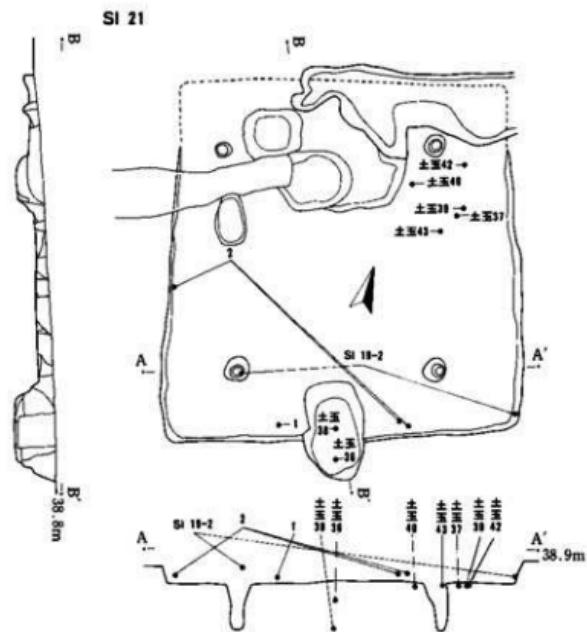
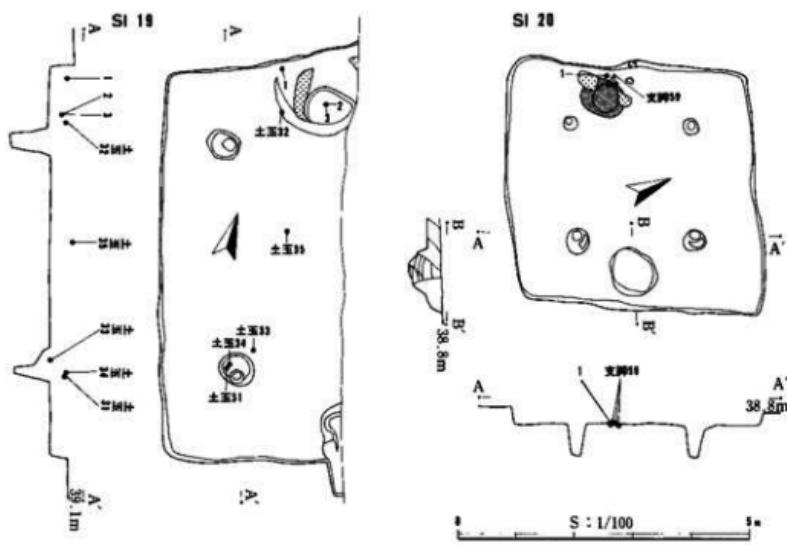
SI 20 (第11図、図版12)

調査区北部のB-2グリッドに所在する。重複する遺構はない。平面形は方形で、規模は4.3×4.28m、面積は17.95m²、確認面からの掘り込みの深さは20cm平均である。カマドは北西壁中央に設けられており、住居主軸方位はN-68°-Wである。床面には4本の細い主柱穴と、カマドの対壁である南東壁中央壁際に、円形の貯蔵穴が掘り込まれている。それぞれの深さは第1主柱穴が67cm、第2主柱穴が46cm、第3主柱穴が54cm、第4主柱穴が48cm、それに貯蔵穴が30cmである。周溝はまったくめぐらされていない。カマドの遺存状況はきわめて悪く、袖材と思われるわずかの山砂と火床部分と思われるくぼみが確認できたのみである。

SI 21 (第11図、図版12)

調査区北部のB-2グリッドに所在する。SD 16によってカマド、床、それに壁の一部が破壊されている。北西壁を復原すると規模6.12×6.1m、面積36.56m²という住居が想定できる。確認面からの掘り込みの深さは15~30cmである。カマドは北西壁中央に設けられていたと考えられ、住居主軸方位はN-14°-Wということになる。床面には4本の主柱穴のほかに南東壁中央に張り出すような格好で、長方形の貯蔵穴が掘り込まれている。それぞれの深さは第1主柱穴が48cm、第2主柱穴が80cm、第3主柱穴が78cm、第4主柱穴が57cm、貯蔵穴が35cmである。周溝はめぐらされていない。

遺物の出土量は多くはないが、実測可能な土玉が8点検出されており、本遺跡の堅穴住居中では最多量の検出である。



第11図 SI 19・SI 20・SI 21住居実測図

2 節 平安時代の竪穴住居

SI 4 (第12図、図版3・4)

調査区の南寄りG-3・4グリッドに位置する。重複する遺構はない。平面形は方形で、規模は4.18×3.9m、面積は15.93m²である。確認面から床面までの深さは約50cmである。カマドは北西壁中央にあり、住居主軸方位はN-23°-Wである。床面には主柱穴と考えられる2本の柱穴が南寄りのところにあり、東側のものは深さ7cm、西側のものは深さ4cmで双方とも極端に浅い。それらのあいだの南東壁寄りのところには、出入口ピットと考えられる深さ6cmの柱穴がある。また、住居中央付近には2本の柱穴が横並びに設けられている。深さはともに20cm前後である。これは上屋構造にかかわるものであろうと考えられるが、正確にはわからない。周溝はほぼ全周している。カマドはその大部分が壁外に作られる型のもので、火床部分の被熱度は高い。

SI 13 (第12図、図版8)

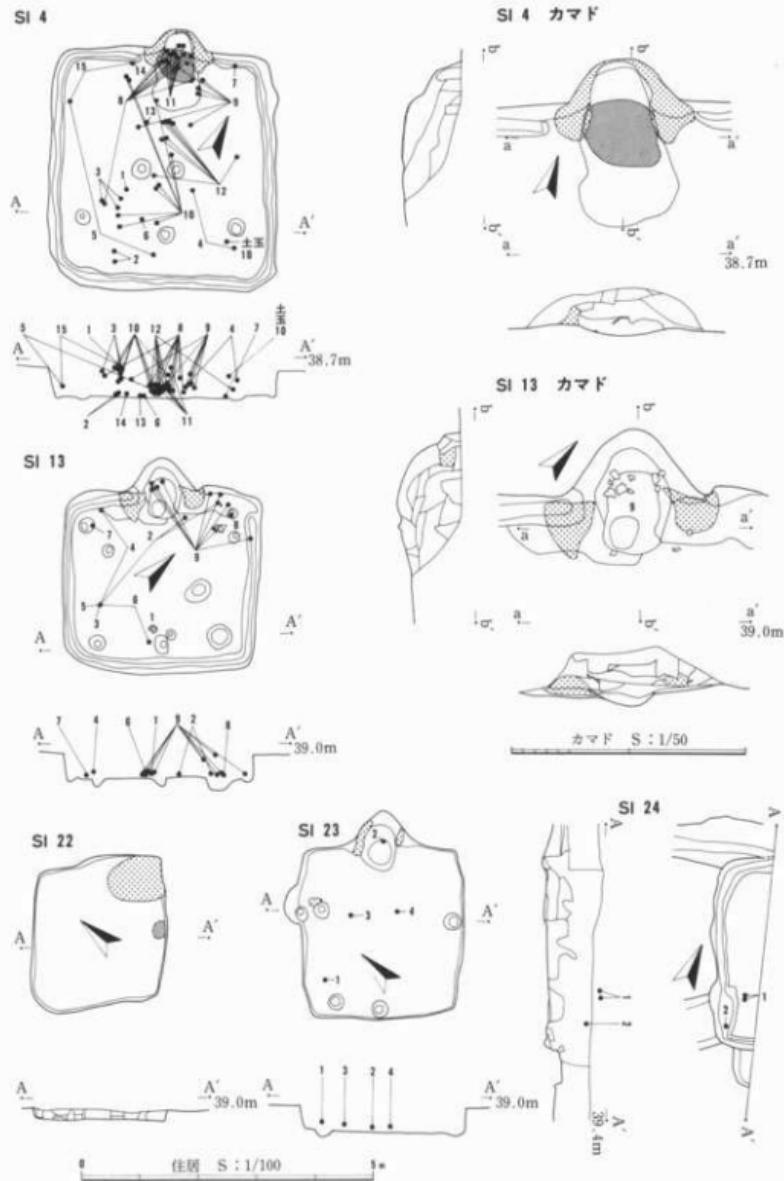
調査区中央やや北寄りのD-3グリッドに位置する。SI 12のすぐ東側に隣接している。重複する遺構はない。平面形は方形で、規模は3.38×3.07m、面積は10.19m²、確認面からの掘り込みの深さは、40cm前後である。カマドは北西壁中央に設けられており、住居主軸方位はN-45°-Wである。床面には4本の主柱穴のほかに、南東壁際中央に出入口ピットと思われる柱穴が1本ある。そのほかの小さな3本の柱穴は性格不明である。これらはみな掘り込みが浅く、最も浅いものでは5cm程度、最も深い第2主柱穴でさえも15cmほどしかない。周溝はカマド付近を除いて全周している。カマドの遺存状況はあまり良好ではなかった。

SI 22 (第12図、図版13)

調査区北寄りのC-2グリッドに所在する。重複する遺構はない。平面形は不整形で、規模は2.52×2.3m、面積は5.54m²、確認面からの掘り込みの深さは15cm平均である。床面には柱穴を検出することはできず、周溝も確認できなかった。南東壁中央の壁際にカマド火床部分の痕跡と考えられる被熱部分が確認されている。したがって住居主軸方位はS-48°-Eということになる。東隅壁際には床面に接する状態で山砂混じりの粘土が集積されたような格好で検出された。

SI 23 (第12図、図版13)

調査区北寄りのC-2グリッドに所在する。重複する遺構はない。平面形は方形で規模は2.94×2.82m、面積は7.95m²、確認面からの掘り込みの深さは40cm平均である。カマドは北東壁中央と北西壁中央の2カ所に設けられており、そのうち残りのよい北東壁のものを中心に考えると住居主軸方位はN-46°-Eである。床面には南東壁・北東壁際に1本ずつ、それに南西壁際に2本



第12図 SI 4・SI 13・SI 22・SI 23・SI 24住居、SI 4・SI 13カマド実測図

の柱穴が掘り込まれている。そのうち南東壁・北東壁際のものは主柱穴と考えられるが、ほかの2本については、出入口ピットとも主柱穴とも性格を断定することは難しい。それぞれの深さは、南東壁側から時計まわりに4cm、12cm、8cm、10cmである。カマドは北東壁のものの方が遺存状況が良好で、これはカマド本体を住居の外側に作り出している。両袖の山砂の一部と火床部分の掘り込みが確認されている。もう一つの北西壁中央やや北寄りの部分に構築されているカマドについては、住居廃絶以前に取り壇されていたと考えられ、火床部分の掘り込みが確認されたのみである。

SX 24 (第12図、図版13)

調査区中央やや南寄りのF-3・4グリッドに所在する。住居の大半は調査区外にあり、検出できたのは遺構の1/4程度である。住居北端は溝状遺構と一部分重複している。確認部分の掘り方は一辺3.2m、確認面からの掘り込みの深さは40cmである。北西壁はN-23°-W方向に走っている。検出部分には周溝がまわっている。柱穴、カマドは検出されなかった。

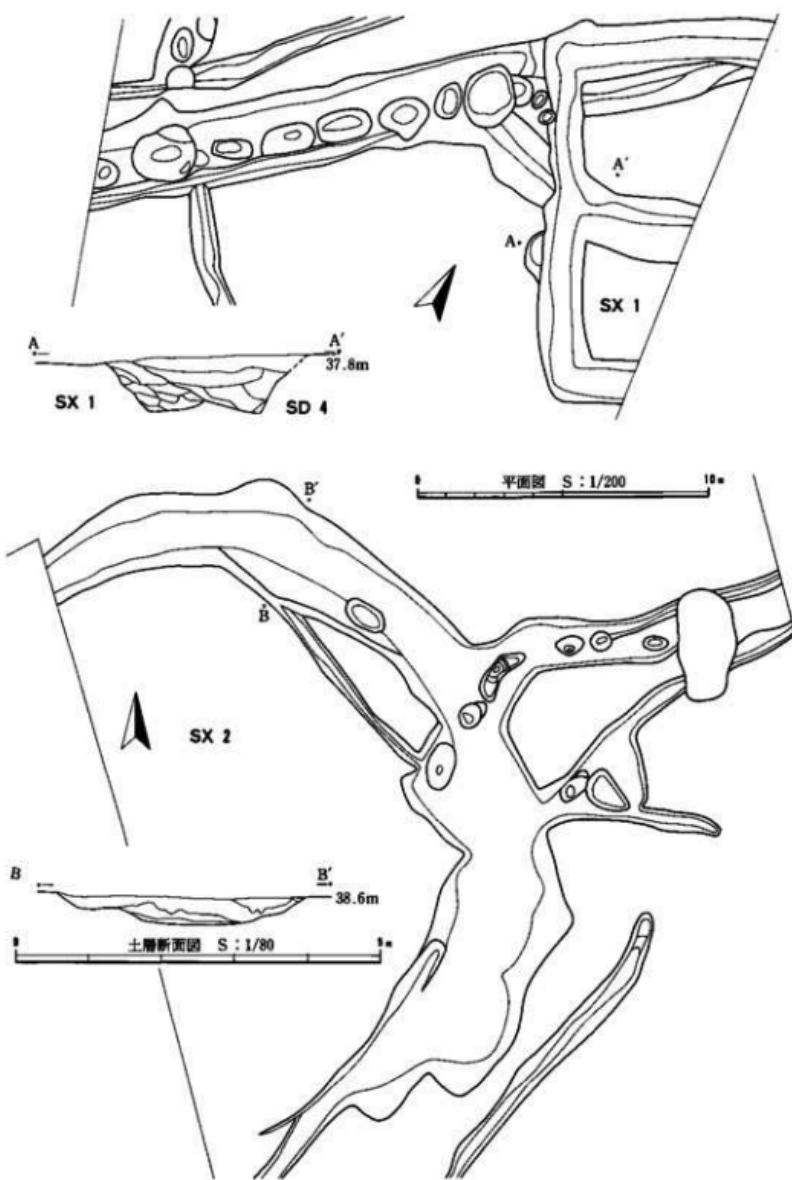
3 節 古墳

SX 1 (第13図、図版15)

方墳の周溝跡のみの検出である。調査区内では主体部は検出されなかつたが、区画内中央のSD 4によって破壊されている部分に横穴系の主体部があった可能性もある。周溝跡から復原すると、周溝外側で一辺12.7mという規模が考えられる。周溝幅は0.8~1.6m、深さは0.6~0.95m、南西辺の周溝の走っている方向からN-33°-Wという方位が復原できる。周溝下端はほぼ平であった。

SX 2 (第13図、図版16)

やはり周溝跡のみの検出である。調査区内では主体部は確認できなかつた。検出部分は円形であるが、調査区内には円形の半分程度しかかかっていないために、円墳とも前方後円墳とも断定できない。また、SD 8、18、19、20といった溝状遺構が複雑に絡み合っているために、形状のはっきりしない部分もある。なんとか残りのよいところでみてみると、直径は22.5mと復原できる。周溝の幅は最も狭い部分で1.6m、平均的なところで2.5~3mで、最も広い部分では4.3mを測る。周溝の深さは0.2~0.4mと、かなり浅い。



第13図 SX 1・SX 2実測図

4 節 溝

溝は全部で20条ほど検出されている。そのうちの比較的しっかりした掘り方をもつ溝についてのみ説明を施す。

SD 1 (第14図)

調査区最南端で検出された溝状遺構である。調査された部分は延長9.1m、幅0.9~1.5m、深さは0.25~0.47mである。

SD 4 (第14図)

SX 1の周溝の一部を破壊している。西側ではSA 2およびSE 1と接しているが、その西側にはのびておらず、おそらくSE 1付近において切れるものと考えられる。検出部分の延長距離は16mで、幅は1.5~2.1m、深さは0.75~1.14mである。

SD 15 (第14図、図版18)

調査区最北端で検出された遺構である。長さ28m、幅1.1~2.2m、深さ0.17~0.36mである。

5 節 栅列

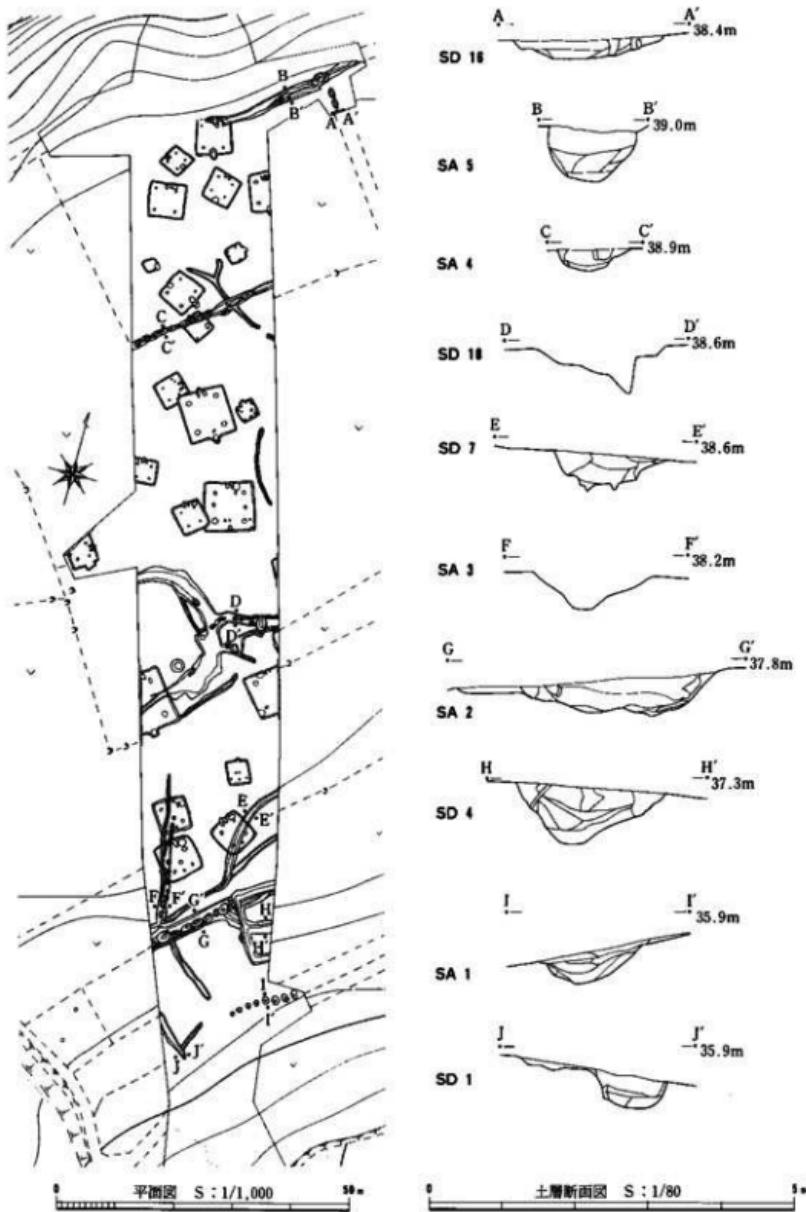
柵列は全部で5列見つかっている。そのうちSA 1、2、4の3列はほぼ同じ方位を指して走っており、SA 5はこれに直交するように走っている。これは遺跡の南北両端に入っている小支谷を意識して築いた結果と考えられる。そしてSA 3のみがこれらとはまったく異なる方位を指して築かれている。

SA 1 (第14図、図版16)

調査区最南端で検出された柵列である。8基の柱掘方が確認された。斜面部のために溝状の掘方は伴っていない。直線というよりは斜面の等高線に沿ったような緩い弧を描いたならびになっている。掘り込みの径は0.7~1.2m、深さは西側から東側に向かって深くなっている。最も浅いものが11cm、最も深いものが1.36mである。

SA 2 (第14図、図版16)

調査区南寄りのところにあり、SX 1、SD 4、SA 3、SE 1などと重複している。ならびの方向はN-50°-Eである。幅2m、深さ50~70cmの溝状の掘り込みを伴っており、その中に8基の柱掘方が並んでいる。走行方向に長軸をとる橢円形のものが一般で、短軸は0.7~1.8m、長軸は



第14図 溝・横列実測図

1.8~2.2m、深さは15~55cmである。

SA 3 (第14図、図版17)

調査区南寄りのところにあり、SI 1~3、SA 1と重複している。ならびの方位はN-11°-Wである。幅0.6~1.6m、深さ15cmのやや細目の溝状の掘方を伴い、その中に12基の柱掘方がならんでいる。柱掘方は径0.5から1.1m、深さ13~25cmである。

SA 4 (第14図、図版17)

調査区北寄りのところにあり、SI 15、SD 14と重複している。ならびの方位はN-52°-Eで、幅0.6~1.2m、深さ5~25cmの細い溝状の掘方を伴っている。その中に10基の柱掘方が並んでいる。径は0.7~3mで、深さは30~50cmである。

SA 5 (第14図)

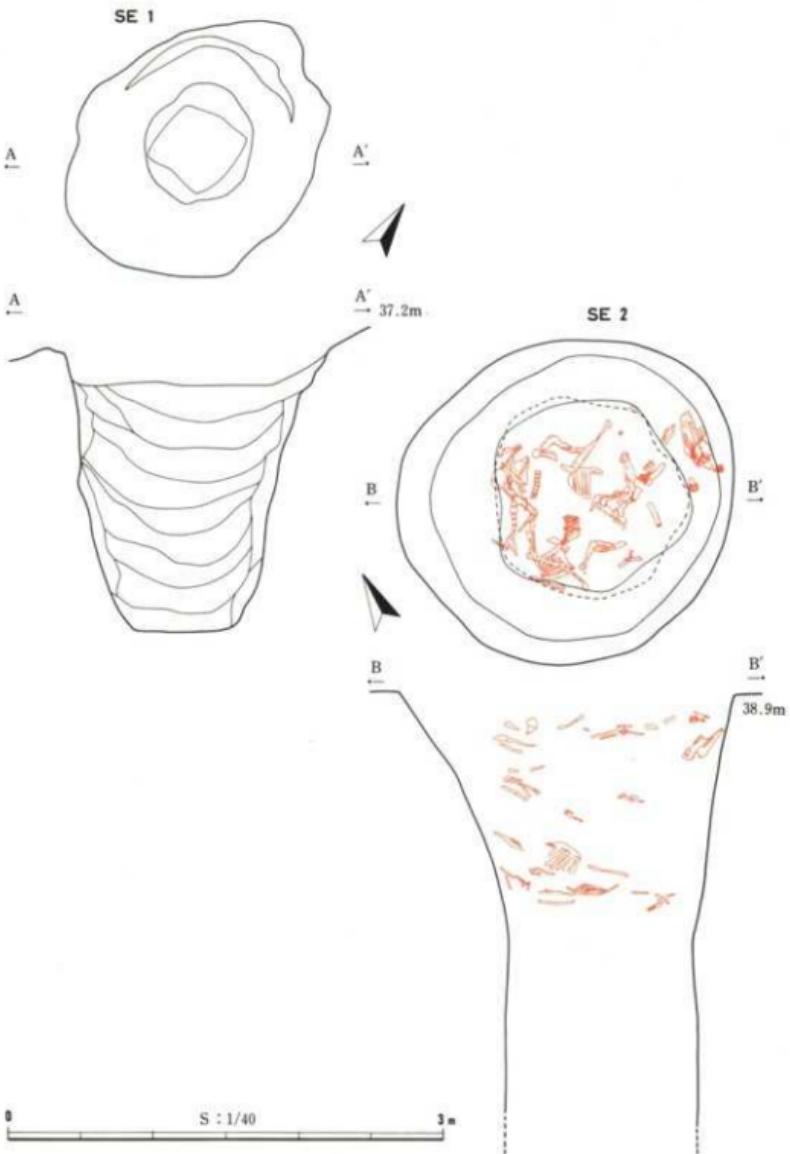
調査区北端で検出された柵列である。N-34°-Wを主軸方位とし、溝状の掘方は伴わない。横円形の柱掘方が3基並んでおり、長軸は1.5~1.8m、短軸は0.9~1.2m、深さは35~60cmである。

6 節 井戸

井戸状の遺構は調査区内から2基検出されている。なお、井戸として断定することの難しいSE 3についてもここで説明を施しておく。

SE 1 (第15図、図版14)

調査区南寄りのところにあり、SA 1、SD 4と重複している。確認面からの掘り込みの深さは2.1m、底面は一辺45~50cmの方形である。掘方（または壊し方）上端の平面形は南北2.05m、東西1.59mの不整形である。覆土断面を見ると、掘方そのものはローム層を打ち抜いて白色粘土層の中に60cmほどまで掘り込まれている。また、井戸枠らしいものの痕跡はみられなかった。ただし、壁際には縦に一層縱方向の黒っぽい層が入っており、また、中にレンズ状に入っている堆積土をみてみるとみなローム塊が混入しており、人為的な堆積であることがわかる。このことから、井戸枠はとくに掘り出さずに埋め戻してしまったものと考えられる。



第15図 SE 1・SE 2実測図

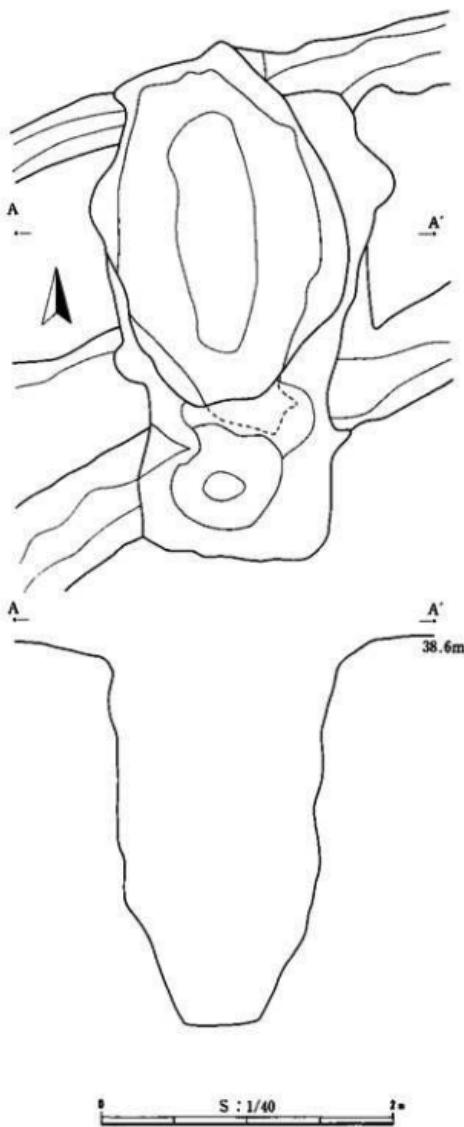
SE 2 (第15図、図版14・15)

調査区中央やや南寄りのところで検出された。SX 2の周溝内側にあり、重複する遺構はない。形態的にはSE 1と異なり、特に平面方形らしいところはみえず円形であった可能性が高いと考えられる。上端の径は2.2~2.35m、確認面から1.65mほどから下の部分で径1.2~1.4mである。井戸底はかなり深く完掘することはできなかった。確認面から2.8mまで調査したのだが、さらに1m以上掘らないと、井戸底は出ないようであった。覆土中では確認面から1.6mから0.3mほどの間の層から、馬骨が集中して出土した。詳細については附章で触れる。

馬骨が出土したために確認面から1mほどの部分までしか土層断面観察はできなかつたが、それをみる限りでは、やはりローム塊を多く含んでおり、人為的な堆積であったと考えられる。

SE 3 (第16図、図版15)

調査区中央やや南寄りにあり、SD 18と重複している。SEの略称を用いているが、平面構円形である点を考えると、井戸であると断定して良いかどうか難しいところである。規模は長軸2.7m、短軸1.7m、深さ2.65mである。土層断面を見るにレンズ状の堆積で、ほとんどの層にロームが含まれており、やはり人為的な堆積であろうと考えられる。掘方の下端は暗褐色粘土層のなかに70cmほどのところまで掘り込まれている。



第16図 SE 3実測図

2章 遺物

2章 遺 物

1節 古墳時代住居出土の土器

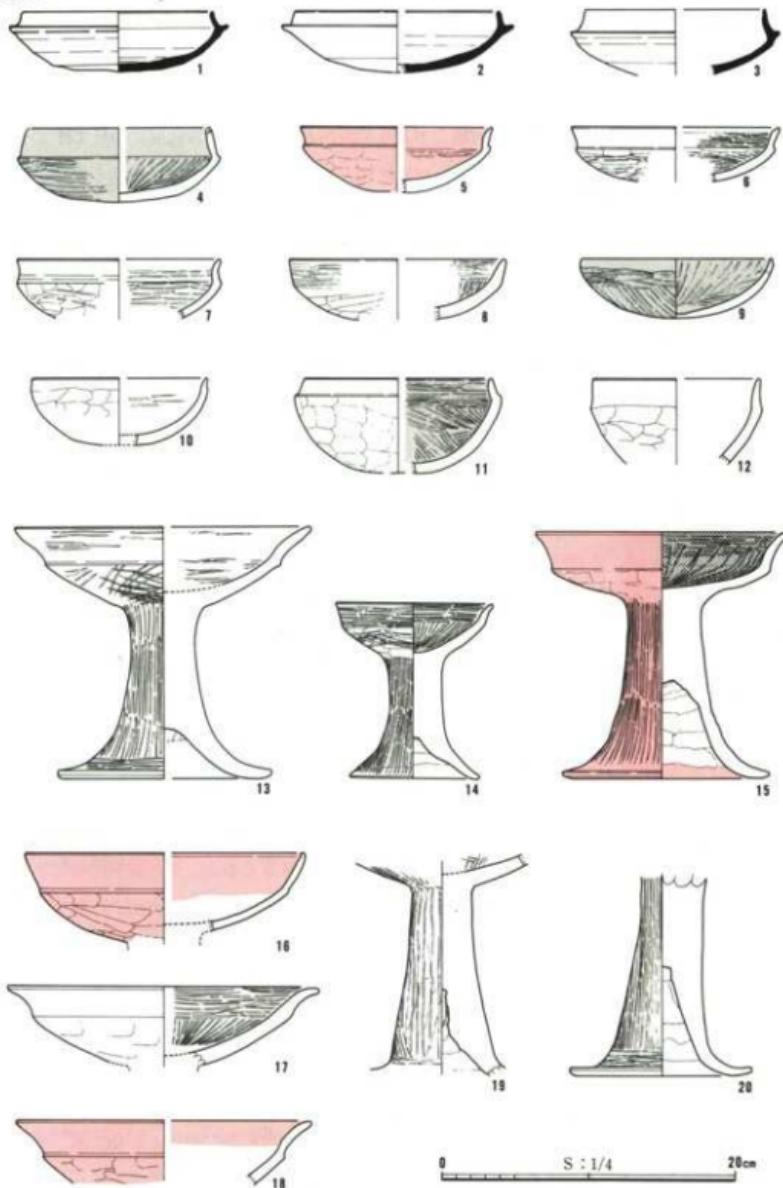
SI 1 (第17・18図、図版19)

1から3は須恵器蓋付杯の杯身である。色調はみな暗い青灰色をしている。調整技法は外面底部が回転ヘラケズリ、それ以外の部分はナデで調整されている。胎土は1、2が長石等の石粒をやや多めに含み、3には混和物はほとんど無い。焼成はみな良好である。

4から12は土師器杯である。そのうち、11、12はやや深めの器形である。4は器表面全面が黒色で樹脂仕上げと考えられる。口縁は外面ヨコナデで、内面のミガキは暗文風である。胎土中に石英粒、雲母粒を含む。焼成状況は普通である。5は内面全体および、外面の口縁から底部の上方にかけて赤彩されている。器肉の色は乳橙色である。胎土中に石英粒を多く含みキラキラしている。焼成状況は普通である。6は色調赤橙色で胎土中には酸化鉄粒、雲母粒を少し含む。焼成は良好である。7は全体に橙色で、外面に大きく内面には一部黒斑がある。胎土中には酸化鉄粒、石英粒を含みキラキラしている。焼成は普通である。8の色調は乳橙色で、胎土中には雲母粒を少し含む程度で、全体にはサラサラしている。外面底部はかなり軟らかい段階で手持ちヘラケズリを行っているらしく、痕跡が明瞭である。焼成は普通である。9は器表内外ともに暗褐色で樹脂仕上げと考えられる。器肉は中央が橙褐色で、両外側が黒灰色のサンドウィッチ状を呈している。胎土中には長石、雲母粒を少し含む。焼成状況は普通である。10は器表面が乳褐色、器肉が乳橙色、混和物は少なくサラサラである。全体に摩耗が進んでいる。11は外面暗橙褐色、内面暗褐色で内面は樹脂仕上げと考えられる。胎土中には長石粒等の石粒をやや多めに含む。焼成状況は普通である。12は内面から口縁外面にかけてはヨコナデ調整である。色調は器表面が暗い乳褐色で、器肉中央は乳褐色である。焼成は普通。

13から20は土師器高杯である。13は器表面赤橙色、器肉乳橙色で、雲母粒、酸化鉄粒を少し含む。焼成は普通である。14は器表面が暗褐色であるが、樹脂仕上げによるか否か判断は難しい。石英粒、酸化鉄粒をわずかに含む。焼成は普通である。15は外面全面が赤彩、杯部内面が黒色処理されている。石英粒、酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。16は杯部のみである。内面中央を除く器表面は赤彩されている。口唇部は内面に折り込むようになっている。17は色調赤色であるが赤彩ではない。雲母粒、酸化鉄粒を少し含む。外面は剥離が進んでいる。18は内面の段付近から下を除く器表面が赤彩されている。石英粒をわずかに含む程度で、サラサラしている。焼成は良い。19は色調赤橙色で、胎土中に石英粒、雲母粒を少し含む。焼成はふつうである。20は器表面が赤褐色、器肉は乳橙色、酸化鉄粒をわずかに含む。焼成は良好である。

SI 1



第17図 SI 1出土土器実測図

21から23は土師器甕である。21は胴部中位以上の遺存資料である。器表面外面が暗赤橙色で内面が黒褐色で、胎土中には石英粒が多く含まれており、全体にザラザラした状況を呈している。焼成は良くない。器面調整は口縁部が内外面ともにヨコナデ、胴部は外面がヨコヘラナデ、内面がヨコヘラケズリもしくはやや強めのヨコナデである。22は器肉と器表内面が乳橙色、器表外面が赤橙色で外面の一部に煤が付着しており、内面も胴部下半から底部にかけてオコゲ状の使用痕がみられる。口縁部の短く立ち上がる形態のもので、内面下半にはヘラミガキが施されている。23は胴部中位以上の遺存資料である。色調は橙褐色から乳橙色で、胎土中には石英粒や雲母粒等を普通量含む。焼成状況は普通である。

24は手捏ね土器である。形状は小型の長胴甕のよう、色調は赤橙色、外面に黒斑がみえる。胎土中に石英粒等を多めに含む。焼成は良好である。

25・26は須恵器大甕片で、焼成はともに良好で26はやや鉄分が多い。25には自然釉が見える。

SI 2 (第18図、図版19)

1は須恵器蓋杯の蓋、2は杯である。1は暗い青灰色で胎土中には長石粒をわずかに含む。口唇部内面には弱い段が付いており、外面天井部は口縁部付近をわずかに残して回転ヘラケズリで整えられている。2は暗い青灰色で、胎土中には2から5mm粒の石英粒を多く含んでいる。底部外面は弱い段付近から下の部分に回転ヘラケズリが施されている。

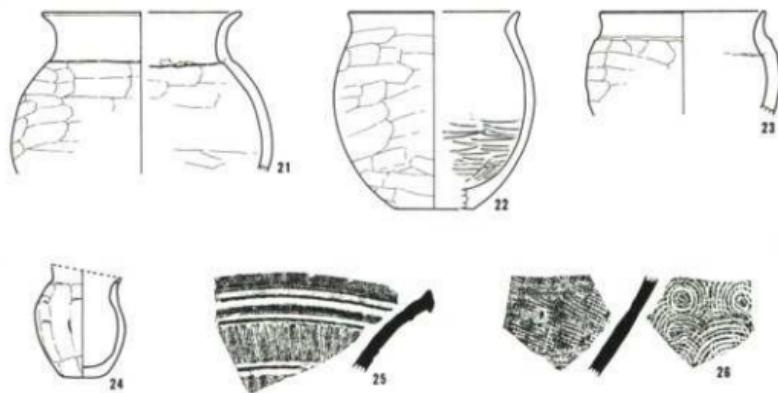
3から8は土師器杯である。3は外面全面に黒色処理が施されている。胎土中には長石粒、酸化鉄粒が少し含まれている。器面のミガキはかなり丁寧である。焼成は普通である。4は器肉が乳橙色、器表面が暗褐色で、全面樹脂仕上げと考えられる。焼成は普通である。5は器肉が乳褐色、器表面は内面が黒褐色、外面が乳褐色で黒斑を有している。胎土中には長石を少し含む。焼成は良好である。6は器肉と外面底部が乳橙色、それ以外の器表面は暗褐色の樹脂仕上げである。焼成は普通である。7は器肉が乳褐色、器表外面は一部に黒斑があり、内面から外面口縁部にかけては樹脂仕上げが施されている。焼成は普通である。8は器表内面全体と外面上半に赤彩が行われている。雲母粒を少し含む。外面は固化不能であったが、口縁部がヨコナデ、底部はヘラケズリの後に上半にヘラミガキが行われている。焼成は普通である。

9は土師器の小型甕である。肩が強く張り、口縁は一度内彎して再び強く外反する。色調は橙色で内外面に黒斑がある。長石粒等の石粒を多く含み、焼成は良い。

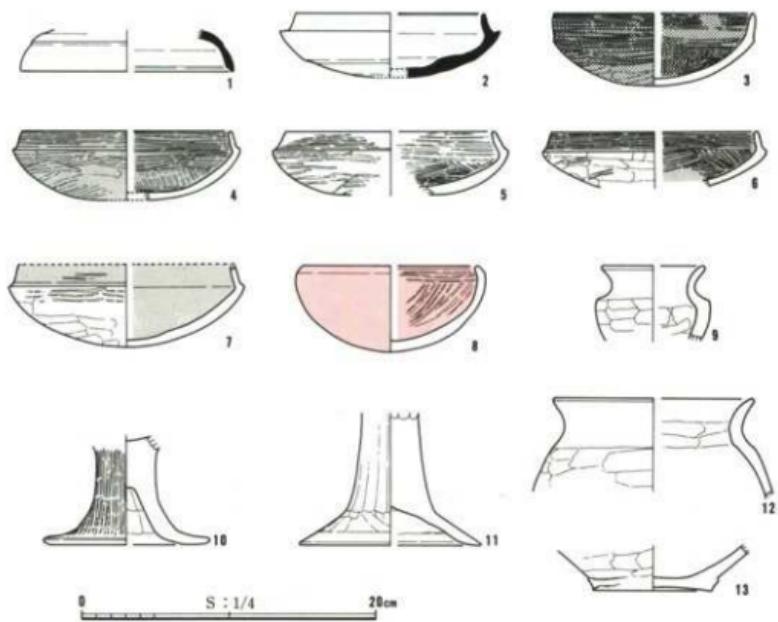
10・11は土師器高杯の脚部である。10は赤橙色で、長石粒等をやや多く含む。焼成は普通である。杯部内面にもヘラミガキが施されている。11は暗赤褐色で、長石粒等の微細石粒を多く含む。焼成は良好で乾燥の進んだ段階で外面にミガキを行っているために、固化不能である。

12・13は土師器甕である。ともに外面赤橙色で、内面は黒褐色である。胎土中には長石粒、酸化鉄粒を多く含む。焼成は普通である。

SI 1



SI 2



第18図 SI 1・SI 2出土土器実測図

SI 3 (第19図、図版20)

1は須恵器蓋である。器肉が小豆色、器表面が暗い青灰色で、外面には黒っぽい自然釉がみえる。鉄分を少し含み、焼成は良好である。外面天井部の上半は回転ヘラケズリ。

2から6は土師器杯である。2は器肉が乳褐色、器表面が黒褐色で全面に樹脂仕上げがなされている。胎土中には長石粒、酸化鉄粒等を少し含む。焼成は良い。3は器肉が乳褐色、器表面は外面が赤橙色、内面が赤橙色と黒褐色で、長石粒、酸化鉄粒等が多く含まれている。焼成は良い。4は器肉が赤橙色、器表面が暗赤褐色である。石英粒、酸化鉄粒等を多く含み、ザラザラである。焼成は普通。5は手持ちヘラケズリによって、底部が平底に整えられている。色調は赤橙色で石英粒、酸化鉄粒等を多めに含む。ザラザラしており、焼成は良い。6は5と同様に平底で、色調は橙褐色で胎土中には長石粒等が多く含まれザラザラである。焼成は良い。

7は手捏ね土器で、胴が張って寸詰まりの短頸壺のような形状をしている。色調は暗褐色で長石粒、酸化鉄粒を多目に含み、焼成は普通である。

SI 5 (第19図、図版20)

1は須恵器の蓋である。色調は灰色で胎土は白色石粒をわずかに含み、焼成は良好である。

2は土師器杯である。器肉が暗褐色、器表面は暗褐色で、胎土中に長石粒、酸化鉄粒等の石粒を多めに含み、焼成は普通である。内面は亀裂が多く入っており、観察不能である。

3から5は土師器高杯の杯部分である。3は器肉が乳橙色で、器表面が赤橙色、雲母粒をわずかに、酸化鉄粒を多く含み焼成は良好である。4は器肉中央が灰白色、器表部分が乳橙色で、雲母粒、酸化鉄粒を多めに含む。焼成は普通である。5は器表面は全面赤彩、器肉は乳褐色で焼成は良い。

6は手捏ね土器である。色調は赤橙色で長石粒を少し含み、焼成は普通である。

SI 6 (第19図、図版20)

1は須恵器蓋である。やや暗い青灰色で石英粒等を少し含み、焼成は良好である。

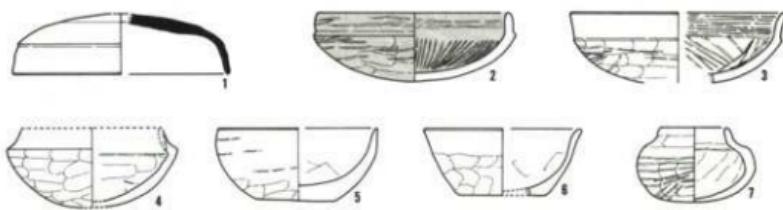
2から4は土師器杯である。2は内外面上半に赤彩が施されている。石英粒、雲母粒、酸化鉄粒を普通に含み、焼成は良い。3は赤橙色で長石粒をやや多めに含み、焼成は良い。4は全面に赤彩が施され、器肉色調は橙褐色である。酸化鉄粒、雲母粒を少し含み、焼成は良い。

5は土師器壺で色調は黒っぽい褐色で、長石粒等を多量に含み、焼成は普通である。

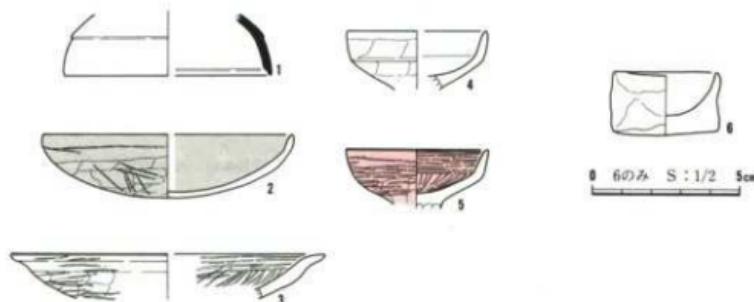
SI 7 (第19図)

1は土師器杯である。器肉は黒灰色、器表外面が乳橙色、内面が黒色から灰色、長石粒、雲母粒を少し含み、焼成は良い。外面の一部に油煙煤の付着が見える。

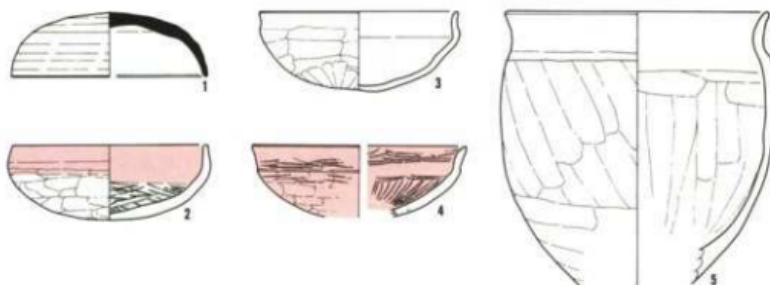
SI 3



SI 5



SI 6



SI 7



第19図 SI 3・SI 5・SI 6・SI 7出土土器実測図

SI 8 (第20図、図版20)

1から8は土師器杯である。このうち1から6は内面全面から外面上半にかけて赤彩が施されている。しかもこれらの製作技法はほぼ共通で、内面は全面ヘラミガキ、外面は口縁部がヨコナデ、それ以下は手持ちヘラケズリの後に上半にヘラミガキが施されている。1は器肉の色調が乳褐色で、長石粒、雲母粒を少し含み、焼成は良い。2は器肉の色調が乳褐色で胎土中には長石粒等をわずかに含む。焼成は普通である。3は器肉の色調が乳橙色で雲母粒等を少し含み、やや粉っぽい。焼成は良い。4は器肉の色調が乳褐色で、胎土中の混和物はほとんど無い。焼成は良い。5は色調乳褐色で、器表外面には黒斑がみられる。雲母粒を少し含み、焼成は良い。6は色調乳橙色で、雲母粒をわずかに含むほかは全体に石粒量は多くない。焼成は良い。内面は摩滅のために観察がほとんどできなかった。7は橙褐色で、雲母粒等の石粒を少し含み、やや粉っぽい。焼成は普通である。8は乳橙色で酸化鉄粒、雲母粒を少し含む。焼成は普通である。

9は土師器高杯の脚部資料である。器表外面に赤彩が施されている。器肉色調は乳褐色で、雲母粒をわずかに含む。全体にトロトロの雰囲気だが、焼成は良い。

SI 9 (第20図、図版21)

1は土師器杯である。色調は器肉が灰色から乳褐色、器表が橙褐色である。石英粒、酸化鉄粒を普通に含み、焼成は良い。

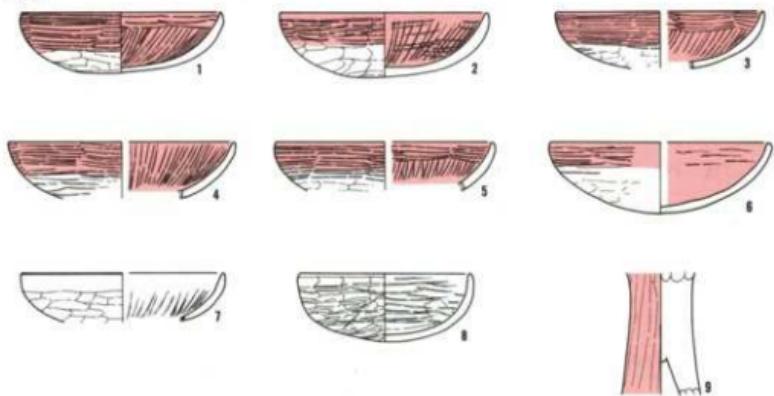
2は土師器甕である。色調は赤橙色で、酸化鉄粒、石英粒を多量に含み、焼成は普通である。

SI 10 (第20・21図、図版21・22)

1から9は土師器杯である。1は器肉灰褐色で器表面は内外面全面に樹脂仕上げが施されている。胎土中には石英、雲母粒を少し含む。焼成は良い。2は内面全体から外面上半にかけて赤彩が施されている。色調は乳橙色で外面には黒斑がある。胎土中の石粒量は少なく、焼成は普通である。3は2と同様の赤彩が施されており、器肉は乳橙色で石英粒を少し含み、焼成は良好であるが器面は摩耗している。4は赤橙色で石英粒、酸化鉄粒を多めに含み、焼成は普通である。5は内面全面から外面口縁部にかけて樹脂仕上げがなされている。石英粒をわずかに含み、焼成はやや悪く器面は摩耗している。6は橙色で石英粒を少し含み、器表内面は摩耗している。7は橙色で石英粒、酸化鉄粒を多めに含み、器表内面は摩耗している。8・9は内面全体から外面口縁部上位にかけて赤彩されている。8は内面ヨコナデで外面底部には黒斑が見える。石英粒を多く含み、焼成は良好である。9は石英を少し含み、器面は摩耗している。

10は土師器高杯の杯部資料で、器表は内外面全体に赤彩が施されている。器肉は乳褐色で、酸化鉄粒、雲母粒を普通に含む。焼成は普通である。

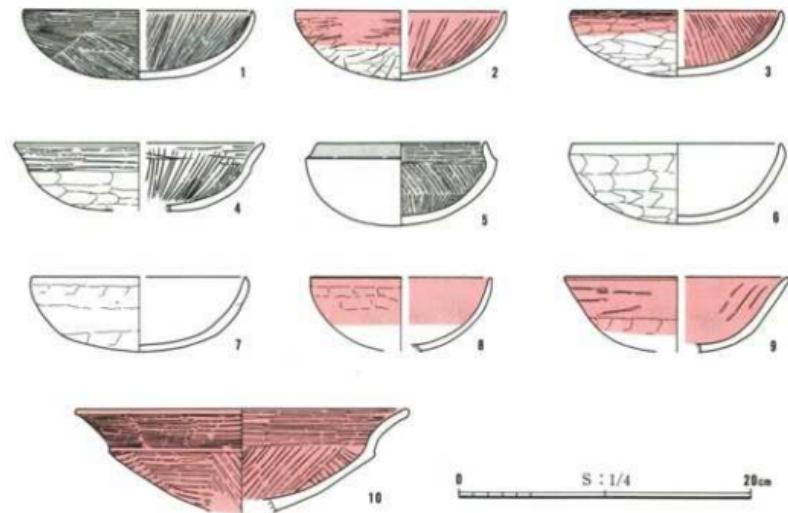
SI 8



SI 9



SI 10



第20図 SI 8・SI 9・SI 10出土土器実測図

11は土師器甌である。色調は橙褐色で外面に黒斑がある。胎土中には混和物はほとんど無く、焼成は良い。内面はヘラケズリ後にほぼ全面にヘラミガキが施されている。ミガキはかなり丹念に行われている。

12から16は土師器甌である。12は胴部が極端に張り、頸部がすぼまる形態のものである。頸部内面には明瞭な粘土紐接合痕が見える。器肉が橙褐色で器表面は暗褐色、内面はやや黒っぽい。胎土中には石英粒、酸化鉄粒等の石粒を多く含む。焼成はやや悪く、全体に軟らかい。図中の空白部分はナデであるが、単位が見えず図化不能である。13のスクリーントーンで表示した部分には煤が付着している。そのほかの器面部分の色調は橙褐色で、石英粒を多く含み、焼成は普通である。14は色調乳橙色で、胎土中に石英粒をやや多めに含み、焼成は普通である。15は器表面が内外面ともに乳褐色、器肉中心部分が黒灰色のサンドウィッチ状を呈し、胎土中には石英粒を含むが甌としては石粒含有量の少ない方である。器面はやや粉っぽいのだが、全体の焼成は良い。頸部は内外面ともにやや幅広のミガキが施されている。16は器表外面が橙褐色、内面が黒褐色、器肉中央が橙褐色である。胎土中には石英粒を多く含む。焼成は普通であるが器表内面は剥離が進んでいる。このため内面の調整はナデであろうと考えられるのだが、図化することはできなかった。

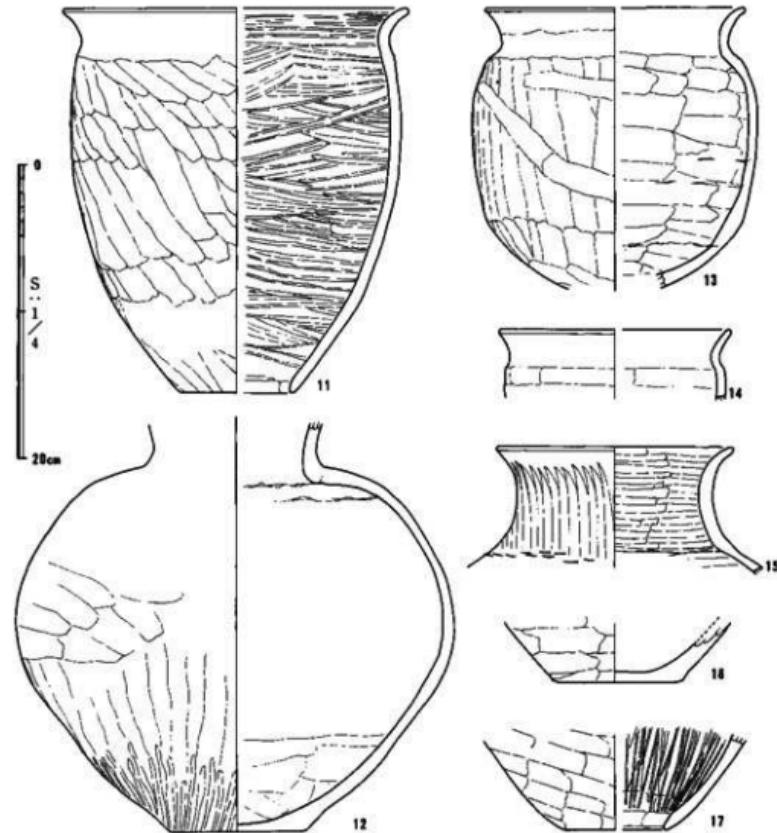
17は土師器甌の底部付近の資料である。色調は橙褐色で器表外面には黒斑がある。胎土中に石英粒をやや多めに含む。焼成は良い。

SI 11 (第21図、図版22)

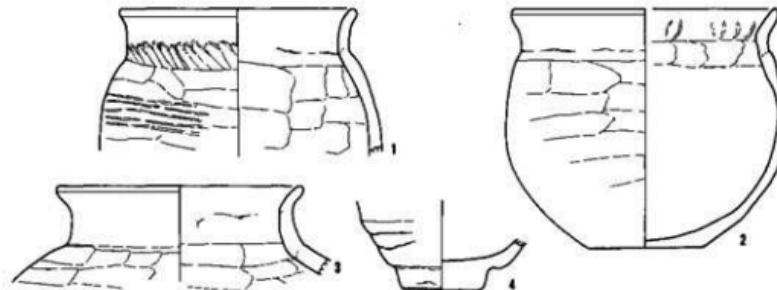
1から3は土師器甌である。1は器内の色調が乳橙色、器表面が内外面橙褐色である。胎土中には石英粒をやや多めに含み、焼成は普通である。頸部外面の斜め方向の深めの調整はヘラケズリによるものである。2は口径と胴径がほとんど同じ大きさの形態である。口唇部は尖り気味に仕上げてある。色調は器肉が乳橙色で器表面は内外面のほとんどの部分が暗褐色で、内面の中央部分と底部付近が帯状に赤橙色になっている。外面口縁部から内面全体にかけては横方向のナデによって調整されているが、内面は口縁部、頸部、胴部でナデの強さが明瞭に異なる。胎土中には石英粒が含まれている。3は器肉中央が暗い灰色、その外側が乳褐色、そしていちばん外側の器表面が赤橙色という層状をなしている。胎土中には石英粒をやや多く含んでいる。焼成は良好である。器表外面は図化できなかったが胴部横方向のヘラケズリの後に横方向の粗いミガキが行われている。

4は口縁上部を欠失しているが、これより上の部分はそれほどにのびずに終わるものと考えられる。手捏ね土器と考えて良いだろう。成形時の粘土紐巻き上げ痕が明瞭に残されている。色調はやや赤味がかった乳橙色で、胎土中には酸化鉄粒、雲母粒を少し含む。焼成は普通である。底部外面には木葉痕が見える。

SI 10



SI 11



第21図 SI 10・SI 11出土土器実測図

SI 12 (第22図、図版22・23)

1、2は須恵器高杯の杯部であろうと考えられる。1は色調が部分によってやや異なるが、小豆色から黒っぽい灰色である。内面には薄い灰色の自然釉がかかっている。胎土中には石英粒を少し含み、焼成は良好である。2は色調は灰色で、石英粒を少し含む。焼成は良好である。

3から5は土師器杯である。5は器肉が乳褐色、器表面は全面に樹脂仕上げが施されており、黒褐色になっている。外面後円部から内面全体はヨコナデで調整されている。酸化鉄粒、石英粒をわずかに含み、焼成は良い。4は器表内面全体に赤彩が施されている。外面は剥離がひどくヘラケズリが行われていることまでは分かるが、赤彩の有無についてはわからなかった。色調は橙褐色で石英粒を含み、焼成は良い。5は乳褐色で胎土中の混和物はほとんど無い。焼成は良好である。内外面の底部付近には樹脂を塗ったような痕跡が見える。

6、7は土師器高杯である。6は器表は内外面全面に赤彩が施されている。器肉は乳橙色である。胎土中には酸化鉄粒、雲母粒をわずかに含み、焼成は良好である。7は器肉中央が乳橙色、器表面は赤橙色である。胎土中に石英粒を多く含み、焼成は普通である。器面の摩耗が進んでおり、杯部内面はミガキがわずかに見える程度である。

8は土師器の小型広口壺ある。器表外面には赤彩が施されており、色調は赤橙色から褐色で、石英粒を多く含み、焼成は普通である。外面には黒斑がある。

9は土師器壺である。色調は器肉が乳橙色、器表面が赤橙色で外面には黒斑がある。石英粒を多く含み、焼成は普通であるが、外面は摩耗が進んでいる。

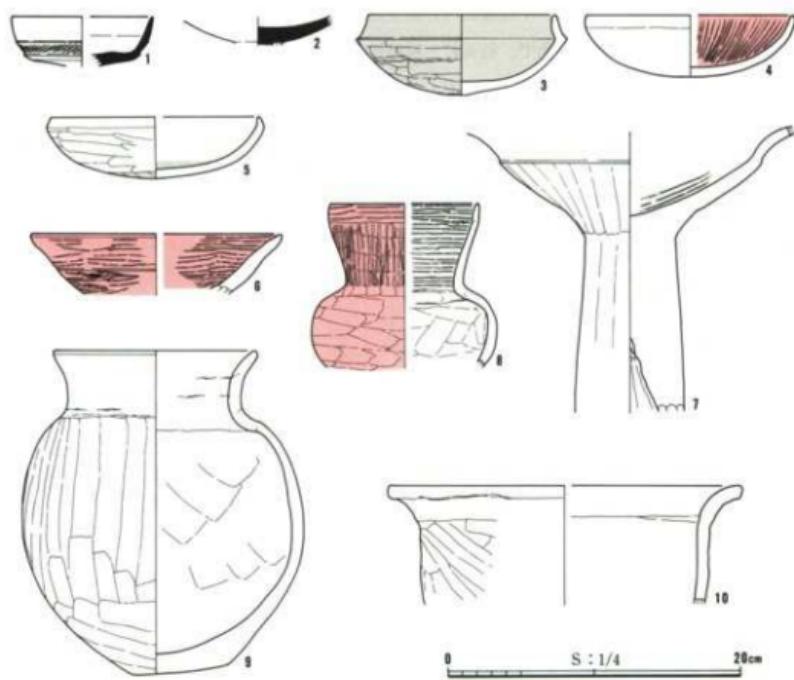
10は土師器の壺と考えられる。器肉中央が黒灰色、外側は赤橙色で、石英粒等の石粒を多く含みザラザラしている。焼成は普通であるが、器表面には細かい亀裂が走っている。

SI 14 (第22図、図版23)

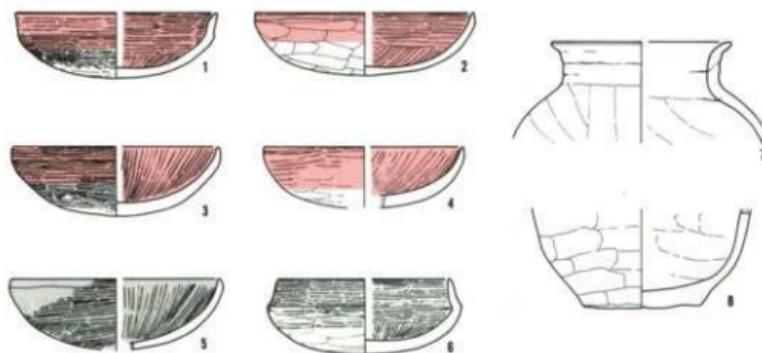
1から6は土師器杯である。このうち1から4は器表面の内面全体から外面上半にかけて赤彩が施されている。1は色調乳橙色で、酸化鉄粒をわずかに含む。焼成は良い。2は乳橙色から灰色で、酸化鉄粒、石英粒等を多めに含む。焼成は普通である。3は乳褐色で酸化鉄粒をわずかに含む、焼成は普通である。4は乳橙色で酸化鉄粒、石英粒を少し含む。5は器表面全体に樹脂仕上げが施されている。器肉は灰褐色で、酸化鉄粒、石英粒等を多く含む。焼成は普通である。6は橙褐色で酸化鉄粒、石英粒を普通に含む。焼成は普通であるが、器面の剥離が進んでいる。

7、8は土師器壺である。7は器表外面が赤橙色で、内面は黒色である。石英粒、酸化鉄粒をやや多めに含み、焼成はふつうである。口縁部は内外面横方向のナデ、胴部内面は斜め方向のナデ調整が施されている。頸部には粘土紐接合痕が明瞭に見える。8は赤橙色で石英粒、酸化鉄粒をやや多めに含み、焼成は良い。

SI 12



SI 14



第22図 SI 12・SI 14出土土器実測図

SI 15 (第23図、図版23)

1から3は土師器杯である。1は器表内外面全面に、2・3は内面全面と外面上半に赤彩が施されている。1は器肉乳褐色で、石英粒、雲母粒を少し含む。焼成は良い。2は乳黄色で、石英粒、雲母粒を少し含み、焼成は良好である。3は乳橙色で、酸化鉄粒、雲母粒を少し含む。焼成は普通である。

4から6は土師器甕である。4は乳褐色で、大粒の石英粒や雲母粒を多量に含む。頸部には明瞭な粘土紐接合痕が見える。5は器肉が乳橙色、器表面は外面が橙褐色から黒褐色、内面が乳褐色から黒褐色である。石英粒を多量に含み、焼成は普通である。6は器肉中央が橙褐色、器表外面がやや暗い橙褐色、内面が黒色である。胎土中には石英粒等のやや大きめの石粒を多く含む。焼成は普通である。

SI 16 (第23・24図、図版23)

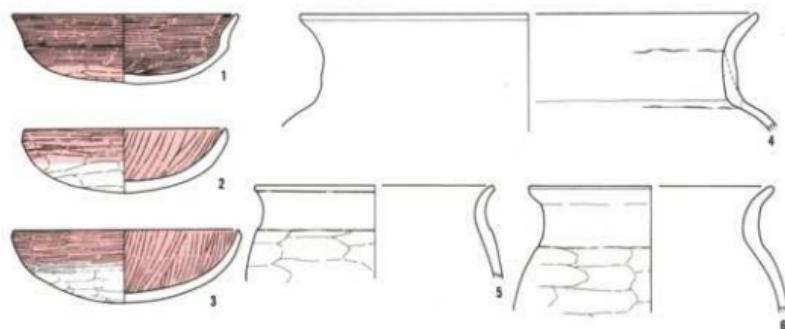
1から6は土師器杯である。1から3は器表面全面に樹脂仕上げが施されている。1の器肉の色調は橙褐色から褐色である。胎土中に石英粒、酸化鉄粒、雲母粒等を普通に含む。焼成は普通である。2の器肉の色調は乳橙色で石英粒等を普通に含む。焼成は普通である。3の器肉の色調は小豆色で、胎土中には酸化鉄粒を少し含む。焼成は良い。内面全面から外面口縁部にかけてはヨコナデで調整されている。4の色調は赤橙色で、胎土中に石英粒を普通に含む。焼成は良い。5は内面全体から外面上半にかけて赤彩が施されている。器肉の色調は乳橙色で、胎土中には石英、雲母粒をわずかに含み、全体にサラサラしている。焼成は良い。6の色調は橙褐色で、胎土中には石英粒を少し含む。焼成は普通であるが、器表面は全体に摩耗が進んでいる。

7は土師器高杯である。色調は赤橙色で、石英粒を少し含み、焼成は普通である。調整は外面の段から下の部分が縦方向のヘラケズリ、それ以外の部分は横方向のナデである。

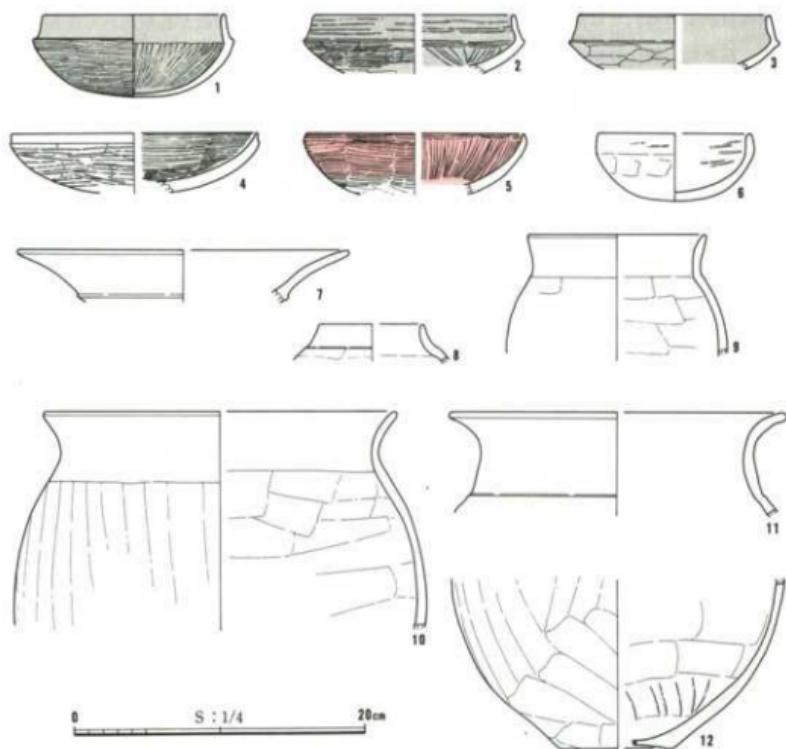
8は土師器小型壺である。色調は器表外面が黒色、それ以外の部分は赤橙色である。但し遺存率20%での観察であるから、外面全体が黒色であったかどうかはわからない。石英粒をわずかに含み、焼成は良い。

9から14は土師器甕である。9は色調が橙色で、胎土中に石英粒、酸化鉄粒を少し含み、焼成は良好である。但し、外面は剝離が進んでいる。10は乳褐色から乳橙色で、外面には黒斑が見える。胎土中には石英粒を多めに含む。焼成は普通である。14と同一個体である可能性が高い。11の色調は器表内面のみが褐色、他の部分は乳橙色である。胎土中に大粒の石英粒を多量に含む。焼成は普通であるが、器面の摩耗が進んでいる。12は器肉が小豆色、そのやや外側の部分が橙褐色で、器表面が黒褐色から暗褐色である。胎土中には石英粒が多量に含まれている。焼成は普通である。

SI 15



SI 16



第23図 SI 15・SI 16出土土器実測図

13は器表面の摩耗が進んでいるために調整技法の図化が不可能であったが、口縁部は内外面ヨコナデ、胴部は外面が斜め方向のヘラケズリ、内面は横方向のヘラナデである。色調は乳褐色で外面に黒斑がある。胎土中には石英粒を多量に含み、焼成は普通である。14は器肉から内面が乳橙色、外面が黒色である。石英粒を多めに含み、焼成は普通である。10と同一個体の可能性が高い。

SI 17 (第24図、図版23・24)

1は須恵器杯である。器肉中央部が小豆色、器面は内外面ともに黒灰色である。石英粒を少し含み、焼成は良好である。内面底部には中央さらにその外側に同心円で指頭圧痕列が見える。

2から5は土師器杯である。2は内面全面から外面上半にかけて赤彩が施されている。色調は乳橙色で雲母粒、酸化鉄粒を少し含む。焼成は良い。3は橙褐色で、外面底部には黒斑がある。石英粒等を普通に含み、焼成は良好である。4は橙褐色で、酸化鉄粒、石英粒を少し含む。焼成は普通である。5は器肉が乳橙色、外面が黒色から暗赤褐色、内面が乳橙色から暗褐色である。石英粒、酸化鉄粒を少し含み、焼成は良い。

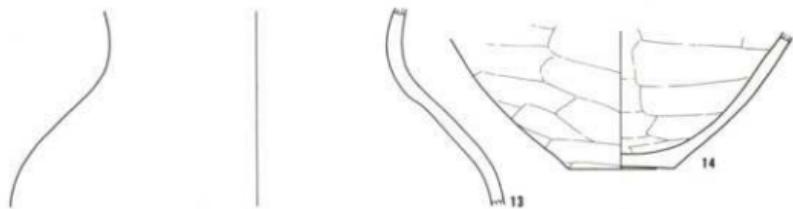
6から10は土師器甕である。6はごく小さな甕で、口径と胴径がほとんど変わらない。色調は赤橙色から黒色で、石英粒を少し含む。焼成は普通である。底部外面に木葉痕が見える。7は器面の摩耗が進んでいるために調整技法は分からぬ。乳橙色で石英粒を少し含み、焼成は全体的には良い。8は器肉が乳橙色、器表面が暗褐色から黒褐色である。大粒の石英粒を多く含み、焼成は良い。9は器肉から外面にかけてが赤橙色、内面が暗赤褐色で、石英粒を普通に含み、焼成は良い。10は器肉が乳褐色、外面が暗褐色、内面が褐色で、胎土中に大粒の酸化鉄粒、石英粒を多めに含む。焼成は良い。

11は土師器片であるが器種は分からぬ。内面にミガキが施されている。外面に見える数条の溝は砥石として転用した結果と考えられる。

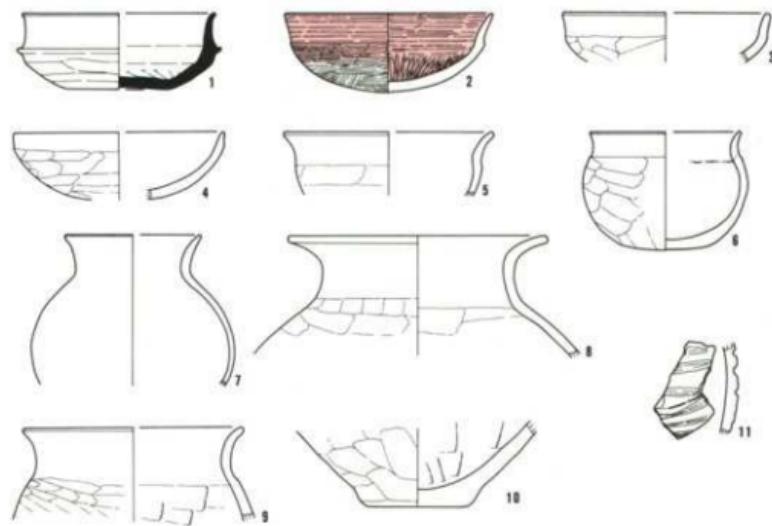
SI 18 (第24・25図、図版24)

1から8は土師器杯である。1から7は器面の内面全体から外面上半にかけて赤彩が施されている。1・2は乳橙色で石英粒をわずかに含み、焼成は普通である。3は乳褐色で石英粒をわずかに含み、焼成は良い。4は乳橙色で雲母粒をわずかに含み、焼成は良い。外面は摩耗が進んでいる。5は橙色で酸化鉄粒、石英粒を少し含む。焼成は良いが、内面は摩耗が進んでいる。4・5は外面に最後に粗いミガキが施されている。6は乳橙色で、酸化鉄粒、石英粒、雲母粒をわずかに含む。焼成は良い。7は器肉が灰黄色、器表面が乳橙色で大粒の酸化鉄粒や石英粒、雲母粒を少し含む。焼成は良い。8は外面が黒褐色、それ以外の部分は乳橙色である。石英粒、酸化鉄粒を少し含む。焼成は普通である。内面はヨコナデで整えられている。

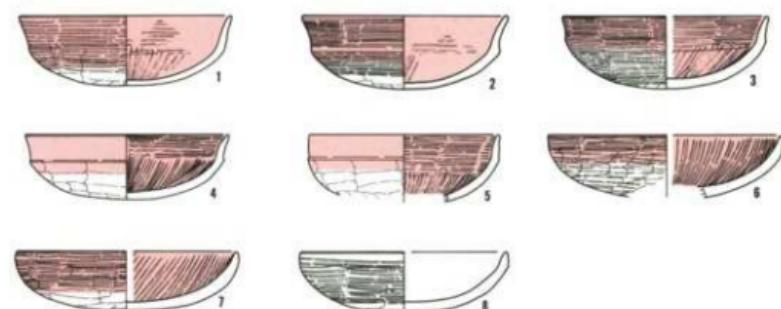
SI 16



SI 17



SI 18



第24図 SI 16・SI 17・SI 18出土土器実測図

9は土師器壺である。球胴気味の形態で、底部では直立を意識した立ち上がり方になっている。色調は外面が黒褐色、内面は上半が黒褐色、下半が灰褐色、器肉も灰褐色を呈している。胎土中には石英粒、酸化鉄粒、雲母粒をやや多めに含む。焼成状況は普通である。調整は外面上半が横方向のナデ、下半が斜め方向のヘラミガキ、底部付近から底面にかけてがヘラケズリで処理されている。内面は全体に横方向のヘラナデである。外面には縦方向の細く短い亀裂が横並びに数条みえる。これは粘土紐の練りが甘かったために起きたものと考えられる。

10は土師器壺である。色調は全体に乳橙色を呈している。胎土中には酸化鉄粒、雲母粒を少し含んでいる。焼成は良い。調整は口縁部が外表面とともにヨコナデ、胴部は外面がヘラケズリ、内面はヘラケズリのあとに丁寧なヘラミガキが施されている。底部端部はヘラケズリによって整えられている。

SI 19 (第25図、図版24)

1は須恵器の杯である。色調は全体に暗い青灰色である。胎土中には大粒の石英粒が多量に含まれている。焼成は良好である。外面底部下半は回転ヘラケズリによって仕上げられている。内面口縁端部に弱い段が見える。また内面底部中央部には二つ並んで指頭圧痕がある。

2・3は土師器の壺である。2は小型の壺で、口縁部は短く直立している。色調は部位によってやや異なり、黒褐色から橙褐色である。胎土中には石英粒が少し見える。焼成は普通である。口縁部は外表面とともにヨコナデで、胴部は外面がヘラケズリ、内面がヨコナデである。外面口縁部に図示したのは成形時のシワと考えられる。また、内面には粘土紐接合痕が明瞭に見える。3は口縁部分に片口のような部分があるが、意図的なものなのかどうかは即断できない。また胴径、口径が片口状の部分を正面にもって行ったときと横にもって行ったときとでは極端に異なるために、二方向からの実測図を提示した。色調は暗褐色から乳橙色で、粘土ダマと考えられる灰色の塊、酸化鉄粒、石英粒等を多く含む。焼成は普通である。

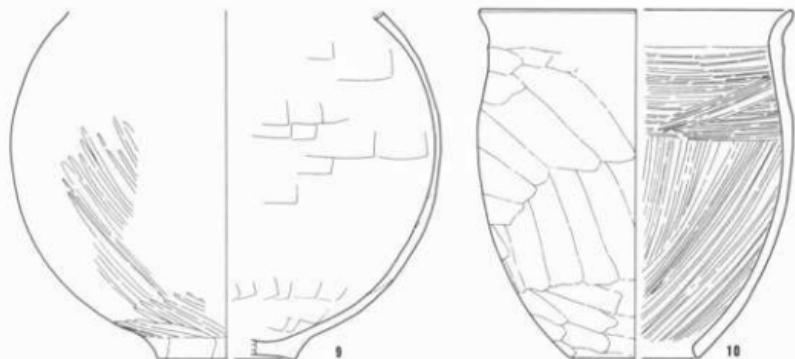
SI 20 (第25図)

1は土師器杯である。内面全体から外面上半に赤彩が施されている。器肉色調は乳橙色で、胎土中には雲母粒がわずかに含まれている。焼成は良好である。

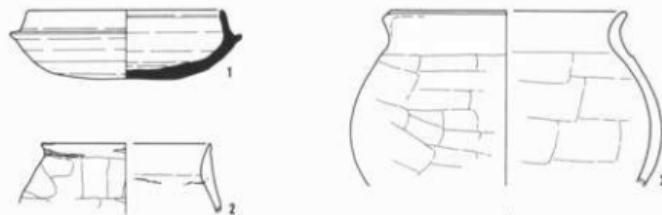
SI 21 (第25図、図版24)

1・2は土師器杯である。1は内面全体から外面上半にかけて赤彩が施されている。色調は全体に乳褐色で、底部付近は器肉、器表ともに黒色である。石英粒をわずかに含み、焼成は良い。2は器肉が乳橙色、器表は外表面ともに上半黒褐色、下半橙褐色である。酸化鉄粒、雲母粒をわずかに含む。焼成は良い。

SI 18



SI 19



SI 20



SI 21



0 S : 1/4 20cm

第25図 SI 18・SI 19・SI 20・SI 21出土土器実測図

2 節 平安時代住居出土の土器

SI 4 (第26・27図、図版24・25)

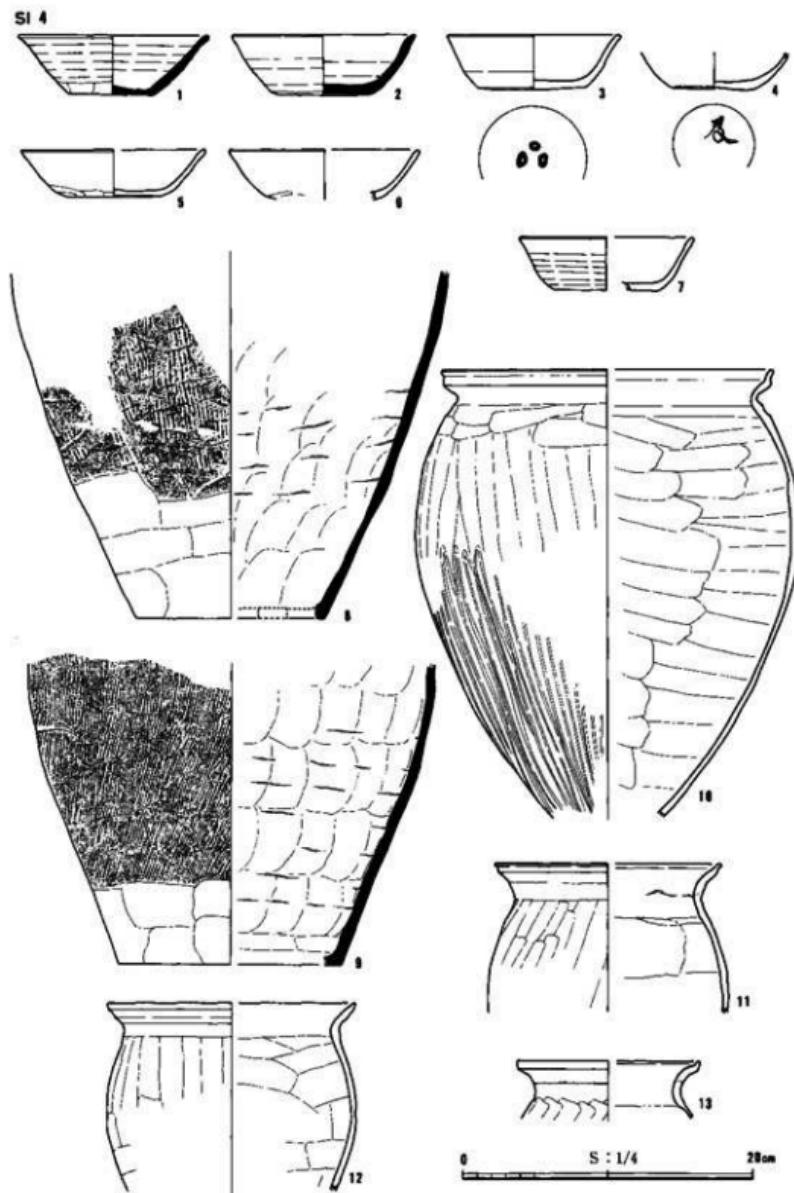
1・2は須恵器杯である。1は色調黒褐色で、クスベ焼きと通称されるものである。石英粒、雲母粒を多めに含む。焼成は普通である。底部外面は一方向の手持ちヘラケズリで調整してある。焼成は普通である。2はいびつな資料である。器肉が橙褐色で器表面は灰白色である。長石粒等をやや多めに含み全体にザラザラしている。底部外面の調整は1と同じで、焼成は良い。

3から7は土師器杯である。3は底部外面にU型に○が墨書きで表されている。色調は乳褐色で酸化鉄粒を多めに含み、焼成は良い。4は底部外面に「及」と墨書きされている。色調は器表外面が赤橙色、それ以外の部分は白っぽい灰色である。胎土中には長石粒、酸化鉄粒を多めに含む。焼成は良い。外面の赤橙色は、一見して赤彩によるもののように見えるが、実際は胎土中の鉄分の噴き出しによるものである。5は乳橙色で、長石粒、酸化鉄粒等を含み、焼成は良好である。底部外面中央には回転糸切りの痕跡があり、その周辺から底部下端までは手持ちヘラケズリで整えられている。6は口縁部のみの資料で、色調は乳橙色、長石粒、酸化鉄粒等を含み、焼成は良好である。7は器肉中央が灰白色、それ以外の部分は乳橙色である。雲母粒、酸化鉄粒を少し含み、焼成は良好である。外面底部中央には回転糸切り痕が残り、その周辺は手持ちヘラケズリで整えられている。

8は須恵器甌である。色調は器肉が橙褐色、それ以外の部分は灰色から灰褐色である。雲母粒、石英粒を多量に含み、焼成は良い。但し、器表は摩耗が進んでいる。外面は縦の平行タタキで成形したあとに、胴部下位以下の部分を横方向のヘラケズリで調整している。内面にはタタキの際の當て具痕の他に、粘土紐の巻き上げ痕が明瞭に残る。底部の形状については多孔式のものであろうと考えられる。

9は須恵器甌である。色調は器肉が灰色と褐色の互層状、器表は外面が黒灰色、内面が灰色である。石英粒、雲母粒、酸化鉄粒等を多く含み、焼成は良い。内面には8と同様に當て具痕があり、粘土紐接合痕が明瞭に見える。

10から15は土師器甌である。10はいわゆる常総型の甌で、色調は橙褐色で外面胴部上位以下、内面胴部下位以下に煤が付着している。口縁部は内外面ともにヨコナデ、胴部外面は全体に縦方向のヘラケズリを行った後に、頸部付近は横方向のヘラケズリ、胴部下半は往復させるような縦方向のヘラミガキ、胴部内面は横方向のヘラナデによって整えられている。胎土中に石英粒、雲母粒を多量に含み、焼成は普通である。11は黒褐色から橙褐色で、石英粒を少し含み、焼成は良い。頸部内面には粘土紐接合痕が見える。12は暗褐色から橙褐色で、長石粒をやや多めに含む。13はかなり小型の甌である。色調は橙褐色で、胎土中には長石粒を少し含む。焼成は良好である。



第26図 SI 4出土土器実測図

14は常総型甕の底部付近である。色調は橙褐色で、器表外面は暗褐色である。石英粒、雲母粒を多く含み、焼成は良い。15は橙色で、胎土中には長石などを少し多めに含む。焼成は良い。

SI 13 (第27図、図版25)

1は須恵器杯である。色調は器内が淡い灰色、器表面が黒灰色で、やや大粒の石英粒、雲母粒等を多めに含む。焼成は良い。底部外面は一方のヘラケズリで整えられている。

2から7は土師器杯である。2は器肉中央が乳褐色、器表面が乳橙色で、石英粒をやや多めに含み、焼成は良い。底部外面は中央に回転糸切りの痕跡がみられ、周辺は手持ちヘラケズリを行っており、「及」と墨書きされている。3は内面が黒色処理されており、他の部分は橙褐色で、石英粒を含み、焼成は普通である。外面の墨書きは「及」であろうと考えられる。4は灯明皿に使われていたようで、内外面口縁部に油煙煤が付着している。内面底部中央部分には「及」と墨書きされている。色調は乳褐色で石英、酸化鉄粒を少し含む。焼成は良い。底部外面は中央に回転糸切り痕が見え、周辺は手持ちヘラケズリで整えられている。5は乳橙色から赤橙色で、石英粒を少し含み、焼成は良い。外面底部中央には回転糸切り痕があり、口縁部中位以下底部の周辺部にかけては手持ちヘラケズリが行われている。6は橙褐色で、石英粒、酸化鉄粒を多めに含み、焼成は良い。底部外面中央には回転糸切り痕、その周辺部から口縁部下端にかけては回転ヘラケズリが施されている。7は高台付杯で、器肉が赤橙色、それ以外の部分は暗褐色から赤橙色、胎土中に石英粒をわずかに含み、焼成は良い。内面のミガキは周辺4区画、中央が一方向という規格的なものである。

8・9は土師器甕である。8は外面全体から内面上半にかけてが黒褐色で、それ以外の部分は橙褐色である。石英粒、雲母粒を含み、焼成は良い。9は常総型の甕で、外面中位以下にはカマドの砂と考えられる黒色の砂粒が付着している。それ以外の部分は橙褐色から暗褐色である。石英粒、雲母粒をやや多めに含み、焼成は良い。

SI 23 (第27図、図版25)

1は土師器杯で内面は黒色処理されている。色調は灰色から橙褐色で、石英粒を含み、焼成は良い。底部外面には回転糸切り痕がある。

2から4は土師器甕である。3と4は同一個体かと考えられる。2は暗褐色で、石英粒を多めに含み、焼成は良い。3・4は黒褐色から赤橙色で酸化鉄粒、石英粒を少し含み焼成は良い。

SI 24 (第27図)

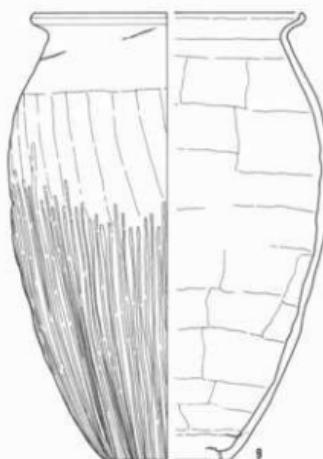
1は須恵器杯である。灰色で石英粒、雲母粒を含み、焼成は普通である。

2は土師器甕で、色調は橙褐色から黒褐色で、石英粒等を含み、焼成は良い。

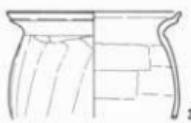
SI 4



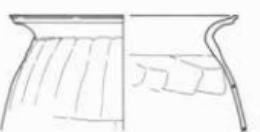
SI 13



SI 23



SI 24



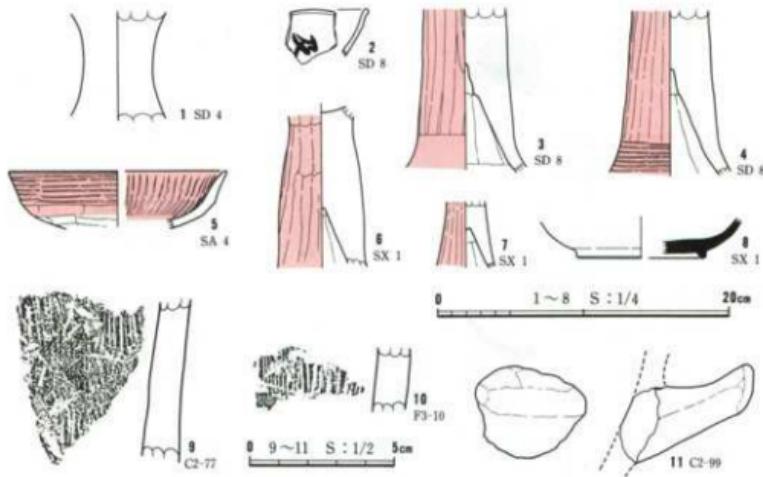
0 S : 1/4 20cm

第27図 SI 4・SI 13・SI 23・SI 24出土土器実測図

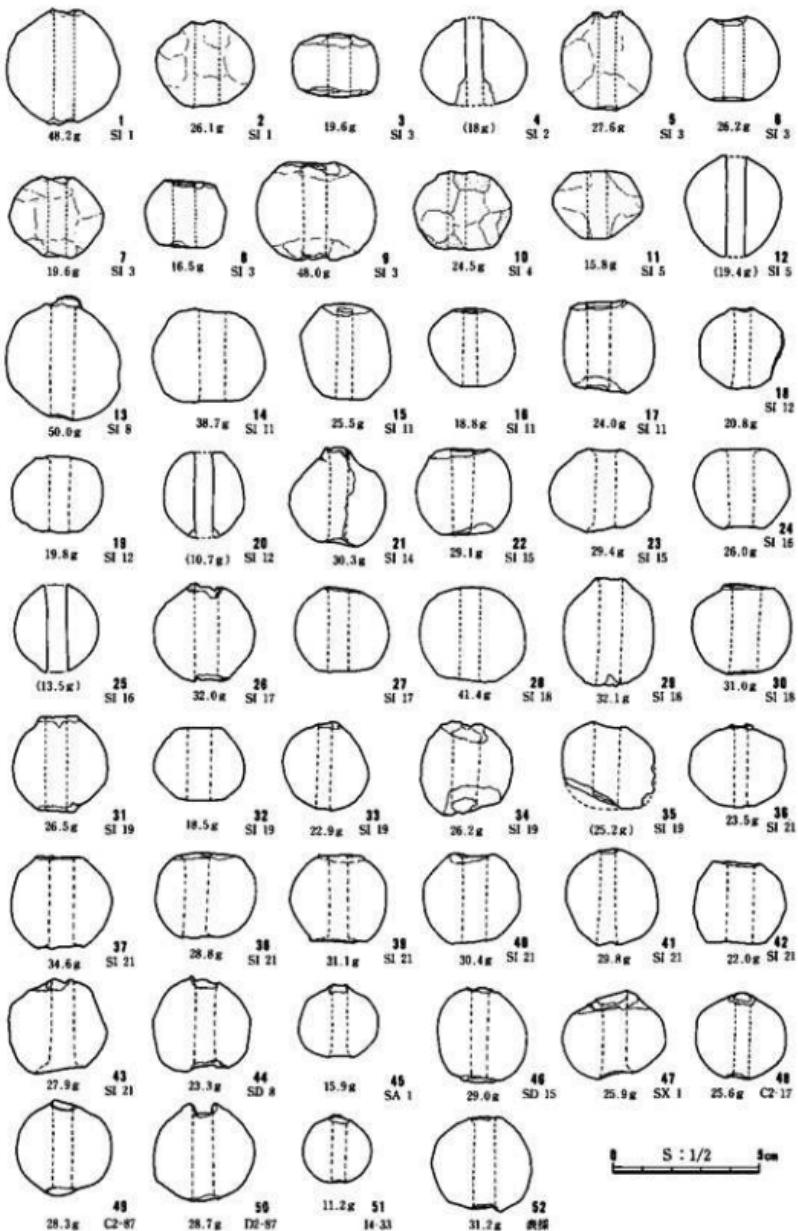
3 節 その他の遺構出土の土器など

(第28図)

1はSD 4出土の土師器高杯脚部である。色調は乳橙色で、石英粒をやや多めに含み全体にサラサラ、焼成は普通である。2から4はSD 8からの出土資料である。2はロクロ土師器杯で、口縁部外面に「及」と横位の墨書が見える。色調は乳橙色で、石英粒をやや多めに含み、焼成は普通である。3・4は土師器高杯脚部である。ともに外面には赤彩が施されている。外面は縦方向のヘラケズリの後に縦方向の粗いヘラミガキを行い、開脚部付近は3がナデのみ4は横方向のヘラミガキで調整されている。ともに酸化鉄粒、石英粒を多く含み、焼成は良く、色調は外面が乳橙色、内面が黒灰色である。5はSA 4出土の土師器杯で、内面全体から外面上半にかけては赤彩が施されている。色調は外面が暗灰色、内面が褐色、石英粒を少し含み、焼成は良い。6から8はSX 1出土資料である。6・7は土師器高杯の脚部である。ともに外面には赤彩が施されており、外面縦方向のヘラケズリの後に、縦方向のヘラミガキが行われている。酸化鉄粒、石英粒を含み、7には粘土ダマが入っている。8は灰釉腕である。底部外面の高台内側は回転ヘラケズリ痕が残り、内面全体には釉がのっている。胎土色調は淡灰色で混和物はほとんど無く、焼成は良好である。9・10はグリッド出土の埴輪片である。ともに円筒状で、色調は乳橙色、酸化鉄粒を少し含み、焼成は普通である。11はグリッド出土の土師器甌の把手部分の破片資料である。色調は器肉が灰色、器表が乳橙色で、酸化鉄粒を少し含み、焼成は良好である。



第28図 その他の遺構出土土器等実測図



第29図 土玉実測図

4 節 土製品

(第29・30図、図版26・27)

1から52は土玉である。ほとんどのものは両端のくびれる形状であるが、4・8・10・14・15は両端が平らかになるように面取りされている。図中（ ）書きの重量は、非完形品の遺存部分のみの重量である。

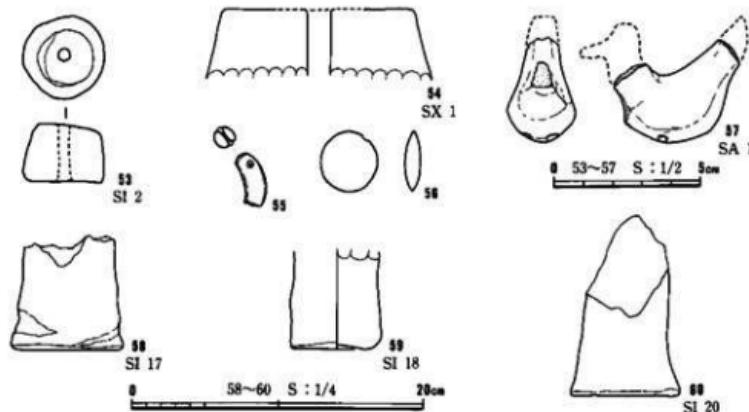
53・54は紡錘車である。53はSI 2の出土資料で、胎土中に長石粒を多く含む。54はSX 1の出土資料である。比較的大型のもので、上面径は6.6cmに復原される。乳橙色で混和物はほとんど無く、焼成は良い。

55は土製の勾玉である。下半部は欠失している。

56は素焼きの基石、またはおはじきのいずれかである。乳橙色で混和物はほとんど無く、焼成は普通である。

57は鳥形の土製品である。頭部と尾部を欠失しているが、足と考えられる部分にみられる2本の差し込みの痕跡からみても、鳥と考えてまちがいないであろう。差し込みの部分は形状からみて、木か竹の細い棒状のものが差し込まれていたのである。

58から60は土製支脚である。



第30図 土製品実測図

5節 磁石、石鉄その他の石製品

磁 石 (第31・32図、図版27)

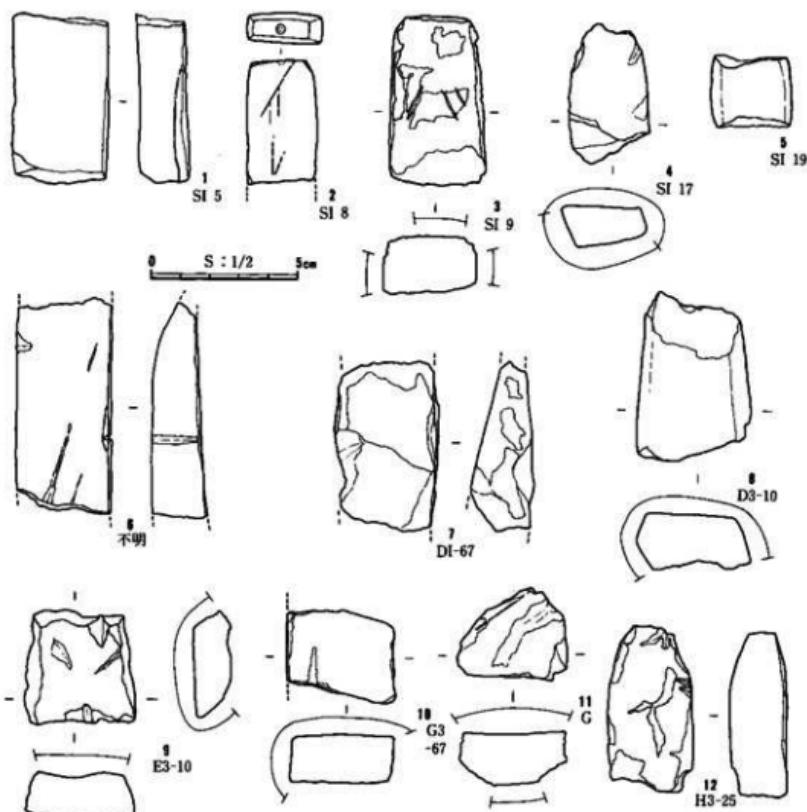
1から17は磁石である。ほとんどが白色乃至灰黄色の粒子の細かいもので、5のみが青灰色である。また、10は軽石の磁石と考えられ、気泡が入っている上に角閃石が中に含まれている。

石 鐵 (第32図)

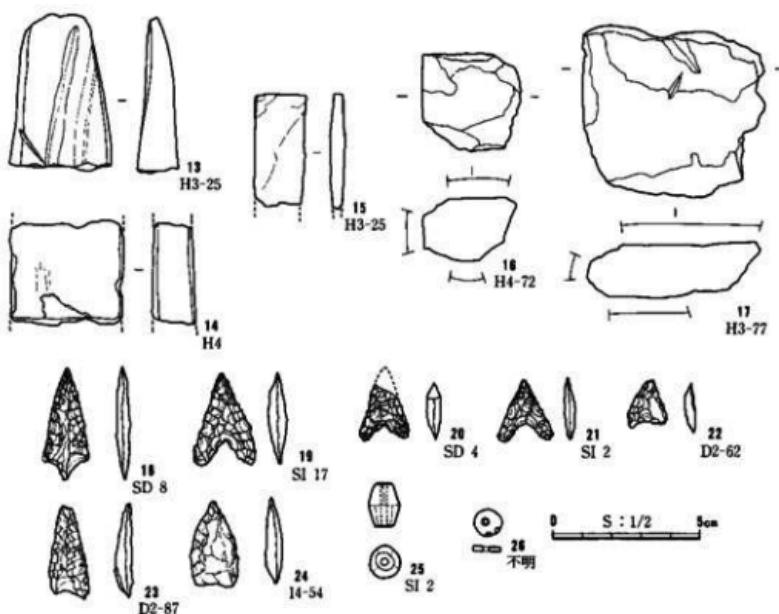
18から22は頁岩、23はチャート、24は黒曜石製である。

その他の石製品 (第32図)

25は滑石製の切玉である。縦方向の稜線は弱い。26は滑石製の臼玉である。



第31図 磁石実測図



第32図 磁石・石鐵その他の石製品実測図

6節 玉製作関連石器

(第33図、図版28)

1は管玉の未成品であり、研磨工程の中段階を示すものであろうか。全面に研磨が及んで断面形は八角柱に仕上げられているが、部分的に側面調整の凹凸が観られ、また下端部には素材の節理を残している。

2・3は管玉の未成品であり、形割品の一部に側面調整が施されたものである。2は側面に気泡の空洞があり込み不良な素材である。調整は棱を取るように側面からの調整と両端からの調整が認められるが、端部からの調整は上下に抜ける調整が観られることから両極技法を用いていると思われる。3は節理の発達した側面を切断状に剥離した横長剝片素材であり、正面に節理面を残置している。調整は裏面に側面調整が集中し下端部を尖がらせるような調整が施される。

4は管玉の未成品であり、形割品に側面調整が施される前段階のものである。上端は切断を行い平坦な面を作出している。

5は板状剝片である。側面に自然面を残す薄い素材である。上下端は切断され上端は斜めに

部分的に研磨されている。臼玉の素材の可能性がある。

6は二次加工を有する剝片とした。上端は切断されており、左側面を下端部が尖るような調整が施される。下端部は右側縁からの調整が観られドリルの機能を持つものである。

7は二次加工を有する剝片とした。厚手の剝片の下端に広い調整と微細な調整が施される。搔器として良い資料かも知れない。6・7については縄文時代所産の石器の可能性があり、玉造関連の石器群としての評価は避けたい。

8は磨製剝片とした。節理方向を利用した薄い板状剝片の表裏に部分的に線状擦り痕が認められる。さらに側縁には調整が認められ裏面左側縁には擦切り痕が看取される。剝形品・勾玉などの石製品の素材と考えられる。

9は剝片である。打面部を欠損するが板状の剝片を企図していると考えられる。

10は滑石の剝片である。表皮面がとろけており剝離構成は明瞭でない。縦方向に節理が発達し、この節理に沿って脆く、容易に管玉の角柱状素材が得られる。

11は緑色片岩の磨製剝片である。器体がとろけており判然としないが、部分的に研磨が認められる。剝形品・勾玉等の未成品であろう。

12・14は緑色片岩の剝片である。12は薄い幅広の横長剝片で、14はやや厚い縦長剝片である。14の下端部は切断されている。

13は二次加工を有する剝片である。裏面には左右からの面的な調整加工が施され、くの字状の形状に仕上げられる。

15はメノウ製の石核である。片面からの剝片剥離が進行しチョッパー状の残核となる。

16は磨石である。全面が擦られている。

17は敲石である。下端部に集中的に敲打痕が認められる。上端は表皮が剥がれるような敲打が認められる。

これらの資料は各遺構やグリッドから散漫に出土しており、玉製作跡の一括資料ではないため一連の製作工程、技術の把握にまで及べない。しかし、個々の資料で未成品の技術的特徴から玉の製作技術について若干の知見が得られたので次にその特徴を纏めてみることとする。

1. 滑石石材の管玉製作工程 未成品（1）の資料より下端に縦方向の節理痕を残すことや、また同質の滑石石材の剝片（10）があり、この資料は管玉の素材と思われる縦方向の節理を利用して角柱状の形割品を作出することが考えられることから、滑石石材の管玉製作では形割工程段階に節理方向を利用して形割品を作出することが想定される。また、未成品（3）の形割品を見ると横長剝片を作出して上下両端を切断して四角柱の形割品を作出する工程が想定され、滑石石材による「八代・大和田技法」の範疇に含まれるものも存在するようである。

2. 滑石石材以外の玉製作工程 未成品（2）ではメノウの原石から直接に上下両端を切断し形割品を作出しており、石核素材の形割品作出工程を示す。さらに側面調整では両極技法が

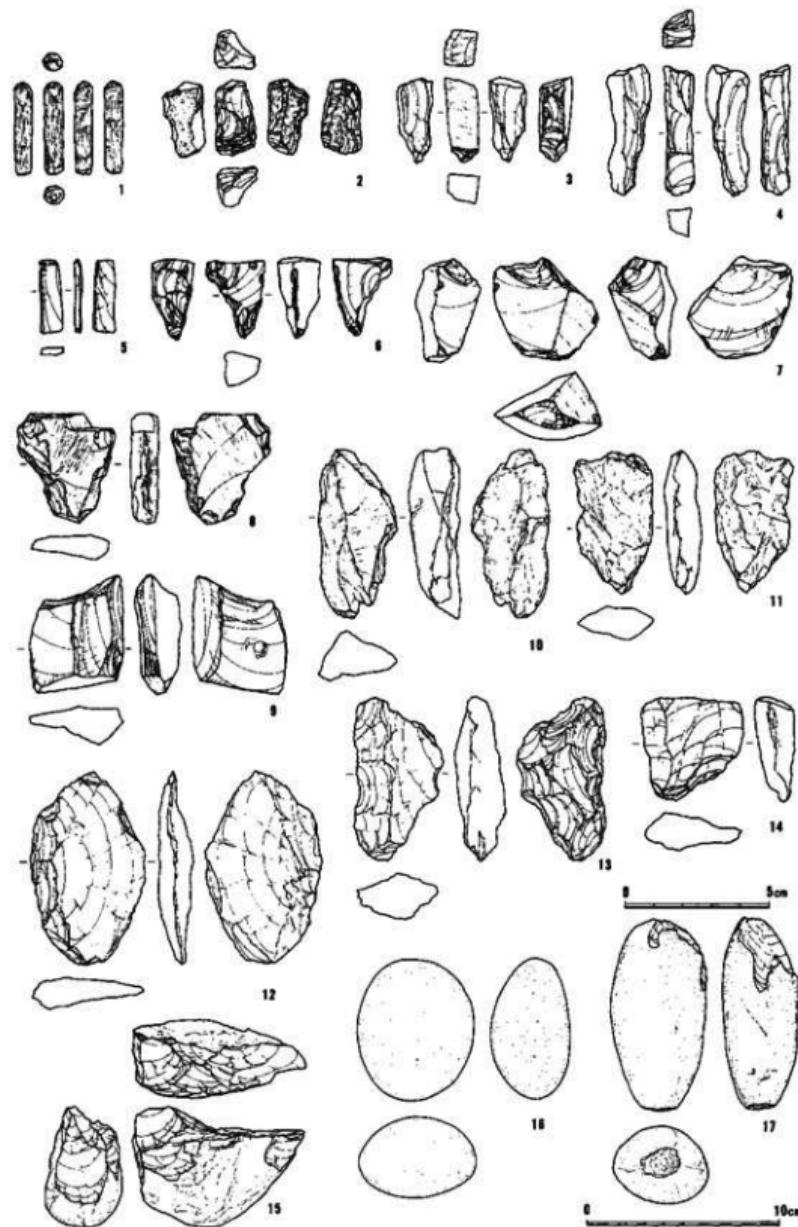
介在している。滑石に類似した素材である緑色片岩石材の剥片類（11～14）では横長剥片を基調としながらも各種の素材が見られ、13のように多方向から調整加工して素材を作出するものも存在する。また磨製剥片（8）のように擦切（切削）痕が看取されるものがあり、素材作出工程で「MT烏山57A技法・KT烏山57A技法」の要素である擦切技法（「切削」技法）が用いられている資料も認められる。本遺跡の玉製作技術の特徴を見ると、各種の製作工程の要素が存在することが理解される。こうした各種の製作技術が見られることは、本遺跡の性格が玉工房跡が存在する玉の製作遺跡的ではなく、多分に玉の未成品・素材の搬入により小規模な玉製作を行っていた遺跡であることによると考えられる。下總地域という玉造の拠点的地域にあっては玉製作遺跡の周辺遺跡の性格として一般的な様相と思われる。

—参考・引用文献—

- 寺村光晴 1971 「古代玉作の研究」（吉川弘文館）
 ノ 1974 「下總国の玉作遺跡」（雄山閣）
 ノ 1980 「古代玉作形成史の研究」（吉川弘文館）
 国立大学文学部考古学研究室 1988 「茨城県土浦市 烏山遺跡」
 財團法人千葉県文化財センター 1992 「研究紀要 13」

第1表 玉製作関連石器属性表

| 押印 | 器種 | 長×幅×厚 (mm) | 重量 (g) | 石材 | 遺物番号 |
|----|---------|----------------|-----------|------|-----------|
| 1 | 管玉（未成品） | 33.2×6.6×6.5 | 2.41 | 滑石 | SI 18-005 |
| 2 | 管玉（未成品） | 26.1×13.8×13.7 | 5.16 | メノウ | C2-1 |
| 3 | 管玉（未成品） | 30.1×11.3×13.7 | 6.24 | 滑石 | SI 18-119 |
| 4 | 管玉（未成品） | 45.8×10.6×14.6 | 7.44 | 頁岩 | A2-87-1 |
| 5 | 剥片 | 25.7×7.7×2.3 | 0.73 | 頁岩 | SI 3-124 |
| 6 | 二次加工剥片 | 26.8×20.2×14.9 | 5.79 | チャート | H4-表探 |
| 7 | 二次加工剥片 | 35.2×36.3×22.7 | 21.25 | 珪質頁岩 | SD 16-1 |
| 8 | 磨製板状剥片 | 37.4×33.4×10.4 | 13.26 | 粘板岩 | C3-72-1 |
| 9 | 剥片 | 40.4×32.4×15.7 | 16.82 | 頁岩 | SI 12- 70 |
| 10 | 剥片 | 58.5×27.0×17.8 | 25.58 | 滑石 | SI 14- 91 |
| 11 | 剥片 | 49.0×27.0×12.6 | 18.62 | 緑色片岩 | SI 16- 75 |
| 12 | 剥片 | 66.3×39.9×12.0 | 26.04 | 緑色片岩 | SI 18- 47 |
| 13 | 二次加工剥片 | 56.7×30.8×16.9 | 25.02 | 緑色片岩 | SI 17-114 |
| 14 | 剥片 | 35.9×35.6×14.2 | 16.52 | 緑色片岩 | SI 14- 18 |
| 15 | 石核 | 42.2×59.6×26.4 | 62.87 | メノウ | D2-15-1 |
| 16 | 磨石 | 98.2×49.8×40.1 | 262.70 | 砂岩 | SI 5- 55 |
| 17 | 敲石 | 72.8×61.3×42.2 | 262.10 | 鞍山岩 | SI 8- 19 |



第33図 玉製作関連石器実測図 (1~15 S=2/3、16・17 S=1/3)

7 節 陶磁器、金属器

陶磁器（第34図、図版29）

1は龍泉窯系の青磁碗破片である。器肉は乳色がかっている灰色で、釉は褐色がかった緑色である。この他にもう1点青磁の破片資料が出ているが、極端な小片のため割愛した。2は常滑の小型壺である。口縁部は細い帯状の粘土が外側に一条貼りめぐらされている。器肉は黒灰色で、全面に鉄釉が施され、石英粒等を多く含んでいる。4、5は常滑の壺で、ともに肩部から頸部にかけての資料である。4は器肉黒灰色、器面は内外面ともに吹き出し釉で、外面には自然釉がのっている。自然釉の下には格子タタキと考えられるタタキの痕跡が見える。5は器肉灰色で、外面上部には格子タタキがみえ、やはり自然釉がのっている。6は瀬戸・美濃の擂り鉢口縁部付近の破片である。器肉は乳白色で、全面に吹き出し釉が見える。7は瀬戸・美濃の天目茶碗で、内面全体から外面の腰よりやや上の部分まで釉がかかっている。釉は厚く、平均で1mm、厚いところでは2mm近くある。8は常滑の擂り鉢である。器肉中央は灰色で、その両外側は小豆色である。石英粒を多く含み、内面底部は使用痕でつるつるになっている。9は内耳の鍋である。器肉中央は黒灰色、その外側は小豆色、さらに器表外面のみが黒褐色である。石英粒をやや多めに含み、焼成は良好である。10は常滑の大壺片で、器肉は灰色、外面には自然釉がかかり、器表内面と破断面の図示部分が磁石として転用されている。

この他に、遺構内流れ込み、またはグリッド一括資料として、浅い整理箱に1箱分ほどの近世陶磁器が検出されている。そのほとんどは18・19世紀の伊万里、瀬戸、唐津の小破片である。

金属器（第34図、図版30）

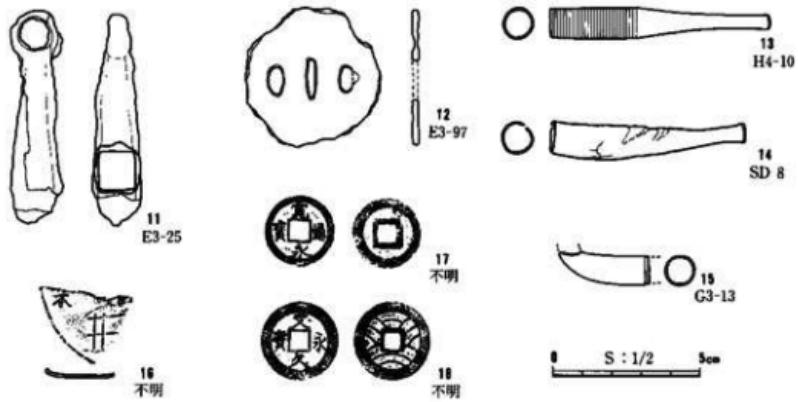
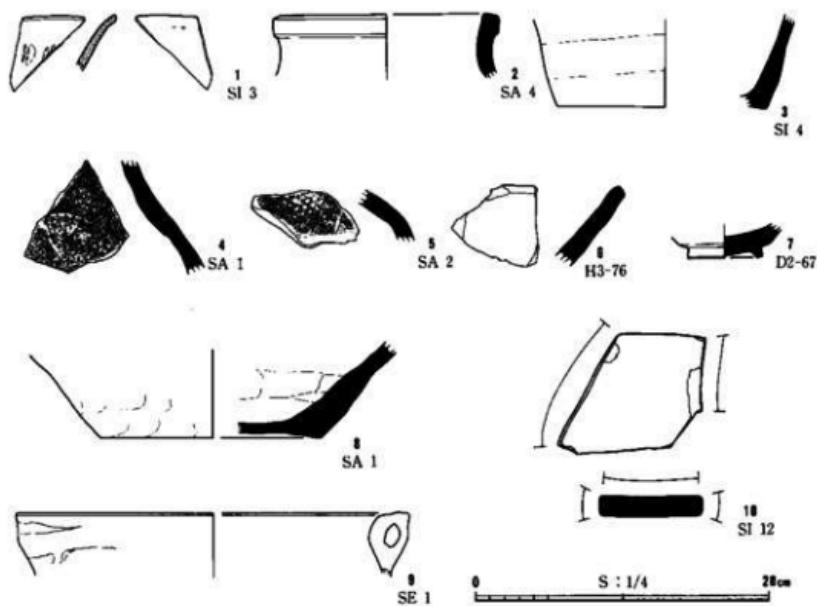
11は使途不明の鉄製品である。棒状の部分は断面方形で、先端部は環状になっている。環状部分の断面形は蒲鉾形である。棒状部分の反対側の端部は欠損しており、この先にどれほどの長さで、しかもどのような形状のものが続くのか、そして何かに接続されるのか、不明である。

12は鉄製の鐸である。小型であることから短刀のものと考えられる。錆による劣化のためにもとの形状を正確に復原することは難しいが、丸みを帯びた八角形で、透かしは外側に丸みをもつ橢円形かと考えられる。

13～15は銅製の煙管である。13は吸口で、羅字の側の外面には螺旋条の刻みが巡らされている。14も吸口でかなりひしゃげている。15は雁首で、火皿の部分は欠失している。また羅字の側も欠失している。13・15ともに図の上端下端の長軸方向に縦ぎ目が走っている。

16は小型の和鏡の破片である。青銅製で、薄手のためにひしゃげた格好になっている。鏡をもつ形態のものなのかどうかはわからない。鏡背面は地が砂目で、文字と絵模様が表わされていたようで、左端に「本」という文字が見える。下部中央に見えるものは絵模様と考えられる。

17は寛永通寶である。18は文久永寶の裏波錢である。



第34図 陶磁器・金属器実測図

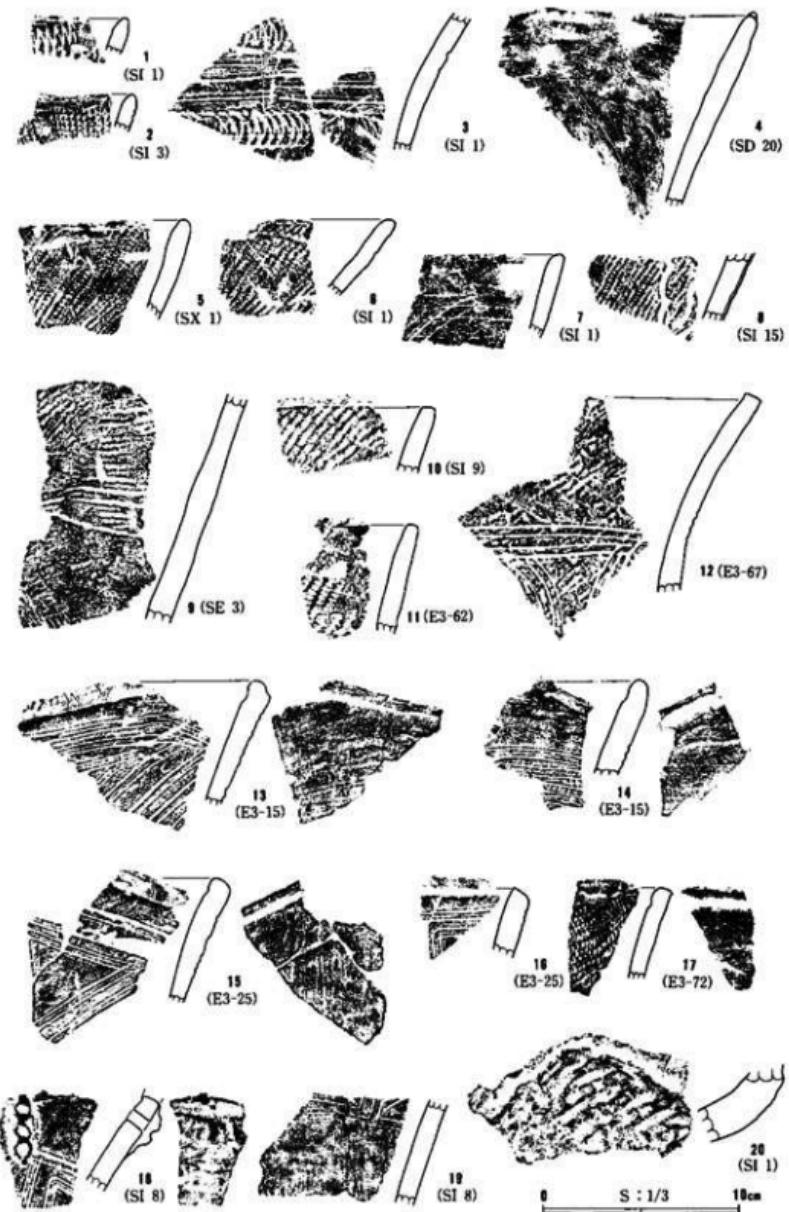
8 節 繩文土器

(第35図、図版30)

1～3は前期の浮島II式に属するものである。1と2は波状貝殻文を口縁直下に横走させるものである。3は胴部の破片で、若干外反する。上下2段に変形爪形文を横走させ、その間に半截竹管による平行沈線を横方向に施文する。内面は横方向の丁寧な調整がみられる。

4～20は後期の堀之内1式に属するものである。4は軽い平行沈線を口縁に平行ないし斜行させるもので、口唇上に小突起がみられる。内面は、上部は横、下部は縦方向の丁寧な調整を施す。5、6は繩文のみのもので、いずれもLR繩文が施される。内面は横方向の丁寧な調整が施される。また、6には外面の口唇部直下に横方向のへら削りがみられる。7は4と同様に平行沈線を横走ないし斜行させたものだが、磨滅が著しく細かい調整は不詳。8は胴部の破片で、RL繩文を施文したあと、沈線で懸垂文を蛇行させる。9も胴部の破片である。地文の繩文が磨消されたあと、Lの無節繩文の原体が横向きに押圧される。内面には斜めの調整がみられる。10、11は口縁部の破片であるが、ヘラで口唇上を平らに整形しており、口唇部を若干絞り込ませる。地文はいずれもLR繩文で、内面は横方向の丁寧な調整を施す。12は口縁部から胴部にかけての破片で、朝顔形の器形になるものである。LR繩文を施文後、頸部に平行沈線を横走させ、胴部にかけて平行沈線を垂下させる。口唇上はヘラで平らに整形され、口唇部が絞り込まれる。13～15は波状口縁の破片である。13は磨消繩文の上から平行沈線を斜めに施文させ、その後口縁に沿って施文させる。内面は横方向の丁寧な調整が施されるほか、口唇直下に太い沈線が加えられる。口唇上は、全体としては平らに整形されるが断面を計測した部分はやや丸い。14も繩文を磨消した後に平行沈線を横走させる。内面は横方向の丁寧な調整を施すほか、口唇直下に太い沈線をいれる。口唇上はやや丸い。15は平行沈線が三角形に施文される。内面は縦方向に丁寧な調整が施され、口唇直下には太い沈線が施文される。口唇上はやや丸い。以上の3点は同一個体である。16、17も口縁部であるが、これらは平縁である。16は磨消繩文の上から直角に曲がる平行沈線が施文される。口唇上は平らに整形されるが、内面の口唇直下には太い沈線は施文されない。17はLR繩文のみ施文されるもので、口唇上が平らに整形されるほか、内面の口唇直下には太い沈線が施文される。18は波状口縁か小突起を持つ口縁である。貼付紐線文が縦に配され、その左脇に穿孔がなされる。紐線文の下には幾何学的に平行沈線が施文される。内面には横方向の丁寧な調整が施されるほか、口縁および穿孔に沿って太い沈線が加えられる。19は胴部破片である。繩文の上に平行沈線を幾何学的に施文し、後から磨消するものである。内面には縦方向の丁寧な調整がみられる。20は底部付近の破片である。粗い調整が施されるほかは、特に文様は施されない。形状からみて浅鉢と思われる。

以上の17点の堀之内1式土器は、基本的にはすべて堀之内1式の範疇に収まるものの、8、



第35図 繩文土器拓影図

9などが堀之内1式でもやや古い様相を呈しているのに対し、18、19が堀之内2式に近い文様上の特色を備えていることから、若干の時期差が存在するのが認められる。

3章 まとめ

3章 まとめ

附章において国立歴史民俗博物館助教授の西本豊弘氏がその分析を行っているように、不光寺遺跡SE 2という井戸状遺構からは、確認された限りにおいて7体分の馬骨と1体分の牛骨が出土している。近年、井戸遺構からの牛馬の遺存体の検出例は増加しており、考古学の側からのみではなく、文献史学や文化人類学の面からも検討が加えられている。特に最新の研究例としては桜井秀雄の総合的な研究が挙げられる（桜井1992-2）。桜井氏の論文やその他管見にのぼる限りにおいても、本遺跡のように1遺構からこれだけの数の馬・牛が検出された例は他に見あたらないようである。また、西本氏の分析によても分かる通り、高齢馬が多い点でも注目される資料である。

まず、時期の決定についてであるが、本遺構の場合覆土中からの伴出遺物がないために、決定根拠は薄弱であるが、調査区内の状況からみれば平安時代前半の遺構と考えるのが最も妥当であろうと思われる。次に出土状況についての再確認である。馬骨出土層以下については調査の工程上土層断面の実測ができなかったが、深さは4m以上に達し、底から2m以上を埋めた（と想定される）段階で、馬骨・牛骨の出土層に達する。馬骨・牛骨の集中層は厚さ1.3mを測る。その上はさらに入為的な堆積層によって構成されている。

重要なのはその性格についてである。牛馬の遺存体が井戸覆土中から検出された場合の解釈としては、

（1）牛馬の骨が持つ水に関わる呪術的な力（主に雨乞いや湧水等）を用いた祭祀の結果として捉える考え方、

（2）漢神信仰祭儀に伴う犠牲獻として捉える考え方（研究者によっては（1）をもこの範疇に入れて考える）、

（3）単なる投棄として捉える考え方、

というような大きく分けて三種類の考え方方に分かれるようである。

以下ではこれらの点について一つづつ考えてみたい。

（1）水に関わる儀礼としての解釈

先にも記したように研究者によってはこれを漢神信仰の一部分に含み（下出積與1972）、私も同様に考える。但し、ここではそのうちの雨乞いや湧水などに代表される、水に関わる祭祀儀礼にのみ限ってということを別個に考えてみる。この祭祀儀礼において牛馬の歯や骨を用いる場合、大場磐雄（大場1970）や桜井（桜井1992-b）によれば、「井の神靈にたいする供物であり、あるいは井泉の湧出多からんことを祈った祭祀の器具」の一つであり、犠牲獻とは異なったものであるようである。そして、牛馬の歯や骨は井戸の掘削時、または使用開始時においてなき

れるべきもののようにある。不光寺遺跡の場合、覆土の比較的上層部にしかも井戸を人為的に埋め戻したと考えられる状況のもとで、頭骨や歯にのみ限らず他の部位も含めて馬の骨が検出されているわけである。これは大場や桜井の規定する出土状況とは明らかに異なり、採用しがたい解釈と考えるべきであろう。

(2) 漢神信仰に伴う犠牲獣としての解釈

漢神信仰に伴う殺牛殺馬儀礼の代表的史料には以下のものがある。

(a) 「日本書紀」皇極元年「六月…是月大旱…秋七月…戊寅、群臣相語之曰、隨村々祝部所教、或殺牛馬、祭諸社神。或頗移市。或禱河伯。既無所効。…」

このあと記事は蘇我大臣が仏教の祈禱法で雨を降らせようとしてわずかにしか降らず、最後に天皇が南淵の河上に行って跪き、四方を拝し、天に向かって祈り、雷鳴とともに大雨が五日間降り続いたとある。この記事の面白いところは、アンダーラインで示したような一連の中国風の漢神信仰儀礼を行ったが効果がなく、さらに仏の力にすがったが効果がなく、最後は天皇自身の呪力を以て初めて効果があったという点にあるのである。

(b) 「統日本紀」延暦十年九月甲戌条「斷伊勢。尾張。近江。美濃。越前。紀伊等國百姓。殺牛用祭漢神。」

(c) 「類聚三代格」卷十九、延暦十年九月十六日「太政官符 応禁制殺牛用祭漢神事。右被右大臣宣傳。奉勅。如聞。諸國百姓殺牛用祭。宜嚴加禁制莫令為然。若有違犯科故殺□牛罪。」

(d) 「類聚國史」「雜祭」延暦二十年四月乙亥条「越前國禁行□加□屠牛祭神。」

(e) 「日本國現報善惡靈異記」中卷第五「依漢神崇殺牛而祭又修放生善以現得善惡報縁」この説話は、漢神の祟りを恐れた長者が、七年間にわたって牛を一頭ずつ殺して祭礼を行ったというものである。

これらの漢神信仰は井上光貞の指摘するように(井上1984)、決して一般的なことではなく、あくまでも異国の宗教儀礼として捉えられていたとすべきであろうと考えられ、更には、栗原朋信の指摘するように(栗原1969)、帰化人による例外的な祭祀であったのかも知れない。

また、一般に「殺牛殺馬」として一括して扱っているが、「殺馬」の記事が(a)の皇極記にしかみられないという事実には、もっと注意しなければいけないのかも知れない。

(3) 単純な投棄としての解釈

これは解釈としては一見もっとも単純なもののように感じられがちである。しかし、たんに投棄といつてもこれだけの量の馬骨が出土していては、納得がいくだけの解釈が必要になってくる。まず、牛は1体だけであるから別としても、当時の一集落においてこれだけの数の馬が処分し得るのかという問題である。殺すにしても、死亡したものを処理するにしても、その量は尋常なのであろうか。

古代における馬の飼育というと、「養老令」における「厩牧令」および「延喜式」における「兵

部省」の記載が思い起こされる。

まず、「延喜式」「兵部省」の諸国馬牛牧条の下總國のところには「高津馬牧、大結馬牧、木嶋馬牧、長洲馬牧、浮嶋牛牧」の5牧が記載されている。これらの牧の比定地としては高津牧が八千代市高津、大結牧が茨城県結城郡八千代町（一案には千葉県船橋市）、木嶋牧が不詳、長洲牧が茨城県岩井市、浮嶋牧が千葉市幕張（一案には墨田区）と想定されている。諸国駅伝馬条の東海道下總國には「駿馬 井上十疋。浮嶋。河曲各五疋。西津。於賦各十疋。伝馬 葛飾郡十疋。千葉。相馬郡各五疋。」が記載されている。下總国内にはこの他に延暦二十四年に廃止された印旛郡鳥取駅、埴生郡山方駅、香取郡荒海駅、真敷駅の4駅があり、不光寺遺跡に最も近い駅としては成田市荒海に比定される荒海駅、香取郡大栄町南敷に比定される真敷駅の2駅が挙げられる。両地は不光寺遺跡からの直線距離が約12kmとほぼ等距離にある。以上のことから当時不光寺遺跡の周辺の下總国内には牧も駅も存在していなかったことになる。但し、利根川対岸の常陸国信田牧が茨城県江戸崎町または美浦村に比定されている。この付近までの直線距離もやはり12km程度である。ほかに「養老令」「厩牧令」において各郡に五疋づつ置くとされている伝馬についても考えなければいけないのであるが、香取郡の郡衙は所在地が確認されていないので、ここでは敢えて触れずにおく。

次に、「養老令」「厩牧令」についてであるが、これは中央の厩舎および地方の牧の運営、馬牛の飼育等について記しているのであるが、このうちまず注意される記載は「凡牧馬牛死耗者。毎年率百頭論除十。」で、年間一割までの死亡率は不可抗力とみなされていたことである。次に、馬の欠失や拾得について随所に「市替」、「市充」、「出売」、「販賣」というような馬の売買に関する記載のみえることである。これは山口英男の指摘するように（山口1992）、「…牧の経営主体には公的牧制度に組み込まれたものと、そうでないものがあるばかりでなく、同一の経営主体が双方の性格を合わせもっていることすら想定できる。…」というような状況を裏付けている。そして先の「市替」の記述などから、駿馬・伝馬の供給源は基本的に私馬であったと考えられる（加藤 1985）。

以上のように、不光寺遺跡で検出された7体の馬骨及び1体の牛骨については、牧等を周囲に想定できない以上、「令集解」にみえる「百姓之馬」、「百姓馬」、「戸馬」、にあたる私馬の馬・牛であった可能性が非常に高いと考えられる。そして、これらが埋葬されたものなのか、それとも食用にせよ、儀礼用にせよ解体されて埋められたものなのかという点についてであるが、調査時の遺物取り上げの不備から、それらを解明するだけの資料は出てこなかった。が、高齢馬が主体であるという点を考慮すれば、その背景には数多くの若齢の馬の飼育が想定される。民間での「百姓之馬」（私馬）の飼育は、従来私たちが考えていたよりも大規模、かつ活発であった可能性が出てきたということになるのであろうか。

—参考・引用文献—

- 荒木敏夫 1986 「古代国家と民間祭祀」『歴史学研究』560 (青木書店)
- 大場智雄 1970 「水靈信仰の考古学的考察」『祭祀遺跡』(角川書店)
- 加藤友康 1985 「交通大系と律令国家」『講座 日本技術の社会史』第八卷 交通・運輸
(日本評論社)
- 栗原朋信 1969 「犠牲禮についての一考察ーとくに古代の中國と日本の場合ー」
『福井博士頌寿記念 東洋文化論集』(早稲田大学出版部)
- 佐伯有清 1958 「8・9世紀の交における民間信仰の史的考察ー殺牛祭神をめぐってー」
『歴史学研究』224
- 桜井秀雄 1992-a 「殺牛馬信仰に関する文献資料の再検討ー日本古代の動物犠牲について」
『信濃』44-4 (信濃史学会)
- 〃 1992-b 「井戸から出土する牛馬遺体についてー動物犠牲との関係ー」
『考古学研究』39-2 (考古学研究会)
- 下出積與 1972 「日本古代の神祇と道教」(吉川弘文館)
- 堤 隆 1986 「野火付遺跡における平安時代の埋葬馬をめぐって」『信濃』38-4
- 土肥 孝 1983 「日本古代における犠牲馬」『文化財論叢』(同朋舎出版)
- 松井 章 1987 「養老厩牧令の考古学的考察ー斃れ馬牛の処理をめぐってー」『信濃』39-4
- 山口英男 1992 「農耕生活と馬の飼育」『新版 [古代の日本]』⑧関東 (角川書店)
- ※この他の史料は「日本書紀」「日本國現報善惡靈異記」を岩波書店「日本古典文学大系」、「続日本紀」「類聚三代格」「延喜式」「令集解」を吉川弘文館「新訂増補 国史大系」(普及版)、「養老令」「厩牧令」を岩波書店「律令」から引用した。

第2表 住居構造一覧

| 地番 | 平面形 | 規模(奥×幅) | 面積(m ²) | カマド | 主軸方位 | 柱穴 | その他の柱穴 | 貯藏穴 | 周囲 | その他の特記事項 | |
|----|------|--------------|---------------------|-----------|---------|-----|------------------------------|-----|------|------------------|------------------|
| | | | | | | | | | | 西面中央に円柱部分あり | |
| 1 | 方形 | 6.78×6.61 | 43.76 | 北西壁中央 | N-39'-W | 4 | 出入口P1、カマドP2 | 1 | 一部分 | 6C・中 | 床面中央に円柱部分あり |
| 2 | 方形 | 5.94×5.74 | 33.34 | 北西壁中央 | N-60'-W | 4 | 出入口P1 | 1 | 一部分 | 6C・中 | |
| 3 | 方形 | 5.73×5.68 | 31.48 | 北西壁中央 | N-33'-W | 4 | 出入口P1 | 1 | 全周 | 6C・中 | 上部壁脚、主柱穴・貯藏穴2組 |
| 4 | 方形 | 4.18×3.90 | 15.93 | 北西壁中央 | N-23'-W | 2 | 出入口P1、中央P2 振り出しP1 | なし | 全周 | 9C・中 | |
| 5 | (方形) | 10.18×(9.40) | (104.58) | (北西壁) | N-39'-W | (2) | | 1 | (全周) | 6C・中 | 振り出し部のみ開溝なし |
| 6 | (方形) | (8.76)×7.72 | (67.55) | 北西壁中央 | N-39'-W | (2) | なし | 1 | (全周) | 6C・中 | 雨漏の振り込みは性格不明 |
| 7 | (方形) | — | — | — | — | — | — | — | — | 6C・中 | — |
| 8 | (方形) | 8.62×8.22 | 71.55 | 北壁中央 | N-17'-W | 4 | 支柱2、出入口1、その他5 出入口P1 | なし | 全周 | SI 9によって切らされている | |
| 9 | 方形 | 5.08×4.95 | 25.15 | 北西壁中央 | N-43'-W | 4 | なし | 1 | 全周 | 6C・中 | |
| 10 | (方形) | (5.14)×4.78 | (24.02) | 北東壁中央 | N-53'-E | (3) | 出入口P1 | なし | 全周 | 6C・前 | 雨漏が張り出している、炭化材検出 |
| 11 | (方形) | (4.30)×4.34 | (17.15) | 北壁中央 | N-6'-W | 4 | なし | 1 | (全周) | 不規則 | |
| 12 | (方形) | 8.36×8.12 | 68.55 | 北西壁中央 | N-32'-W | 4 | 出入口P1、出入口P1、他2 出入口P1、その他4 | なし | 全周 | SI 14によって切らされている | |
| 13 | 方形 | 3.38×3.07 | 10.19 | 北西壁中央 | N-45'-W | 4 | 支柱かと考えられるP2 | 1 | (全周) | SI 12を切っている | |
| 14 | 方形 | 5.04×4.78 | 23.87 | 北東壁中央 | N-67'-E | 4 | 出入口P1 | 2 | なし | SI 4が一部分を焼壙している | |
| 15 | 方形 | 4.10×3.92 | 15.92 | 北西壁中央 | N-56'-W | 4 | 振り出しP1、出入口P1 | なし | 6C・前 | カマドは殆ど焼壙していない | |
| 16 | 方形 | 5.88×5.72 | 33.01 | 北西壁中央 | N-64'-W | 4 | 出入口P1 | なし | 6C・中 | カマドは殆ど焼壙していない | |
| 17 | 方形 | 6.28×6.14 | 39.15 | 北壁中央 | N-10'-W | 4 | なし | 1 | なし | 6C・初 | |
| 18 | 方形 | 5.60×5.12 | 38.56 | 北壁中央 | N-12'-E | 4 | なし | 1 | なし | 6C・前 | |
| 19 | (方形) | 7.40×(6.82) | (47.23) | (北西壁) | N-18'-W | (2) | 振り出しP1 | なし | なし | 6C・前 | 西隅半分のみの焼壙 |
| 20 | 方形 | 4.30×4.28 | 17.95 | 東壁中央 | S-68'-E | 4 | なし | 1 | なし | 6C・前 | カマドの焼付跡不規 |
| 21 | (方形) | 6.12×(6.10) | (36.55) | 北東壁中央 | N-14'-W | 4 | 振り出しP1 | なし | なし | 6C・前 | SD 16が北端部を焼壙している |
| 22 | 方形 | 2.52×2.30 | 5.54 | 南東壁中央 | S-48'-E | なし | なし | なし | なし | 不明 | 南側に粘土層があり |
| 23 | 方形 | 2.94×2.82 | 7.95 | 北壁 | N-45'-E | 不明 | なし | なし | なし | 9C・中 | 北西壁中央に古いカマドの焼壙 |
| 24 | (方形) | — | — | (N-23'-W) | — | — | — | — | (全周) | 9C・中 | — |

■()は廻りできないものについて示してある

附 章

附 章

不光寺遺跡出土のウマ・ウシ遺体

国立歴史民俗博物館 西 本 豊 弘

不光寺遺跡の1987年度の発掘調査で出土した動物遺体を同定したところ、ウマとウシであることがわかった。それらは、井戸跡（SE 2）の覆土より一括して出土したものであり。大部分はウマで、上顎歯と下顎歯の数量から見て少なくとも7頭分であり、ウシは1頭であった。取り上げた単位ごとにその内容と計測値を示したものが第3・4・5表である。四肢骨については、覆土中から出土したことは明かであるが、詳細は不明である。

まず、ウマについて見ると、上顎歯および下顎歯の内容から、年齢は老獣5個体・成獣1個体・若獣1個体である。この遺跡のウマは老獣が多いことが特徴である。歯の形態については大小様々であり、古代のものとしては意外に大きいものが含まれている点がもうひとつの特徴である。ウシについては、左右の下顎骨と遊離した上顎骨がほぼ1個体分まとまって出土しており、おそらく頭部が1個捨てられていたと思われる。歯の大きさから見て小型のウシである。

さて、これらの資料で問題になるのは、8個体のウマとウシがこの井戸跡に捨てられた理由である。出土状況から見て、頭部だけではなく四肢骨も捨てられていたことは確実である。もっとも、頭部のみが捨てられていたものもあったかも知れない。どのウマがどこから出土したかについては、No.1から3が同一個体で最上部から出土していること以外はよくわからない。しかし、出土状態を見ると、上部・中部・下部に分けられ、その間に骨を含まない土層が見られる。このことから、これらの骨が一時期にすべて捨てられたのではなく、3度以上に亘って繰り返して捨てられたと推測される。ウマの年齢を見ると老獣が多いことから、それらの老獣は病死した可能性が高い。もしそうであるとすると、この井戸跡はそれらのウマの捨て場所として利用されたと考えができる。病死したウマ以外にも若いウマも捨てられたり、ウシも捨てられたのであろう。それらが人間によって食べられたかどうかはわからない。

第3表 ウマ上顎臼歯の咬合面の長さ

(単位mm)

| No | 残存部位 | P ² | P ³ | P ⁴ | M ¹ | M ² | M ³ | 年齢 | 個体No | 備考 |
|----|---|---------------------------|------------------------|------------------------|----------------|----------------|----------------|-------|------|------------|
| 2 | R (M ¹ ~M ²) | | | | — | 22.4 | 28.6 | 老駄 | ① | |
| 4 | R (P ² ~M ³) | 36.2 | 25.7 | 24.4 | 21.6 | 22.1 | 27.6 | 成駄～老駄 | ② | |
| 11 | R (P ² ~M ³) | — | 27.5 | 25.6 | 22.8 | 23.4 | 26.0 | 成駄～老駄 | ③ | |
| 11 | R (P ² ~M ³) | | 24.2 | 22.8 | 19.1 | 21.1 | 27.4 | 老駄 | ④ | 下顎歯の②と同一個体 |
| 11 | L (M ¹) | | | | 19.2 | 22.0 | | 老駄 | ④ | |
| 11 | L (P ² ×M ³) | | — | | | 22.8 | 25.8 | 成駄～老駄 | ⑤ | |
| 9 | L (P ² ~M ³) | 37.2 | 26.2 | 24.4 | 21.6 | 22.3 | 27.2 | 成駄～老駄 | ② | |
| 12 | L (P ² ~M ³) | 37.4 | 29.0 | 25.9 | 22.4 | 23.5 | 26.0 | 成駄～老駄 | ③ | |
| 10 | L (m ¹ P ² P ³) | m ¹ 36.3 | m ² 26.2 | m ³ 26.9 | | | | 若駄 | ⑥ | |
| 10 | R P ⁴ (長さ27.1) | L P ⁴ (長さ27.0) | | | | | | 若駄 | ⑥ | |
| 10 | R P ⁴ (計測不可) | L P ⁴ (長さ28.4) | | | | | | 成駄 | ⑦ | 下顎歯⑥と同一個体 |

注1. R: 右側、L: 左側、P: 前臼歯、M: 後臼歯、数字は歯の順番を示す。第4表も同じ。

注2. 残存部位のうち、() の歯は歯根を伴なうもの。×は抜歯を示す。

注3. 計測位置は、原則として咬合面中央部のエナメル質とした。

注4. No.10の資料のmは乳臼歯。○で括まれた数字は未出歯を示す。

注5. 上顎歯と下顎歯の個体Noは一致しない。

注6. M歯の他に上顎と下顎の初歯19種が出土している。

第4表 下顎臼歯の咬合面の長さ

(単位mm)

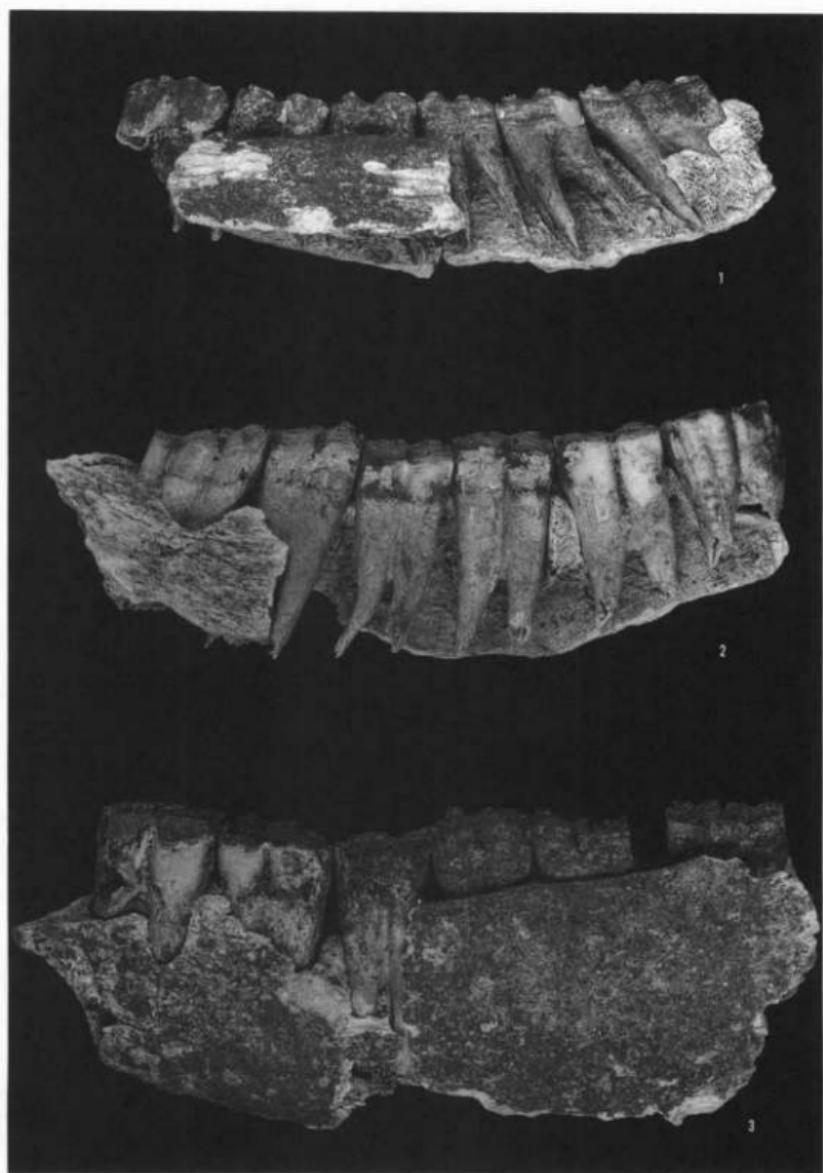
| No | 残存部位 | P ₂ | P ₃ | P ₄ | M ₁ | M ₂ | M ₃ | 年齢 | 個体No |
|----|-------------------------------------|--------------------------|------------------------|------------------------|----------------|----------------|----------------|-------|------|
| 7 | R (P ₂ ~M ₃) | | 26.7 | 25.5 | 22.4 | 23.0 | 31.4 | 成駄～老駄 | ① |
| 8 | L (P ₂ ~M ₃) | 31.1 | 27.1 | 26.4 | 22.4 | 23.7 | 30.9 | 成駄～老駄 | ① |
| 11 | R (P ₂ ~M ₃) | 28.0 | 24.6 | 22.5 | 19.5 | 21.4 | 31.6 | 老駄 | ② |
| 11 | L (P ₂ ~M ₃) | | 24.3 | 23.4 | 19.5 | 22.7 | 30.6 | 老駄 | ② |
| 12 | R (P ₂ ~M ₃) | — | 27.4 | 26.3 | 24.9 | 26.3 | — | 成駄～老駄 | ③ |
| 13 | L (P ₂ ~M ₃) | 30.7 | 28.4 | 25.8 | 23.5 | 25.1 | 30.6 | 成駄～老駄 | ④ |
| 10 | L (m ₁ ~M ₃) | m ₁ 31.9 | m ₂ 27.5 | m ₃ 28.4 | | | | 若駄 | ⑤ |
| 10 | RM ₃ (計測不可) | LM ₃ (長さ23.2) | | | | | | 若駄 | ⑤ |
| 10 | RM ₃ (長さ29.3) | LM ₃ (長さ29.5) | | | | | | 成駄 | ⑥ |

第5表 ウシNo14

上・下顎歯最大長 (単位mm)

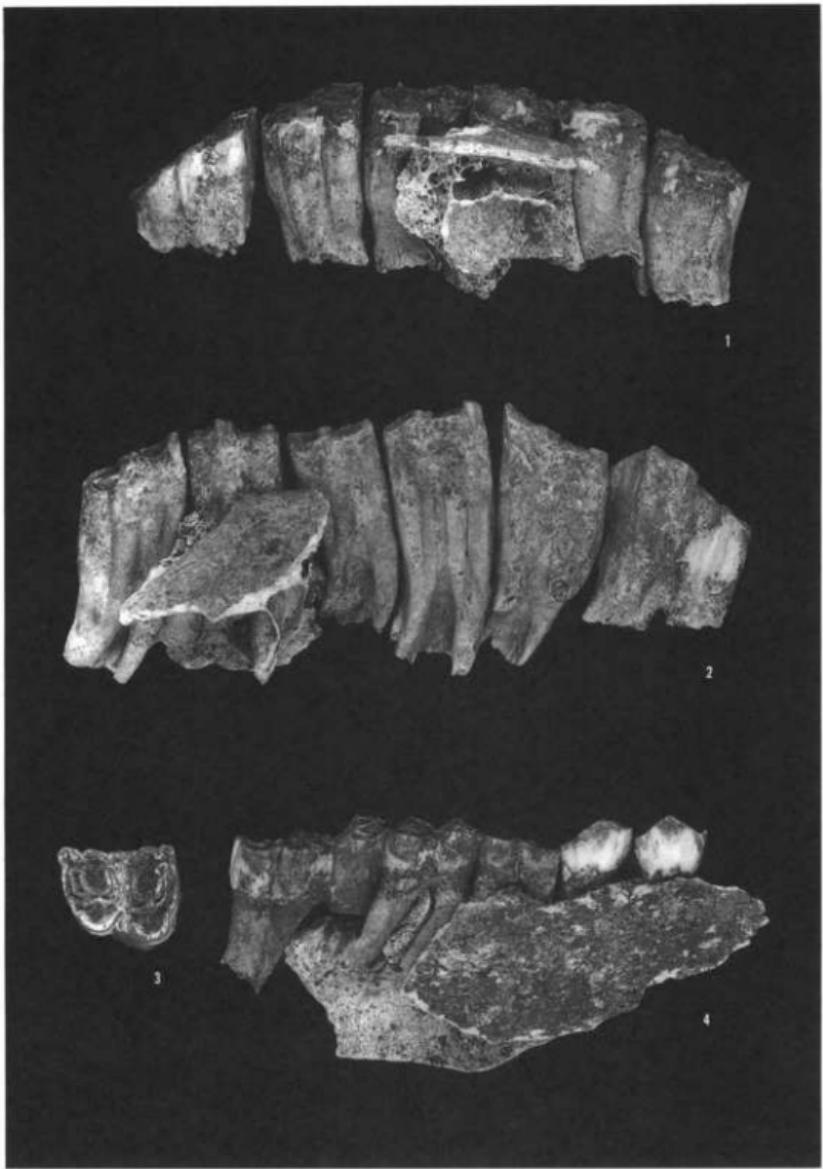
| | |
|--------------------|------|
| 上 R P ⁴ | 17.9 |
| 上 RM ³ | 29.0 |
| 下 R P ₃ | 19.2 |
| 下 RP ₄ | 19.4 |
| 下 RM ₁ | 19.8 |
| 下 RM ₂ | 24.6 |
| 下 RM ₃ | 39.8 |

※ その他の歯は破損のため計測不可



本文写真1 ウマの下顎骨 約2/3

1. No11. 右側、内面
2. No7. 右側、外側
3. No13. 左側、外側



本文写真2 ウマ上顎骨とウシ上顎骨・下顎骨

1. №9. ウマ、左側、内面 2. №12. ウマ、左側、外面
3. №14. ウシ、上顎右側第3後臼歯 4. №14. ウシ、右側、外面

写 真 図 版





SI 1 全景



SI 1 土製勾玉出土状況



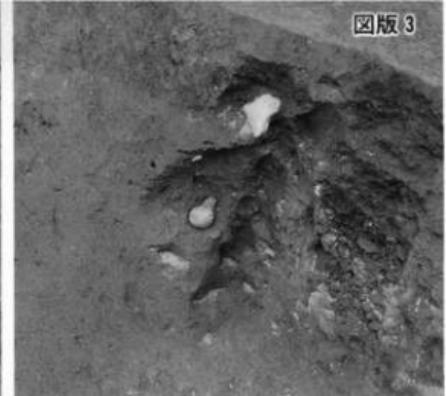
SI 1 石出土状況



SI 2 全景



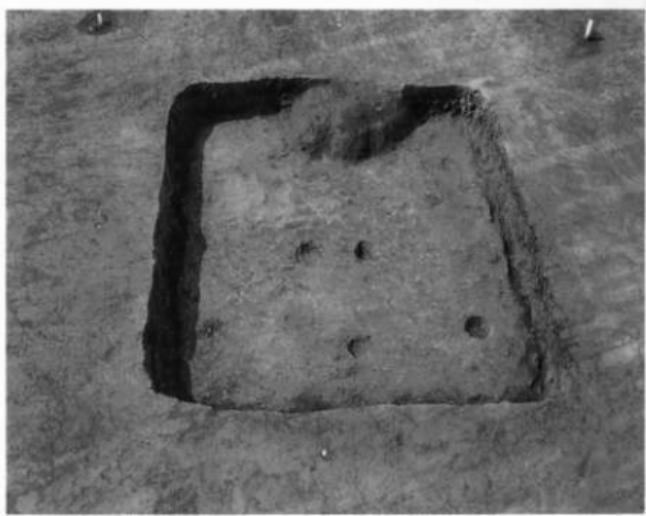
SI 2 玉出土状況



SI 2 カマド周辺遺物出土状況



SI 3 全景

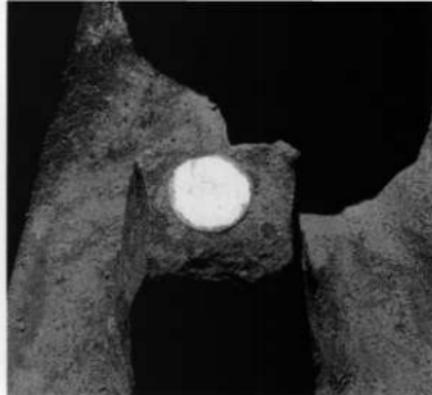


SI 4 全景

図版4



SI 4 カマド遺物出土状況



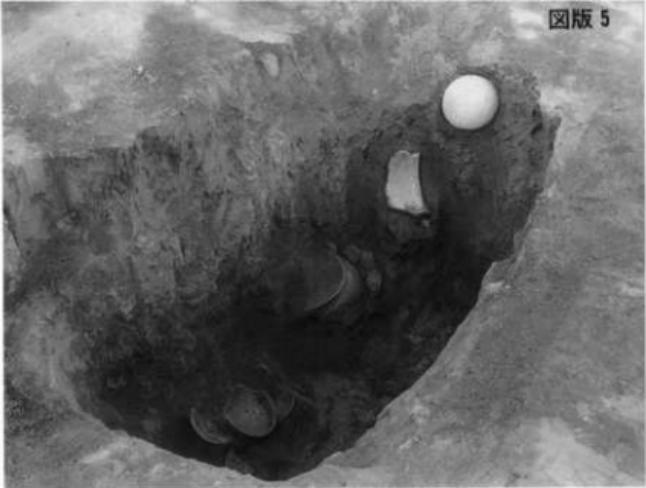
SI 4 墨書き土器出土状況



SI 5 全景



SI 6 全景



SI 6 貯藏穴
遺物出土状況



SI 7 全景



SI 8 全景



SI 8 カマド
遺物出土状況



SI 9 全景



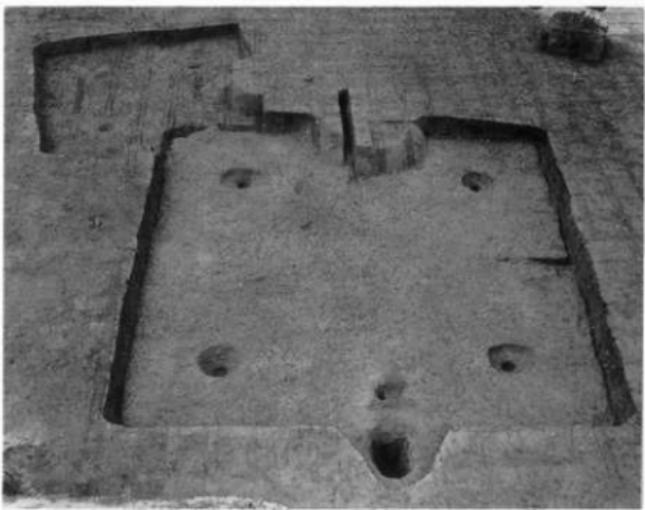
SI 10 全景



SI 10 カマド
遺物出土状況



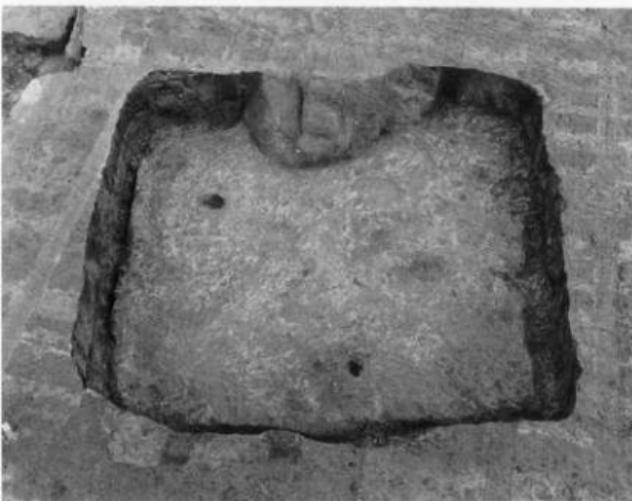
SI 11 全景



SI 12 全景



SI 12 カマド



SI 13 全景

SI 13 遺物出土状況(1)



SI 13 遺物出土状況(2)





SI 14 全景



SI 14 カマド
遺物出土状況



SI 15 全景



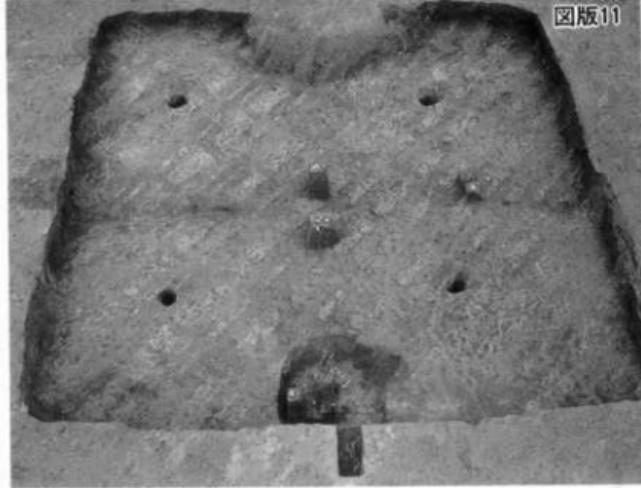
SI 16 全景



SI 17 全景



SI 17 貯藏穴



SI 18 全景



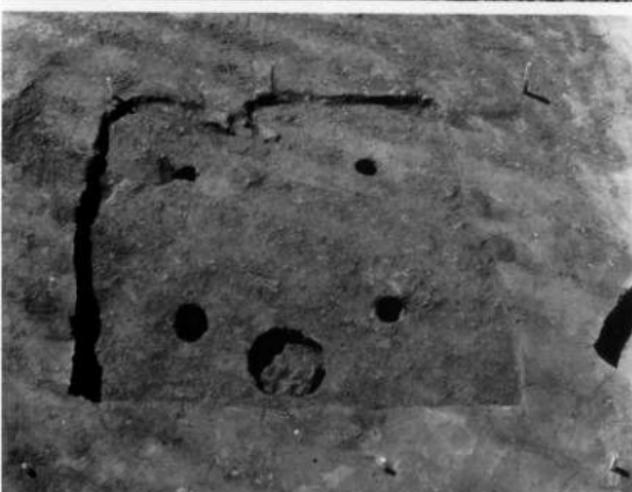
SI 18
遺物出土状況(1)



SI 18
遺物出土状況(2)



SI 19 全景



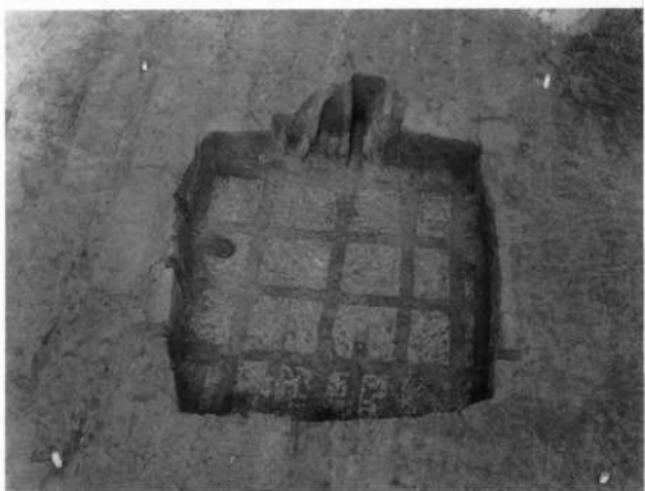
SI 20 全景



SI 21 全景



SI 22 全景



SI 23 全景



SI 24 全景



SE 1 全景



SE 2 全景



SE 2
馬骨出土状況(1)



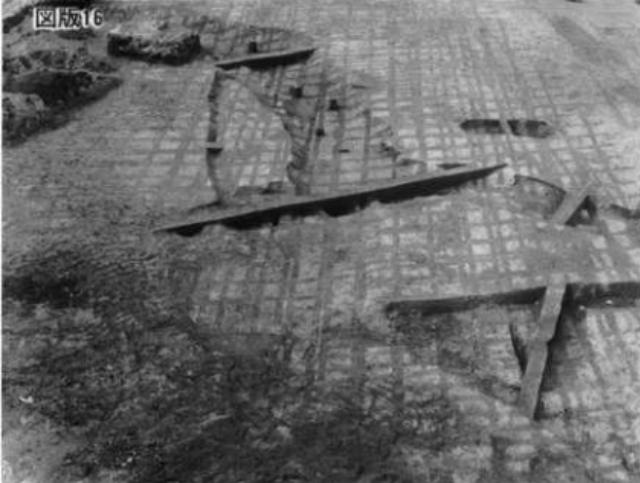
SE 2
馬骨出土状況(2)



SE 3 全景



SX 1 全景



SX 2 全景



SA 1 全景



SA 2 全景



SA 3 全景



SA 4 全景



SD 4 全景



SD 16 全景



SD 17 全景



SD 18 全景



SI 1-1



SI 1-4



SI 1-9



SI 1-13



SI 1-11



SI 1-14



SI 1-15



SI 1-21



SI 2-2



SI 1-24



SI 3-1



SI 3-2



SI 3-5



SI 3-7



SI 5-2



SI 5-6



SI 6-1



SI 6-3



SI 6-2



SI 8-1



SI 6-5



SI 8-2



SI 8-8



SI 9-1



SI 10-5



SI 10-6



SI 10-7



SI 10-8



SI 10-15



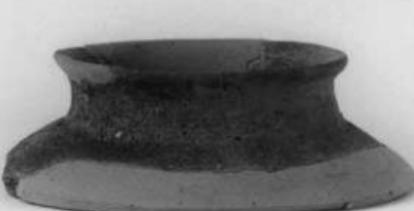
SI 10-12



SI 10-11



SI 10-13



SI 11-3



SI 11-1



SI 11-4



SI 12-3



SI 12-5



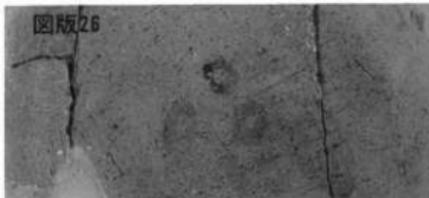
SI 12-9



図版24



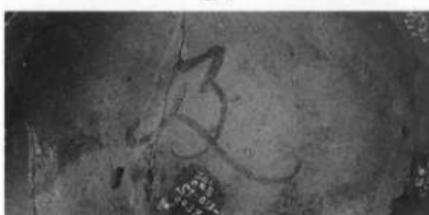




SI 4



SI 4



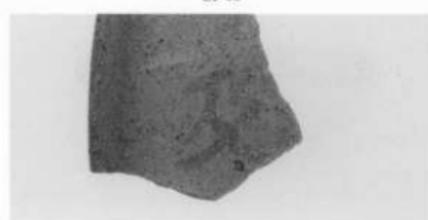
SI 13



SI 13

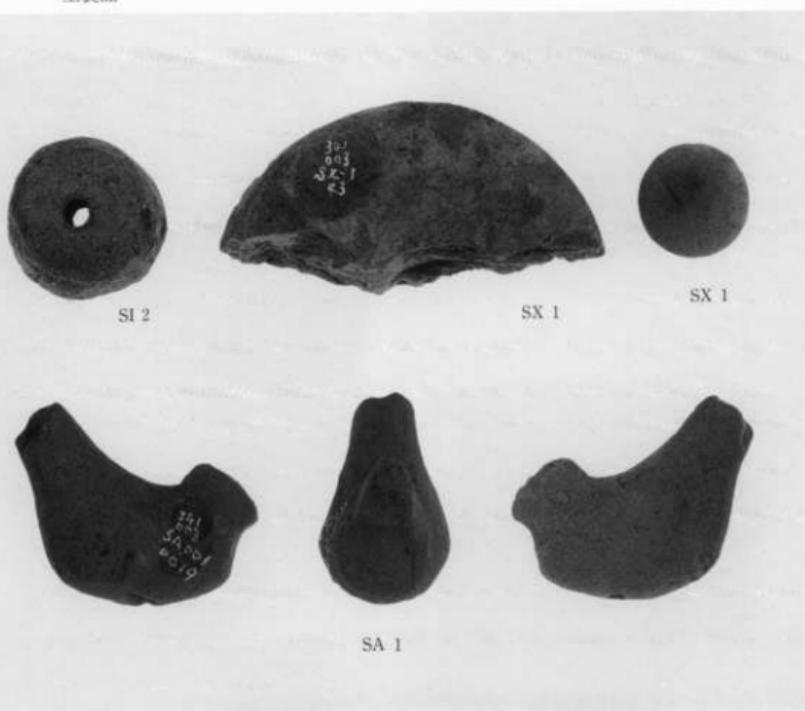


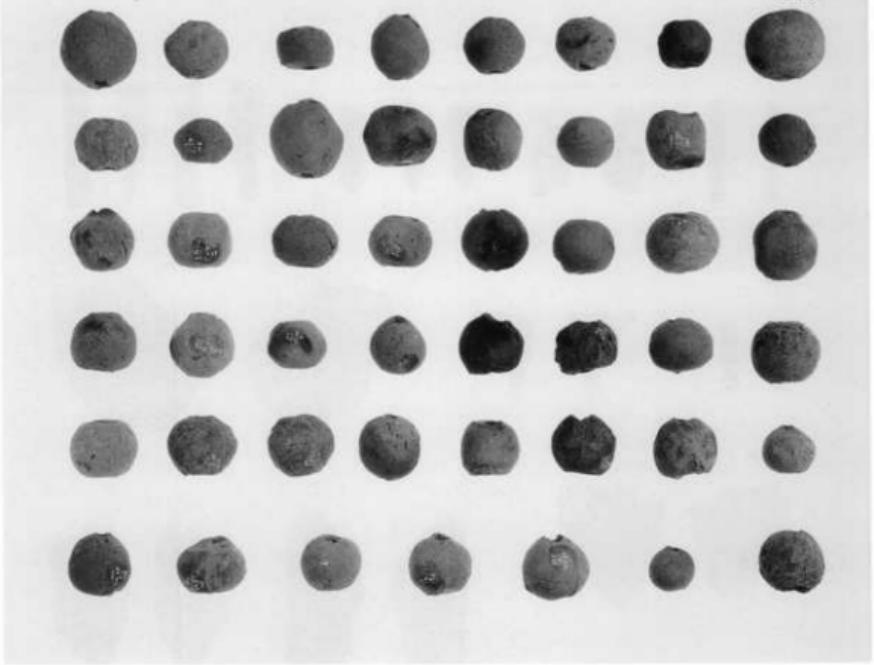
SI 13



SD 8

土製品

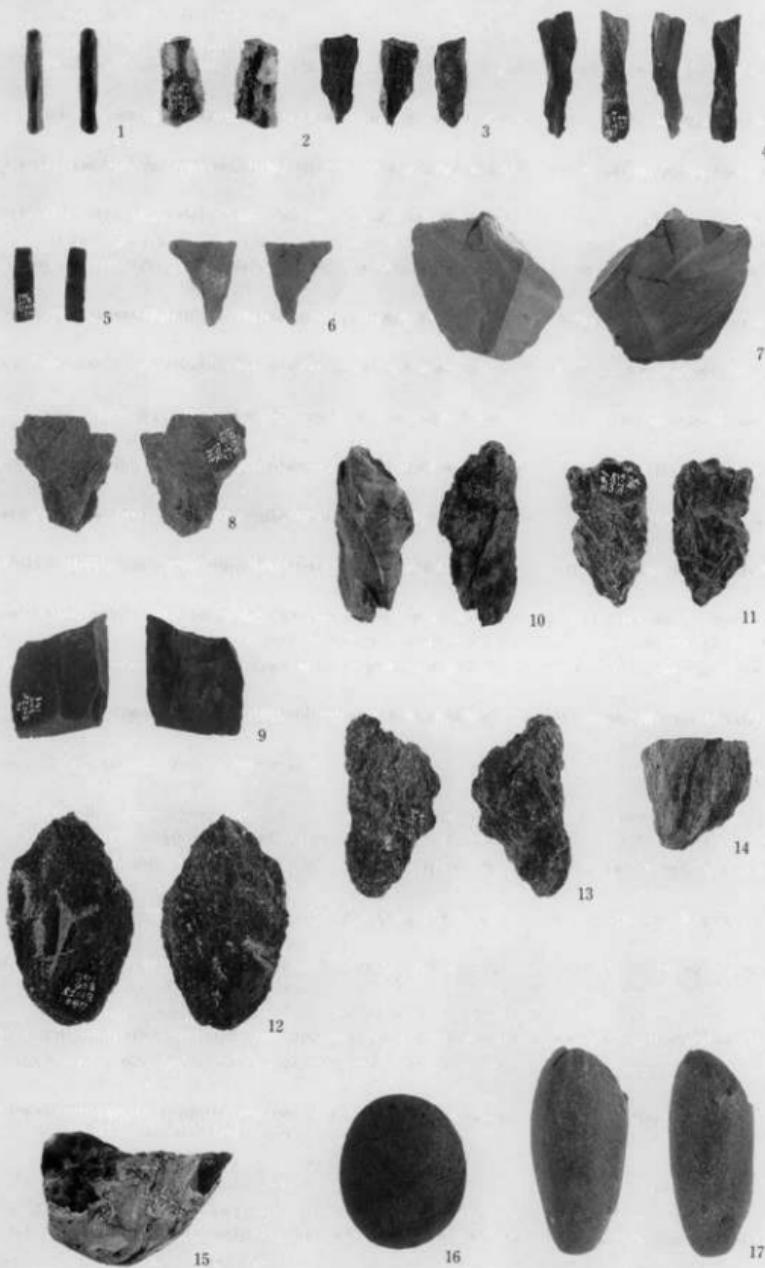




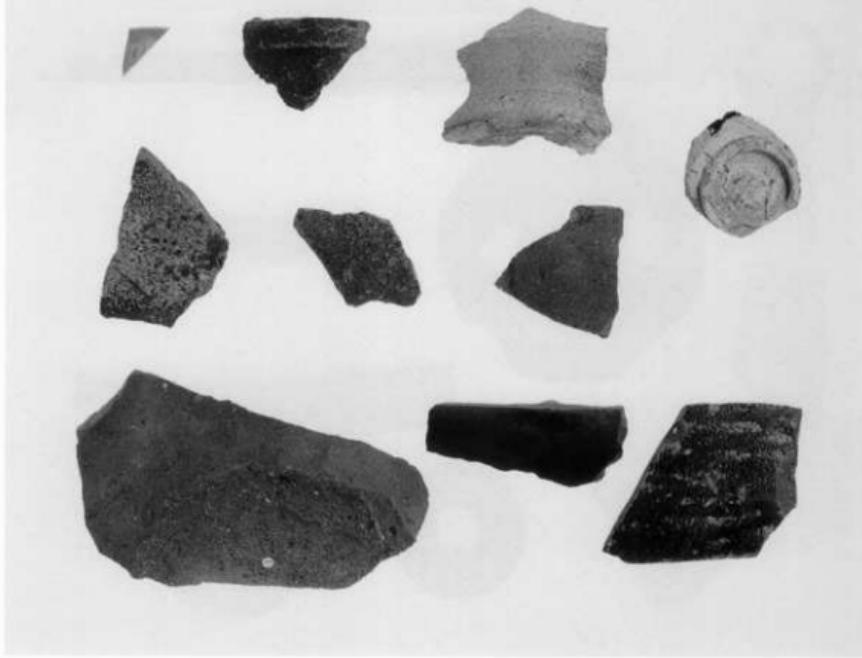
土玉

砾石





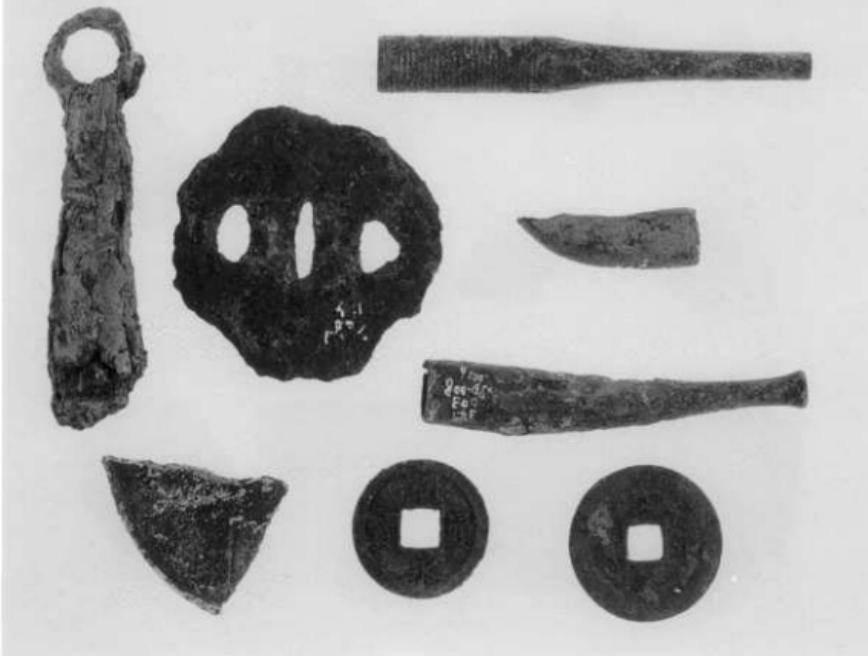
玉製作関連石器



陶磁器 外面

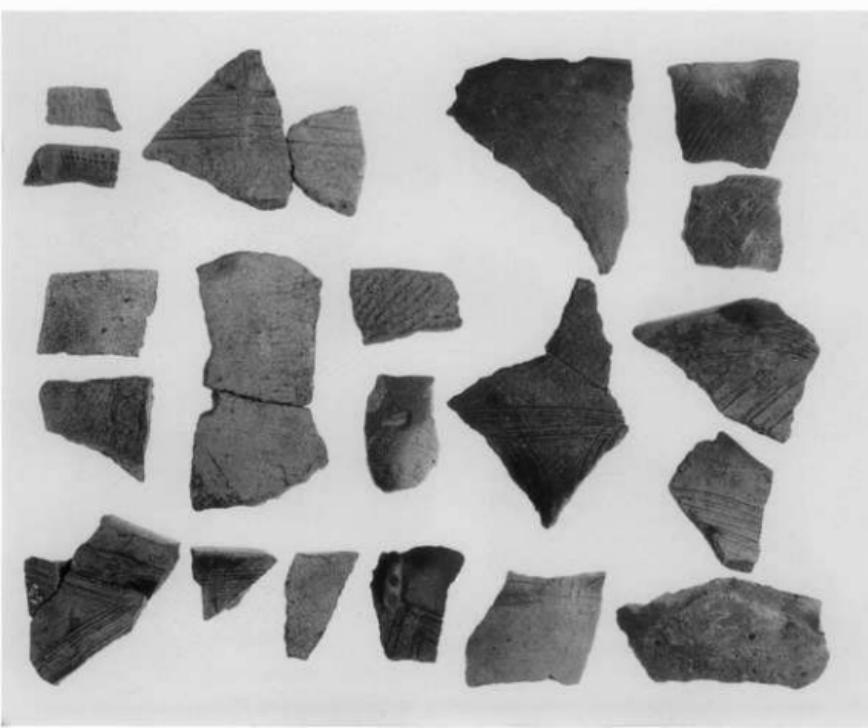
陶磁器 内面





金属器

縄文土器



報告書抄録

| | |
|--------|--------------------------|
| フリガナ | シモフサマチフコウジイセキ |
| 書名 | 下総町不光寺遺跡 |
| 副書名 | 一般県道成田下総線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書 |
| 巻次 | III |
| シリーズ名 | 千葉県文化財センター調査報告 |
| シリーズ番号 | 第230集 |
| 編著者名 | 萩原恭一 |
| 編集機関 | 財団法人 千葉県文化財センター |
| 所在地 | 〒 284 千葉県四街道市施渡 809-2 |
| 発行年 | 西暦 1993年9月30日 |

| フリガナ 所収遺跡名 | フリガナ 所在地 | コード | | 北緯 ° ° ° | 東緯 ° ° ° | 調査期間 | 調査面積 m ² | 調査原因 |
|---------------|---|-------|------|-------------|-------------|-----------------------|------------------------|------|
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| フコウジ 不光寺 | モトリグンチセフサマチ 香取郡下総町 モトロクアフコウジ 名木字不光寺963 ほか | 12341 | 003 | 35 52 22 | 140 23 45 | 19870601- 19870930 | 3,500 | 道路建設 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|-------|----|----------------|--|---|---------------|
| 不光寺 | 集落 | 古墳 平安 中世 | 竪穴住居 19軒 古墳址 2基 竪穴住居 4軒 溝 20条 柵列 5列 井戸 2基 | 土師器 須恵器 灰釉陶器 土玉 土製防錆車 鳥形土製品 砥石 石 砧 切子玉 滑石等玉未製品 中世陶器 煙管 鉄製鐸 縄文土器片 | 井戸内から馬骨 7体分出土 |

千葉県文化財センター調査報告 第230集

下総町不光寺遺跡

一般県道成田下総線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書III

平成5年3月25日 印刷

平成5年3月31日 発行

発 行 千 葉 県 土 木 部

千葉県千葉市中央区市場町1-1

編 集 財團法人 千葉県文化財センター

〒284千葉県四街道市鹿渡809-2

phone:043(422)8811

印 刷 株式会社 正 文 社

千葉県千葉市中央区都町2-5-5